
伝説の武器(笑)、創りますか？

ディアズ・R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説の武器（笑）、創りますか？

【Nコード】

N5380V

【作者名】

ディアズ・R

【あらすじ】

とにかく不幸な青年が、死んで異世界に転生！
とりあえず、やる気無し！

目立たないようにしていたら会話が苦手に！？

それでも、姉の為にチートな武器を造る？

魔界とか天界とかいろいろ巻き込んで大騒動！？

今日も今日とて、普通に過ごすのか？

登場人物一覧（前書き）

読んでから見た方がいいと思いますね……微妙にネタバレですし。
読ませてしまえば、どうにかなるとか……思ってますよ？

まあ、設定から読んでどんな小説かわかりそうなら、いいですけど。

多分わかりませんよ？

世界についてや魔法の種類の設定、書いてないから。

その方、詳しく書いた方がいいのかな？

この小説が、書き終わったらでいい？

登場人物一覧

真界の住人

ミーシャ・ラクロワンダ・アルテミシア

主人公

元は麻峯 あさみね 椰笈 やおい。

いろいろな不幸な目にあって死亡後、何故か転生。

髪は空色で、腰辺りまである。

瞳は右が金色で、左が虹色。

左目はあらゆる流れを見る事が出来る一種の神眼。

左目は普段閉じている。

顔は上の中ほどの可愛い系。

身長、手、足は小さい。

使用可能能力

次元支配

空間を切り裂き次元の中を自由に操れる反則能力。

概念付加

いろいろな武器を創るのに役に立つ。

リユーネ・クライア・アルテミシア

姉上

金髪のショートヘア。

瞳は綺麗な碧。

とても美人。

ミーシャラブ。
ブラコン。

アメリア・キュレイス・アルテミシア
母

金髪蒼眼の母性あふれる母。
ダメな人。

シルビア・レーベン
メイドさん

青髪金眼の大人な女性。
何でもできるスーパーメイド。

レズマイス・グランベルド・デステント
デステント王国の王
豪華な衣装を着たおっさん。
カリスマがすごい。

クリス・リファリア
双子の片割れ
デステント王国第一騎士団隊長。
蒼髪赤眼の美人。

魔界の住人

ルシファー

七つの大罪《傲慢》

明けの明星。

超聴覚を持っている。

停止結界を使える。

妖刀・神切りを所有する。

黒髪金眼。

全魔王中最強の魔王。

アラストル

七つの大罪《憤怒》

復讐者。

地獄の魔神。

元男で、現女。

赤髪のサイドテールで、オレンジの瞳。

本気になると、黒い炎を操る。

レヴィアタン

七つの大罪《嫉妬》

フリフリの付いた服が好きな、美人。

真の姿は、海蛇の様な竜。

蒼髪碧眼。

嫉妬の仕方によって、強さが上下する。

リリス

七つの大罪《怠惰》

露出の多い服を着た美少女。

紫のツインテールで、赤い瞳。

七つの大罪の中では、一番戦闘能力が無い。

ベヒモス

七つの大罪《強欲》

小さい子供で、男か女か判断できない。

真の姿は、巨大なサイの様な見た目。

銀髪金眼。

アイスやケーキなどのお菓子類が好物。

ベルゼブブ

七つの大罪《暴食》

紳士のような青年。

蠅の王。

金髪碧眼。

肉体的にズタズタにされる役……でも死なない。

アスモデウス

七つの大罪《色欲》

消滅済み。

やられる所すら出ません。

サタン

七つの大罪《真の憤怒》

工房を持っていたおじいちゃん。

黒髪黒目。

本気にならないとただのおっさん。

マモン

七つの大罪《新の色欲》

ホントは強欲だけど、色欲の方が空いていたのでこうなった。

眼鏡美人秘書。

黒髪蒼眼。

可愛い物に異常な愛を見せる。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

天界の住人

レイ

一応死人。

ミーシャとリユーネの父親であり、アメリアの夫。
とある理由により、生き返っている。

永遠の中二病。

ミカエル

四大天使の争いを鎮める者。

金髪銀眼の中性的な者。

性別は自由に変更でき、戦闘中が男で通常時が女。
敵には容赦しないが、味方には甘い。

ガブリエル

四大天使の言葉を伝える者。

エメラルドカラーの長髪で、眼を閉じた儚げな女性。

四大天使としての名前と違い、余り喋らない。

ラファエル

四大天使の癒しを司る者。

琥珀色の髪で、優しい眼差しの女性。

全天使の中で、一番優しい方。

ウリエル

四大天使の裁きを与える者。

真紅の髪の好青年。

光り輝く炎を操る。

目的の為なら、どんな手段でも使う。

登場人物一覧（後書き）

次は、登場した武器一覧。

多分、そこだけ見てもわけがわからないと思われる。

自分がわからないから、わかられると困る……作者として。

四大大使は、勝手に組ませました。

天使は皆、銀の瞳固定です。

武器一覧（前書き）

ダメだ、章のタイトルが思いつかない。

誰か考えてくれない？

ピッタリだと思ったら変えるから。

武器一覧

エクス・カリバー
約束された勝利の剣

スキルは、【真名開放】 【風王結界】 【換装】 【空破斬】 【魔力開放】 【直感】

下位の概念は、【攻撃速度上昇】 【筋力上昇】 【素早さ上昇】 【魔力上昇】 【集中力上昇】 【魔術無詠唱化】 【魔術無詠唱化】

中位の概念は、【切断】 【魔法反射】

上位の概念は、【不滅】 【選定】 【精神感応】

アヴァロン
全て遠き理想郷

スキルは、【真名開放】 【瞑想】 【加速】

下位の概念は、【魔力上昇】 【回復速度上昇】 【魔力回復速度上昇】

【常時体力回復】 【常時魔力回復】 【集中力上昇】

中位の概念は、【魔法反射】

上位の概念は、【次元結界】 【不滅】 【選定】

次元の切り手

護身用のナイフ。

スキルは、【次元切断】 【換装】 【空破斬】 【瞑想】 【加速】 【直感】

下位の概念は、【素早さ上昇】 【魔力上昇】 【回復速度上昇】 【魔力回復速度上昇】 【常時体力回復】 【常時魔力回復】 【魔術無詠唱化】

中位の概念は、【次元障壁】 【魔法反射】

上位の概念は、【不滅】 【選定】

クルスティア
神系の結び目
金色の腕輪型。

スキル、【自在操作】 【感覚共感】 【自動防御】 【拘束術】
下位の概念、【集中力上昇】 【精神集中】
中位の概念、【切断】 【魔力無効】 【魔術無効】
上位の概念、【不滅】

グレイブス・ガンズ
絶望を与える神銃

アンチ・マテリアル・ライフル
黒い折りたたみ式の対物ライフル。

スキル、【貫通】 【拡散】 【銃弾生成】 【直感】
下位の概念、【魔力上昇】 【魔力回復速度上昇】 【常時魔力回復】
【集中力上昇】 【軽量化】
中位の概念、【気配遮断】 【気配察知】 【魔障壁】 【思考加速】
上位の概念、【不滅】 【必中】

ラブ・スレイブ
愛の奴隷

ピンク色の鞭。

スキル、【人格変更】 【服従】 【調教】
下位の概念、【感覚強化】 【射程操作】
中位の概念、【魔力無効】
上位の概念、【不滅】
絶対概念、【ドM化】

スイセン
翠扇

水色の扇。

スキル、【受け流し】 【胡蝶蘭】 【光竜招来】
下位の概念、【魔力上昇】 【魔力回復速度上昇】 【常時魔力回復】
中位の概念、【良く弾く】
上位の概念、【不滅】

ゲイ・ボルク
刺し穿つ死棘の槍

紅い槍。

スキル、【ガード・ブレイク】【ストライク・ウェーブ】【デス・バイツ】【瞑想】【加速】【直感】

下位の概念は、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【魔力上昇】【魔力回復速度上昇】【常時魔力回復】【集中力上昇】【軽量化】

中位の概念は、【気配察知】【魔障壁】

上位の概念は、【不滅】【選定】【精神感応】【呪い・感情】

アイス・ザ・サイレント・ドリーム
氷結せし沈黙の夢

青白い大鎌。

スキル、【沈黙の円舞曲】サイレント・ワルツ【加速】【直感】【氷結】

下位の概念は、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【魔力上昇】【魔力回復速度上昇】【常時魔力回復】【集中力上昇】

中位の概念は、【切断】【魔術無効】

上位の概念は、【不滅】【選定】【精神感応】【呪い・魔力】

ウィザース・ロッド
大魔道士の誓杖

灰色の杖。

スキル、【崩壊の火炎】【再生の流水】【英雄たる由縁】【術式固定】

下位の概念、【魔力上昇】【魔力回復速度上昇】【常時魔力回復】
【集中力上昇】【軽量化】

中位の概念、【魔障壁】【魔力吸収】

上位の概念、【不滅】

ルシフェル・ヴァルキリー
聖剣・天界の戦乙女

輝く白い剣。

スキル、【覚醒】【聖人化】【超直感】【罪】

上位に概念、【不滅】【魔法吸収】【精神感応】【聖なる守護】
【対魔障壁】【肉体瞬間回復】

絶対概念、【選定消滅】【固定選定】【光】

魔剣・魔界の戦乙女

ルシファー・ヴァルキリー

禍々しい黒い剣。

スキル、【解放】【魔人化】【超加速】【罰】

上位に概念、【不滅】【魔術吸収】【精神感応】【邪なる加護】【

対物障壁】【魔力瞬間回復】

絶対概念、【選定消滅】【固定選定】【闇】

果て見えぬ絶望の園

ライン・オブ・ザ・ガーデン

片手で持てるスイッチ型。

スイッチを押すと大気圏外に巨大な衛星砲が転移され、スイッチを持っている人以外を全て消し去る。

スキル、【次元転移】【承認機能】

絶対概念、【存在維持】【存在消滅】

熾天覆う七つの円環

ロー・アイアス

花卉1枚で、ディガイアの魔王様の奥義であるメテオンパクトを防げる。

スキル、【自動防御】【自動再生】【体内保存化】【魔力貯蓄】【魔力自動生成】

上位の概念、【魔術吸収】【魔法吸収】【気配察知】

絶対概念、【加護】【守護】【最適化】

混沌を運びし大空

カオス・オブ・スカイ

右手用で、空色の刃が美しく鋭い、斬ることを追求した大剣。

スキル、【装飾化】【覚醒】【断罪剣】

上位の概念は、【不滅】【対空強化】

絶対概念、【断絶】【固定選定】【選定消滅】【自己成長】

アビス・ザ・アース
奈落へ誘いし大地

左手用で、金色の刃が歪で潰れている、砕くことを追求した大剣。

スキル、【装飾化】【解放】【地烈波】

上位の概念、【不滅】【対地強化】

絶対概念、【粉碎】【固定選定】【選定消滅】【自己成長】

運命の導き

肉体や思考を自由に变化させる為の指輪。

時間制限付きで三分のみ使用可能。

スキル、【肉体操作】【精神操作】

きんこうせん
金蛟剪

七匹七色の竜を召喚する事の出来る物。

スキル、【火竜召喚】【水竜召喚】【風竜召喚】【雷竜召喚】【土

竜召喚】【氷竜召喚】【闇竜召喚】

上位の概念、【不滅】【精神感応】【自律思考】

オーバー・ザ・ライデン
裁き降す雷電

帯電している、

スキル、【放電】【加速】【直感】ライティング・ジャッジメント【雷鳴の裁き】

下位の概念、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【集中

力上昇】【精神集中】

中位の概念、【嗅覚強化】【聴覚強化】【気配察知】

上位の概念、【不滅】【呪い・視覚】

ばんこはん
盤古幡

地球儀サイズの黒い球。

スキル、【増殖】【重力操作】【視覚共有】【聴覚共有】【魔力操
作】

下位の概念、【集中力上昇】【精神集中】

中位の概念、【視覚強化】【聴覚強化】

上位の概念、【不滅】【選定】

絶対概念、【甘い】

ドリーム・トンファー
夢見る者の礎

ミスリル製の美しいトンファー。

スキル、【トンファー武術（笑）】【加速】【直感】【心眼】

下位の概念、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】

上位の概念、【魔力収集】【不滅】【選定】

絶対概念、【辛い】

武器一覧（後書き）

ここだけ見てもわけがわからないと思う。

ゆえに、次の概念の設定を見てくださいな。

それでも、わからない可能性がありますかね。

概念一覧と設定（前書き）

あらためて見直すと、自分がすごい中二病に罹っていると認識させられる。

どうして、こんなになっちゃったんだろ？

妙に人気になっちゃったからだろうか？

嬉しいんだけど……なんだかなあゝ

概念一覧と設定

概念付加にもいろいろと調節が出来る。

スキル、下位、中位、上位、絶対概念の五つ。

順に優先度が変わってくる。

下位の概念より中位の概念、中位の概念より上位の概念、あらゆる概念で絶対的に優先されるのが絶対概念。

スキルは、おまけみたいなもの。

おまけで、思い浮かべた武器防具、アクセサリを創る事が出来る。それ相応に時間は掛かる。

ただの剣に強力な概念を付けると、剣が耐えられずに壊れる。

- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・

スキル一覧

【空破斬】

魔力を初級魔法程度使って、斬撃をまっすぐ飛ばすことができる。

【瞑想】

何もしていないときに勝手に勝手に発動して、体力と魔力を高速回復する。

【加速】

通常の三倍ほどの速度で行動できる。

もちろん、発動中は体に赤いオーラを纏う。

【真名開放】

魔力を八割使う代わりにアレが出せる。

【風王結界】

武器透過やら、攻撃やらが出る。

【換装】

どんな服に換装するかは、人によって代わる。

【魔力開放】

魔力を放出し続ける代わりに、ある程度の魔力を持った攻撃を防げる。

【直感】

第六感に目覚める。

【次元切断】

空間を切り裂いてその切り裂いた先にある次元に入ることができる。

【自在操作】

見えないほどの細く、決して切れない糸を無限に出し入れできる。

【感覚共感】

糸に視覚、聴覚情報を追加して、腕輪に繋がっている糸のある場所なら何処でも見て聞くことができる。

【自動防御】

危険な攻撃を自動で防御する。

【拘束術】

相手を縛るスキル。
どんな縛りかは、使ってからのお楽しみ。

【貫通】

遠距離武器専用の概念。

【拡散】

遠距離武器専用の概念。

【銃弾生成】

魔力を使って銃弾を創り続ける。

【人格変更】

所謂二重人格。

自分が何をしたかの記憶は残る。

【服従】

人型であれば誰にでも効く。

魔力抵抗値が高い、自分の意志が強い相手には効かない。

【調教】

動物などの人で無いものに使うと従うようになる。

大きさや強さによって聞かない個体もいる。

【受け流し】

あらゆる攻撃を受け流すことができる。
それ相応の技術の身体能力があれば。

【胡蝶蘭】

チヨウチヨの様な光を出して敵を幻惑する。

【光竜招来】

魔力を半分以上使う変わりに光属性の魔力でできた竜（蛇型）を役でできる。

魔力が切れると自然消滅。

【ガード・ブレイク】

あらゆる防御を貫く。

上位の概念に加護や守りがある場合は、無効化される。

【ストライク・ウェーブ】

地面に突き立てる事によって広範囲に純粹な魔力の波を放つ。

【デス・バイツ】

急所に当たった時に発動する。

基本的に意味は無い。

心臓に刺せばそれで死ぬから。

バンパイアなどに有効。

頭、心臓に効果あり。

【沈黙の円舞曲】
サイレント・ワルツ

真横に鎌を振る事によって一定距離を全て切り裂く。

【氷結】

斬ったものを凍らせる。

凍らせないこともできる。

【崩壊の火炎】

炎に触れたものを崩壊させる魔法。

【再生の流水】

傷や病気などを治す魔法。

【英雄たる由縁】

自分以外を強化することができる魔法。

武器防具兵士を強化する為の魔法。

【術式固定】

複数の魔法を同時に使えるようになる。

数日なら、発動しないで保つことができる。

【覚醒】

武器にのみ有効な概念。

武器の力を覚醒させて、絶大な力を発動する。

【聖人化】

見た目に変化は無いが、身体能力を上昇する。
ただし、天界でなければ意味は無い。

【超直感】

直感の強化版。

【罪】

触れたモノを浄化して、意識を奪う。

【解放】

武器にのみ有効な概念。

武器の力を解放して、真の力を使う事ができる。

【魔人化】

見た目に変化は無いが、身体能力が上昇する。
ただし、魔界でなければ意味は無い。

【超加速】

加速の強化版。

【罰】

触れたモノを消化して、存在を消す。

【次元転移】

指定した場所がどこであろうと瞬間移動する魔法。

【承認機能】

所有者がスイッチを押した時に撃つか撃たないかを決めることが出来る。

コレを決められるのは、設定された者だけ。

【自動再生】

使っていない間に大気中の魔力を使って自動で修復されていく。

【体内保存化】

武器、防具、装飾品などと違い持たなくていい。

【魔力貯蓄】

常に魔力を貯め続ける。
容量は、ほぼ無限。

【魔力自动生成】

常に魔力を創り続ける。

魔力量が限界を超えるとこの概念をつけた物が壊れる。

【装飾化】

武器を腕輪やネックレスなどにする。

【断罪剣】

敵を斬れば斬るほど切れ味を強化する。

【火竜召喚】 【水竜召喚】 【風竜召喚】 【雷竜召喚】 【土竜召喚】

【氷竜召喚】 【闇竜召喚】

召喚系は、そのままの通りで、召喚する事が出来る。

【肉体操作】

この概念の付いた物を持っていると、自身の肉体を自由に操作できる。

【精神操作】

この概念の付いた物を持っていると、自身の精神を自由に操作できる。

【地烈波】

地面に叩きつけることで、少しの間地面を自在に操ることが出来る。

【放電】

電気を放つ事が出来る。

自身に纏って、肉体の限界を無理矢理出すなどいろいろ使い道がある。

ライトニング・ジャッシュメント
【雷鳴の裁き】

・
・
・

下位の概念一覧

【攻撃速度上昇】

【筋力上昇】

【素早さ上昇】

【魔力上昇】

【回復速度上昇】

【魔力回復速度上昇】

【常時体力回復】

【常時魔力回復】

【集中力上昇】

【魔術無詠唱化】

あらゆる魔術を無詠唱で放てる。

やろつと思えば、上級の魔術も無詠唱で使えるようになる。

【精神集中】

あらゆる感覚が鋭敏になる。

【輕量化】

ただ軽くするだけ。

【感覺強化】

あらゆる感覚が倍以上になる。
痛さも、快感も、倍。

【射程操作】

自分の意のままに伸ばしたり縮めたりすることができる。

-
- A 5x5 grid of dots. The top-left dot is missing. The dots are arranged in a staircase pattern, with the number of dots in each row decreasing from 5 in the top row to 1 in the bottom row.

中位の概念一覧

【魔法反射】

魔力を消費し、一定時間あらゆる魔力を使った攻撃を反射できる。

【次元障壁】

次元をずらして、あらゆる攻撃から身を守る。

【魔力無効】

相手の魔力を封じることができる。

【魔術無効】

触れた魔術を無効化する。
自分の魔術及び魔法も使えない。

【気配遮断】

気配を消す事が出来る。

【気配察知】

気配を探知出来る様になる。

【魔障壁】

魔力を使う代わりに障壁を纏うことができる。
上級の魔術をくらっても一回は防げるぐらいの硬さ。

【思考加速】

一時的に思考を高速で働かせる事によって、あらゆる動きがゆっく
り動いているように見ることが出来る。
使いすぎると頭が痛くなる。

最悪、吹き飛ぶ。

加速の劣化版？

【良く弾く】

水や炎、剣による斬撃を受け止めることができる。
スキルの受け流しと使うことで、舞を踊る様な美しさで、敵からの
攻撃をくらわずにすむ。

【魔力吸収】

使った魔法、魔術、使われた魔法、魔術に使われた魔力の半分を自
分のものにする。
けて、魔術や魔法を無効化できるわけではない。

【嗅覚強化】

嗅覚を活性化させて、匂いを嗅ぎ分ける事が出来る様になる。

【聴覚強化】

聴覚を活性化させて、音を聞き分ける事が出来る様になる。

【視覚強化】

視覚を活性化させて、見る能力を上昇させる事が出来る。

【魔力収集】

倒した相手の魔力を吸収して、武器としての格が上がっていく。

- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・

上位の概念一覧

【次元結界】

あらゆる害のある攻撃を反射、または、消滅させる。

【不滅】

決して壊れない武器防具になる。

【選定】

選ばれた人以外に使うことが出来なくなる概念だ。

選ばれた人が持つと羽のように軽くなり、選ばれて無い人は持つことが出来ない。

地面に沈む。

【精神感応】

使い手の心しだいでいろいろ変わる。

【必中】

スコープに相手をいれて、引き金を引けば当たる。
防ぐことは可能。

【呪い・感情】

武器の使用中に感情が無くなる。
代わりに、普段倍の力が出せる。

【呪い・魔力】

魔力を常に消費し続けるが、かわりに普段の倍以上の身体能力になる。

【魔法吸収】

所有者に害のある魔法を全て吸収して、所有者の魔力に変換する。

【聖なる守護】

あらゆる闇の魔術を無効化する。

【対魔障壁】

魔力を消費して魔力のある攻撃を遮る。

【肉体瞬間回復】

大気中の魔力を集めて所有者の肉体が限界を超えたら瞬時に肉体を全快にする。

【魔術吸収】

所有者に害のある魔術を全て吸収して、所有者の魔力に変換する。

【邪なる加護】

あらゆる光の魔術を無効化する。

【対物障壁】

魔力を消費して基本的な物理攻撃を防ぐ障壁を張る。

【魔力瞬間回復】

大気中の魔力を集めて所有者の魔力が切れたら瞬時に魔力を全快にする。

【対空強化】

飛行が可能な相手と戦闘している時、身体能力を強化する。

【対地強化】

地面を動く相手と戦闘している時、身体能力を強化する。

【自律思考】

この概念を付けた物が自分で思考して、自由にする。

【呪い・視覚】

呪いを発動してる時、視覚を奪う代わりに身体能力と視覚以外の感覚を強化する。

絶対概念一覧

下位、中位、上位の概念としても付加できる。
斬り易くなる。

死んでも生き返る事ができる。
ただし使い捨ての一回限り。

そういう理由で使うとそのままの意味になる。
敵を仲間にする最低のネタ手段。

選定で選ばれた所有者が死んだ時に選定消滅する。

選定の強化版。

所有者が死ぬまで、所有者が変わらない。

魔界に属するモノに対し絶大な効果を誇る。

低級の悪魔等は、近付くことすらできない。
光の魔術を手足のように操ることができる。

【闇】

天界に属するモノに対し絶大な効果を誇る。
下位の天使等は、近付くことすらできない。
闇の魔術を手足のように操ることができる。

【存在維持】

その概念を持っている限りその存在を消される事が無くなる。

【存在消滅】

あらゆる存在を消し去る概念。
防ぐ方法は、存在維持だけ。

【加護】

所有者に対しての遠距離型の攻撃が全て外れる。
魔術や魔法、弓矢などが当たらなくなる。

【守護】

所有者に害のあることを遮る。
マグマの中や海の中で呼吸することが出来る。

【最適化】

所有者のもつとも快適な温度を保つ。
どれだけ熱い所だろうと、どれだけ寒い所だろうと、常に一定の温度でいられる。

【断絶】

斬ること以外が出来なくなるが、あらゆるモノを斬ることが出来る。

【粉碎】

砕く事しか出来なくなるが、あらゆるモノを砕くことが出来る。

【自己成長】

使えば使うほど使用者に最適化していく。

【甘い】

そのままの意味で、甘くなるだけ。

【辛い】

そのままの意味で、辛くなるだけ。

概念一覧と設定（後書き）

もつとネタ武器創ろうかな……あ、天使には『ハイ クールD×D』
の「ロギマス神滅具」を持たせる予定だったり。

ここに書く事じゃないね。

前書きと後書きって……一々変えるの面倒だよねえ！
だから、変えないよ？

プロローグ（前書き）

頑張れ主人公。

主人公にやる気はないが。

プロローグ

死んだな……いくら不幸でもアレは無いわ。

俺こと【麻峯 椰笈】あさみね やあひは、どこかの幻想を殺す人ぐらい不幸だ。

何かと命の危険が多い。

車が突っ込んできたり、トラックが横転して潰されそうになったりなどなど。

今回は飛行機が墜落してきた。

そして、とうとう死んだ。

ちなみに、今まで俺の巻き添えて死んだ人はいない。
今回も皆生きてんだろ。

とにかく、何が言いたいかと言うと……

「どこやねん」

「天界やよ」

空というか海というか、空のような海としか表現できないところに立っていた。

そして、上から羽の生えた人が

「もう、いいです、連れてって下さい……天使でしょ？」

「そうはいかんのよ」

きつと転生とかそんなんだろ？

俺はまだ死にたく……ああ、もう死んでるか。

とにかく、異世界とか行ったら間違いなく戦争に巻き込まれる。
しかも最終的に大変なことになるのは俺だけだし。

やってらんねえよ。

「なんか能力いるうゝ?」

「次元支配と概念付加が欲しい」

俺、この力で別次元に行つて、のんびり暮らすんだ。
失敗フラグ? そんなもの立てた覚えはない。

「ふゝむ……いいよ」

なんかすごいニヤツとしたんだけど!?
なんだ、何をする気だ!?

「いつてらゝ」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……いつてき」

「グッジョブ! あゝんど、グッバイ!」

輝かんばかりの笑顔で、親指を下に向けていた。
なんだこいつ?

最後に見たことと思つたのことはそんなことだった。

プロローグ（後書き）

主人公どうしよう。

可愛い系かな？

カッコイイ系かな？

それとも普通？

次回は、名前、変わります。

第一話（前書き）

連続

どろどろ

第一話

6歳の子供である。
名前はまだ無い。
募集してまゝす。

.....。

募集終了。

短い？知るか。

とゆうわけで、俺の名前はミーシャ・ラクロワンダ・アルテミシアに決まりました。

周りの人もこんな感じだからしょうがないだろ？

..... 嘘だよ、初めからあったよ。

髪はなんか輝いている空色。

腰辺りまで伸ばしてみた。

瞳は右が金色で、左が虹色。

なんとなく左目を閉じている。

顔の造りは、上の中ぐらい？

身長は..... うん。

能力は普通に使えた。

変な能力も増えてた。

でも、その能力におしゃぶりを持っていかなかったから使っていない。
結構気に入っていたのに.....。

〈閑話休題〉

この世界の説明をしておこう。

なんと魔法があつた。
以上。

……冗談だよ。

魔法にもいろいろ種類があるらしい。

火・水・風・雷・土・氷・光・闇の8種類の魔術。

回復・状態異常・強化・召喚の4種類の魔法。

他にも細かいのがあつた気がする。

あと、世界の分類としては、大きく分けて4つ。

天界・魔界・聖霊界・真界。

天界は天使達がいるといわれている。

あの天使は最上位の天使と似顔絵がそっくりだった。

魔界は悪魔達がいるといわれている。

デノートのデーク見たいなの。

アレは、死神か。

聖霊界は精霊や召喚獣がいるらしい。

最近、精霊が纏わりついてきてうざい。

真界は人間・エルフ・ドワーフ・妖精・魔族・竜族などがいるようだ。

魔族はいろいろいた。

リザードマン・ケットシーなどなど。

あと、エルフのお姉さんは美人だった。

今わかつているのは、こんなところかな？

あ、普通に中世ヨーロッパぐらいの技術だった。

何してんだろ。

一人寂しく頭の中で考え事なんて……。

でも、しょうがないじゃない。

誰も話し掛けて来ないんだもの。

唯一話しかけてくれるのは、メイドさんと姉上と母ぐらい。

メイドさんの名前は、シルビア・レーベンだが、メイドさんで良いと言われた。

何でもできるスーパーメイドだった。

青髪金眼の大人な女性。

姉上の名前は、リユーネ・クライア・アルテミシア。

とても優しく、いつも話しかけてくれる。

金髪碧眼の優秀で頼りがいのある姉。

母の名前は、アメリア・キュレイス・アルテミシア。

何故か得物を狙うような目で見られることがある。

母は、要警戒だ。

金髪蒼眼の母性あふれる母。

我が家は中流貴族らしい。

父は俺が生まれたところに死んだらしい。

正直どうでもいい。

我が家には、他にもいろいろな使用人がいるらしい。

「ミー」

この呼び方は……母？

「姉だ」

ごめんなさい。

上記三人は何故か俺の考えていることが偶にわかるらしい。

「母様の代わりに城に行くが、お前も来るか？」

姉上は、とても優秀だ。

13歳なのに大人と同等の力と知識を持っている。

金髪のショートヘアで、瞳は綺麗な碧で、とても美人だ。

簡単に言うと、リアルチートなう。

そんな姉上は、いない父の代わりをしている母の代わりを良くする。
そのときは、何故か俺を必ず誘ってくる。

何故だ？

「外、や」

「そうか……いや、なんだか嫌な予感がするから今日だけでも一緒
に行こう」

俺の語意力シヨボ。

嫌な予感ってなんやねん。

まあいいや、行つてやろうではないか。

今回だけ特別なんだからね！勘違いしないでよね！

「ん」

「行ってくれるか！よし、なら行こうか？」

「ん」

喋れんぜイ。

姉上が俺の手をとって我が家の外にある馬車に乗り込む。

そういえば、家の外、初めてだ。

第一話（後書き）

ミー君が脳内暴走。

ブローグの時のクールな感じが無くなった。

クールでもなかったか。

第二話（前書き）

またまた連続投稿

どうぞ

第二話

すごく、大きいです。

城でかすぎだお。

ナニがデカイと思ったよ？

「ミー、くだらない事を考えているな？」

ごめんなさい。

えゝこちらの城は、大体300年ほど昔に建てられた由緒正しい城らしいです。

外観は中々綺麗で、明るいイメージが出ている。

例えるなら、大聖堂？

城じゃないねゝ。

城内移動中。

「大人ばかりだが気にせずにな？」

「……ん」

大人がどうした！

かかってこいやゝ！

ちよつと緊張してたり。

「お前は賢いから大丈夫だ」

俺って賢い？

姉上が大きい扉を開ける。

その後ろに、トコトコ着いて行く。

歩幅小さい。

「おお、クライア君か……キュレイス殿は大事無いか？」

なんか豪華な衣装を着たおっさんが来た。

姉上に話しかける。

知り合いかな？

「はい。いろいろと忙しい身ですので、こついつ時ぐらい頼って欲しいものです」

「ははは、そう言わないでやるのも子供の仕事であるぞ？」

母は現在、風邪を引いています。

てか、このおっさん誰？

「ん？この子は？」

「ああ、ご紹介が遅れました。ミーシャです」

「おお、この子があのラクロワンダ君か」

「ミー、ご挨拶なさい」

きつと偉い人なんだろうな。

気の利いた事が言いたいZE！

「よろ、しく」

「聞いていた通りあまり喋るのが得意でないようだな」

サーセン。

「我は、この国デステント王国の王、レズマイス・グランベルド・デステントだ」

リアル王様キター。

だからどうしたよ？

ちなみに、この国は、この世界で、二番目に、有名な、国だ！
たしか、魔法とかがすごかったと思う。

「驚かないとは……少しつまらないな」

「無駄に達観している上に、感情表現が苦手ですから」

失礼な！

これでも感情豊かですよ？

日差しが強くて外がだるいとか。

歩幅が小さくて動くのがだるいとか。

声がうまくでないから喋るのがだるいとか。

……………。

俺は感情豊かだ！

「ふむ、まあよいか……では、何時もの所に座っていてくれ」

「わかりました。ミーおいで」

室内をよく観察すると、謁見の間のような広さで、裁判所のような感じになっている。

俺と姉上が座るのは、王座の右側で三列ある席の一番後ろだ。

少し席に座って、姉上とちよくちよく話していると、徐々に席が埋まってくる。

そして空席が両手で数えられるほどになったあたりで、王様が言う。

「これより、我が国に向かって来ている魔物の群れについての会議を始める！」

ゑ？

マジで？

つまり

「戦、争？」

その呟きは、誰にも聞かれることはなかった。

第二話（後書き）

どないしょ。

もうわけわかめ。

第三話（前書き）

実は連続投稿。

一時間ずらしてみた。
どうぞ。

第三話

いやゝ驚いた驚いた。

俺の運もここまでくるとすごいな。
関わると俺の命が危ないな。

ここは、大人しくしよう。

「今すぐに討伐軍を送るべきだ！」

「いや、ここは防備を調べて……」

「傭兵どもを雇って、戦わせればいい！」

「それでは資金がかかり過ぎる！」

こんなんばつか。

「……静まれ」

その一声に、混沌としていた場が静寂に包まれる。
カリスマ、パネエ。

「我は今回、討伐軍を送ろうと思っている」

その言葉に、お偉いさん達がざわつく。

「静粛に！」

王様のそばに控えていた美人な騎士様が一喝。
また、静かになる。
騎士様、カッケ。

「そこで、討伐軍の指揮をする者はいないか？」

誰も反応しない。

それどころか、下を向いたり、横を向いたりしている。

ダメダメやん。

かくゆう俺は、帰る気満々だけどな！

「誰もいないのか？」

「……ならば、私に討伐軍を指揮する栄誉をお与えください」
「む……」

何ともいえない空気を無視して、姉上が宣言する。
マジですか？

てか、この空気と言うとか、さすが姉上。

「姉…上」

「大丈夫だ、必ず、私は帰ってくる」

姉上が心配させないように、ゆっくりと言ってくる。

姉上は死なないだろうから、どうでもいい。

問題は、俺と一緒に行くのかどうかだ。

「僕…は？」

「ッ！？……お前は、お留守番だ」

一瞬の間が怖かったが、よかった。

一応、御守りのな物でも創ろうかな？

・
・
・

視点・リユーネ

「そこで、討伐軍の指揮をする者はいないか？」

王が、そう言った。

だが、誰もその声に応える者はいない。

「誰もいないのか？」

王が問いかける。

先ほどまで、討伐軍を送るべきだと言った者すら下を向いている。
これが今の貴族。

私腹を肥やし、己が欲を優先するだけの輩。

私は、こんな奴らとは違う！

「……ならば、私に討伐軍を指揮する栄誉をお与えください」
「む……」

私がそう言うと、王が少し考え始める。

他の貴族達は、なにやら小さな声で話し合っている。

安全なところから命令しかしない奴らに、何かを言われても何とも
思わない。

「姉…上」

「大丈夫だ、必ず、私は帰ってくる」

弟が心配そうに言うてくる。

私の弟は、とても賢い。

だからこそ、わかったのかもしれない。
このまま討伐軍を送っても、意味が無いと。

「僕…は？」

「ッ！？……お前は、お留守番だ」

この子は、自分も連れて行けというのか……
まだ、10歳にもなっていないこんな子供が……
いや、ミーは、私のことを、心配してくれているのだな。
血が繋がっていないければ、私の夫に欲しかったな。

「……では、リユーネ・クライア・アルテミシアよ、御主を討伐軍の指揮官として任命する。頼んだぞ」

「ハッ！必ずや我が国に勝利を！」

王の言葉に答える。

今は、私にできる事をするだけだ。

「……いき、てね？」

「ああ、私は必ず生きて、お前の元に返ってくるさ」

そう、私は必ず生きる。

お前を、ミーを守るのは、私だけなのだから。

・
・
・
・
・

今すぐにでも行きたいだろうけど少しの間、待っててもらえますかね？

略して、いきでね。

勘違いされた気がするけど、まあいいか。

第三話（後書き）

ウチの主人公に、シリアスは向かないのよ。
わかって。

では、また次回。

第四話（前書き）

最初から飛ばしすぎたかな？

でも、知らない間に何故か人気に……

このまま見てもらえるだろうか？

第四話

姉上が魔物と戦いに行く。

姉上の武器防具にいろいろ追加しておいた。

弄っている所を見つかつて、何度も怒られた。

概念付加で、武器防具を聖騎士、いや、勇者クラスのにしてみた。

勇者は、いわゆる英雄に与えられる称号みたいなものだ。

概念付加にもいろいろと調節が出来た。

スキル、下位、中位、上位、絶対概念の五つだ。

上から順に優先度が変わってくる。

下位の概念より中位の概念、中位の概念より上位の概念、あらゆる

概念で絶対的に優先されるのが絶対概念。

スキルは、おまけみたいなものだった。

大体こんな感じで調節してみた。

スキルは【空破斬】【瞑想】【加速】。

下位の概念は【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【魔力

上昇】【回復速度上昇】【魔力回復速度上昇】【常時体力回復】【

常時魔力回復】。

中位の概念は【切断】。

これだけあれば何とかなるだろう。

上位の概念と絶対概念は、神用の武器になってしまいうようなので、

やめておいた。

空破斬は、魔力を初級魔法程度使って、斬撃をまっすぐ飛ばすことができる。

瞑想は、何もしていないときに勝手に発動して、体力と魔力を高速回復する。

加速は、通常の三倍ほどの速度で行動できる。

もちろん、発動中は体に赤いオーラを纏う。

三倍は赤だと言う俺は、間違ってるのだろうか？

これは、発動型なので、俺が言わないと使えないかもしれない。

あとは、おまけで創った御守りを出発前に渡すぐらい。

とゆうわけで遊びます。

く討伐軍出発、当日く

「では、行つて来る」

「行つてらっしゃいませ、お嬢様」

「……こ、れ」

「ん？ネツクレスか？」

ネツクレス型の御守りを渡した。

ついでに、母は、前日に興奮のし過ぎで、寝込んでいる。

御守りの効果は、一回限りの絶対概念【完全再生】だ。

「これは、ガーネットかい？」

「ん？」

「ガーネットの意味は、たしか……」

「生命力やエネルギーですよ、お嬢様」

「そうか……ありがとう、ミー」

「ん」

おふう、拾った綺麗な石で創ったなんて言えない。

ガーネットだったとは……

「母様に言っておいてくれ、必ず帰ってくる、とな」

そう言つて、姉上は討伐軍の居る方へと向かつて行つた。

「……」

「さ、ミーシャ様。そろそろお屋敷にお入りください」
「……ん」

これで話し相手がいなくなってしまった。

寂しい。

自分から話し掛ける？

出来たらいいなあ。

我が家に入り、拾った石を魔改造することにした。

母は、いつ出るんだろう？

その夜、母の寝室から「私も…出たいよ」と囁り泣きが聞こえた。

明日は久しぶりに、一緒に寝てあげようかと考えたミーシャであった。

第四話（後書き）

母が不憫になった。

そのうち母メインのでも書いてみようかな？

ちなみに、次回は姉メイン。

第五話（前書き）

もう少し、戦闘描写を何とかしたい。

俺的には、ヘタだと思う。

どうぞ。

第五話

姉上が旅立って、次の日。

概念付加を使って遊んでいた。

ホントにいろいろできて楽しい。

今日は特に何もなかった。

以上。

・

・

・

視点・リユ・ネ

王の話では、ただ数が多いだけでそれほど強い個体はいないと言われていた。

が、今私の目の前にいるのは間違いなく魔王級の魔物だった。

私の周りには、死んでいった者達が大勢横たわっている。

私の後ろには、魔法特化の遠距離型とその護衛だけ。

「逃げられんな……」

もはや撤退などすることが出来ず、なんとか牽制して押しとどめている状態だ。

私が倒れれば、後ろの者達は、抵抗も出来ずに、死んでゆくだけだ。こいつだけでも

「倒す！」

父様から譲り受けた長剣を強く握り、斬りかかる。

この長剣、ミーが触り始めた辺りから、とても使いやすくなった。今着ている軽鎧も、着ているだけで魔力が回復したり体の疲れがほとんど消えた。

何かと不思議な弟であるが、帰ったらしっかりと聞き出さなくてはな。

「フッ！」

斜めから剣を振り下ろし、その勢いのままに、切り上げる。

自分でも驚くほどの剣速で、腕をあつさりと切り裂いた。

だが、相手は魔王級の魔物。

その程度では、すぐに再生してしまう。

剣に振り回されない様に相手の動きに注意を払い、一気に攻勢に出る。

なぎ払い、突き、切り上げ、無詠唱によるあらゆる初級魔術。

それでも致命傷を与えられずに反撃される。

長い爪による薙ぎ払い、無詠唱によるあらゆる中級魔術。

そして……上級の闇の魔術。

直撃すれば跡形もなく消滅させられるだろう。

だが、避けることなど出来ない。

後ろには、仲間がいる。

確かに、たいして一緒にいたわけでもない。

それでも、見捨てるなんて出来ない。

だからこそ

「私は、逃げるわけには」

魔術が放たれ、私にまっすぐ向かってくる。

あの魔物には、もう私を殺すこと以外に興味がないようだ。

なら、好都合！

「いけないんだああ！！！！」

向かってくる魔術に剣を切り落とす。

その時剣から何かが放たれ、ミーにもらった御守りが光り輝き砕け散った。

魔術が消えて魔物を見ると、真っ二つになっていた。

魔物の中心に核の様な黒い塊があったがそれごと真っ二つになっていた。

御守りも粉々で、修復不可能であった。

魔物達も魔王級がリーダーだったようで、残っていた全ての魔物が引いて行く。

「……ミー、帰ったらおしおきだ」

小さく呟き後ろにいた仲間達に告げる。

「この戦……私達の勝ちだあ！！」

『うおおおおお！！！！』

剣を掲げると皆も同じように武器を掲げる。

大歓声の中生き残った者達は死んでいった者達の為にも笑顔で泣いた。

私はそんな中で静かに黙祷する。

黙祷を終えて考えることは

「どんなおしおきにしようか」

そんなことだった。

・
・
・

視点・ミーシャ

何故だろう。

このままだと、とても恐ろしいことになりそうだ。

とりあえず、絶対防御の概念をかけた指輪を創ることにした。

余計酷い事になりそうな気がした。

諦めることにした。

姉上、俺はどうなるのでしょうか？

何故か姉上の極悪スマイルが思い浮かんだ。

第五話（後書き）

どないしたもんか……

姉の武器どうしよう。

やっぱ剣？

それとも槍？

あえての鉄球？

Sっぽく鎌？

安全面的に弓矢？

ここは、剣かな？

第六話（前書き）

姉、ブラコン、暴走。

どうぞ。

第六話

姉上が帰ってきた。

いろいろ質問された。

一緒に風呂に入ることになった。

おまけで一緒に寝ることになった。

……何故？

「森の工房」

我が家の近くにある森に建っている工房に来てみた。
髭モジャのおっさんがいた。

「なんのようだ？」

「……使って、い？」

「……邪魔はするなよ」

そう言々と自分の作業に集中し始めた。

許可が出たので、隅を使わせてもらうことにした。

姉上の剣が砕けてしまったので、その代わりでも造ろうと思っていた。
る。

何故か姉上が家に着いて鞘から剣を抜くと砕けていた。

かなり落ち込んでいた。

何やったらあんな風になるのだろうか？

そんなこんなで完成した。

「エクス、カリバー」

セイバーさんのエクスカリバーができた。

ついでに鞘としてアヴァロンも造った。

スキルは、【真名開放】【風王結界】【換装】【空破斬】【瞑想】
【加速】【魔力開放】【直感】。

下位の概念は、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【魔力上昇】
【回復速度上昇】【魔力回復速度上昇】【常時体力回復】
【常時魔力回復】【集中力上昇】【魔術無詠唱化】。

中位の概念は、【切断】【魔法反射】。

上位の概念は、【次元結界】【不滅】【選定】【精神感応】。
こんな感じだ。

真名開放は、魔力を八割使う代わりにアレが出せる。

風王結界は、武器透過やら、攻撃やらが出来る。

換装は、ネタとしてセイバーさんのあの戦闘服になれる。

魔力開放と直感は、セイバーさんが持っているのと同じ。

魔術無詠唱化は、そのままの意味で、あらゆる魔術を無詠唱で放てる。

やろうと思えば、上級の魔術も無詠唱で使えるようになる。

これが一番強いような……

魔法反射は、魔力を消費し、一定時間あらゆる魔力を使った攻撃を
反射できる。

次元結界は、アヴァロンの真名開放を使えば発動できる。

あらゆる害のある攻撃を反射、または、消滅させる。

不滅は、決して壊れない武器防具になる。

選定は、選ばれた人以外に使うことが出来なくなる概念だ。

選ばれた人が持つと羽のように軽くなり、選ばれて無い人は持つことが出来ない。

地面に沈む。

これで、姉上以外が使うことは出来ない。

精神感応は、使い手の心しだいでいろいろ変わる。

完成したので、姉上のところに行っていく。

「あり、がと」

「フン……暇になったらいつでも来い」
「ん」

意外といい人だ。

これが噂のツンデ

いろいろな都合で、カットです。

第六話（後書き）

次回、姉さらに暴走。

どうなる？

説明的なのが、長いな。

第七話（前書き）

姉上大暴走。

ブラコンにしすぎた。

第七話

視点・リュ・ネ

父様から頂いた剣を壊してしまうとは……まだまだ修行が足りないようだ。

そういえば、壊れた剣を持って落ち込んでいる私を見てから、ミーが何かしているようだ。

そんなことを考えていると、私の部屋のドアがノックされた。

「開いているぞ」

「姉、上」

入って来たのはミーだった。

なにやら布に包まれたミーより大きな物を抱えていた。とても可愛らしい。

何故私の弟は、こんなに可愛いのだろう？

「これ、あげ、る」

「ん？私にくれるのか？」

大きさと違って、とても軽い。

なんだこれは？

布を取ってみた。

そこから出て来たのは、とても綺麗で、とても美しい鞘とその鞘に収められた神々しい雰囲気放つ剣だった。

「ミ、ミー……これは、いったい……」

「造って、みた」

こんな物をミーが、造った？
鞘から剣を抜いてみる。

剣の刃は、両刃の長剣の様な形だったが、そこら辺にあるような剣ではなく、芸術品のような、それでいて、どんなモノでも切断できそうな剣だった。

剣から放たれる神々しい気配から、伝説に出てくるような神剣や聖剣のように感じる。

「ミー、この剣に名前はあるのか？」

「エクス、カリバー……本当の、名前は、約束された、勝利の、剣」

「エクスカリバー……約束された勝利の剣……」

「鞘は、アヴァ、ロン……全て、遠き、理想、郷」

「アヴァロン……全て遠き理想郷……か」

無意識にミーが言った名を、噛み締める様に呟く。

「姉、上が、困った、時、本当の、名前を、言えば、い」

「そう、か……ありがとう」

こんなにすごい物を私のために造ってくれた。
それだけで、満足だった。

先ほどまで、落ち込んでいたのが嘘の様な笑顔をミーに向ける。
ここでミーがとんでもないことを口にする。

「あと、それ、いち、おう、聖、剣」

「……は？」

この子は今なんと言った？
聖剣？

つまり、この子は聖剣を造ったのか？

「……フ、フフ、アハハハ……さすが私の弟だ」

他の女に渡したくないな。

既成事実でも作ってしまおうか？

何故かミーが、急いで出て行こうとする。

「まあ、待て」

「……や」

やっぱり可愛いな。

他の女に渡したくないな。

子供さえ作ってしまえば、誰も文句は言えないだろう。

「……」（姉上が変態になった気がする）

「失礼だぞ」

「……」（ごめんなさい）

「私が、ミー以外に性的興奮を覚えるとでも？」

「……」（貞操ピーンチ！）

「ふふ、安心しろ、私も初めてだからな」

「……」（何が！？）

「女にそんなことを言わせるな」

結果的に、ミーはまだそういうことが出来なかったので、一緒に寝るだけにした。

ミーは、やわらかいな。

寝ているミーの唇に自分の唇を重ねた事は、私だけの秘密だ。

第七話（後書き）

ためてた話が無くなった。

続きどうしよう。

とりあえずミーに護身用の武器を持たせようと思う。

ナイフは確定。

他にミーに持たせたい武器とかあったら言うてくださいな。

受付期限としては、2011年8月8日あたりまで。

そのぐらいには、続きを書く。

では！

第八話（前書き）

んゝ主人公の装備どうしよう。

決まらん。

ナイフしか。

第八話

なんだか寝てる間に何かをされた気がする。
気にしないで置くことにした。

護身用ナイフを造ってみた。

刃の長さは、拳二つ分。

刃の太さは、指ぐらい。

スキルは、【次元切断】【換装】【空破斬】【瞑想】【加速】【直感】。

下位の概念は、【素早さ上昇】【魔力上昇】【回復速度上昇】【魔力回復速度上昇】【常時体力回復】【常時魔力回復】【魔術無詠唱化】。

中位の概念は、【次元障壁】【魔法反射】。

上位の概念は、【不滅】【選定】。

次元切断は、空間を切り裂いてその切り裂いた先にある次元に入ることが出来る。

換装は、ネタとしてキラキラしている水色のドレス。

どんな服に換装するかは、人によって代わるんだよ！

趣味じゃないからな！

次元障壁は、ナイフの所有者の次元をずらして、あらゆる攻撃から身を守る。

腰辺りに付けている。

これで安全！

……過剰ですかね？

そのうち、ラピ タでも造ろうかな。

ム カ大佐ごっこしたい。

人がゴミの様だあ！！

……落ち着け、俺。

今更ながら、俺は何タイプなのだろう？

剣士？

魔法使い？

アーチャー？（赤い外套の弓兵ではない）

……アーチャーいいかも。

何造ろっかな

剣、槍、弓矢、鎌、ハンマー、鉄球、大剣、双剣、鉈、杖、ガント

レット、銃、長銃（スナイパーライフル的な物）、双銃、爪、糸、

反則装備？……どれがいいかな？

ナイフだけじゃなんだかなあ

金ぴか王のアレとかどうかな？

……やめとこ。

よし、決めた！

そうと決まれば、髭モジャのおっさんとおじいちゃんのところに行くぜ！

第八話（後書き）

まだ、ぎりぎり受け付けてます。

何もないと、反則装備？になりますよ？

俺としては、反則装備？か長銃。

第九話（前書き）

いろいろと参考になる武器を考えてくださってありがとうございます。

武器を造るのは今回だけではないので、基本、全部出て来るんじゃないかな～と思います。

では、どうぞ～

第九話

アンチ・マテリアル・ライフル
糸と対物ライフルを造ってみた。

糸の概念。

スキル、【自在操作】 【感覚共感】 【自動防御】 【拘束術】
下位の概念、【集中力上昇】 【精神集中】
中位の概念、【切断】 【魔力無効】 【魔術無効】
上位の概念、【不滅】

腕輪型。

自在操作は、見えないほどの細く、決して切れない糸を無限に出し
入れできる。

感覚共感は、糸に視覚、聴覚情報を追加して、腕輪に繋がっている
糸のある場所なら何処でも見て聞くことができる。

自動防御は、危険な攻撃を自動で防御する。

拘束術は、相手を縛るスキル。

どんな縛りかは、使ってからのお楽しみ。

精神集中は、糸を出している時、あらゆる感覚が鋭敏になる。

魔力無効は、拘束術で縛った相手の魔力を封じることができる。

魔術無効は、糸に触れた魔術を無効化する。

糸を出している時、自分は魔術及び魔法が使えない。

アンチ・マテリアル・ライフル
対物ライフルの概念。

スキル、【貫通】 【拡散】 【銃弾生成】 【直感】
下位の概念、【魔力上昇】 【魔力回復速度上昇】 【常時魔力回復】
【集中力上昇】 【軽量化】
中位の概念、【気配遮断】 【気配察知】 【魔障壁】 【思考加速】
上位の概念、【不滅】 【必中】

折りたたみ式。

貫通と拡散は、そのままの意味。

銃弾生成は、魔力を使って銃弾を創り続ける。

軽量化は、ただ軽くするだけ。

気配遮断と気配察知は、そのままの意味。

魔障壁は、魔力を使う代わりに障壁を纏うことができる。

上級の魔術をくらっても一回は防げるぐらいの硬さ。

思考加速は、一時的に思考を高速で働かせる事によって、あらゆる動きがゆっくり動いているように見ることができる。

使いすぎると頭が痛くなる。

最悪、吹き飛ぶ。

加速の劣化版？

必中は、スコープに相手をいれて、引き金を引けば当たる。

素人でも、ゴル 13 並みの腕前に！

防ぐことは可能。

どうだ！

すごいだろ！

系の名前をクルステイア神系の結び目

アンチ・マテリアル・ライフル

グレイプス・ガンズ

対物ライフルの名前を絶望を与える神銃

カッコイイだろ！

「こちらは没収です」

グレイプス・ガンズ

……メイドさんに、絶望を与える神銃が没収された。

ああ、俺の主力兵器が……

しくしく……

頑張ったのに……

メイドさんの意地悪。

……危ないから説明書でも作るか。

・
・
・
・
・

視点・メイドさん

まさか、ミーシャ様がこんな物を造るなんて……

お嬢様が、大事にしたがる理由もわかります。

こんな物を造れると知られたら、兵器開発のために連れて行かれて
しまいます。

お嬢様と一緒にミーシャ様をしつかりと守らなくては！
とりあえず、コレ、どうしましょう？

「……」

「……？どうかしましたか？」

「こ、れ」

ミーシャ様から何かの紙を貰いました。
なんでしょう？

「それ、の、使いか、た」

「そうでしたか……ですが、私が使ってもよろしいのですか？」

「……ん」

小さく頷くミーシャ様。

……なんでしょう、とても保護欲をそそられます。

なんとなく今日はミーシャ様と一緒に寝ることにしました。

……可愛い。

・
・
・

・
・
・

・

メイドさんが、良く話し掛けて来る様になった。
このまま家にいると、貞操が危ない気がする。

第九話（後書き）

なんでメイドさんに持たせたんだろう？

メイドさん無双フラグが立った気がした。

名前の中二度は気にしないでください。

第十話（前書き）

主人公のミー君より主人公らしい二人の決闘。

どうなると思っ？

てか、この小説何時の間にかお気に入り件数が500いつてる！？
楽しい？

俺は書いてて楽しい！

第十話

そういえば、自分の武器を作るついでに母に鞭を送った。
ウチの母、M……だから。
結構ネタにはしった。

スキル、【人格変更】 【服従】 【調教】
下位の概念、【感覚強化】 【射程操作】
中位の概念、【魔力無効】
上位の概念、【不滅】
絶対概念、【ドM化】

人格変更は、所謂二重人格。

自分が何をしたかの記憶は残る。

服従は、人型であれば誰にでも効く。

魔力抵抗値が高い、自分の意志が強い相手には効かない。

調教は、動物などの人で無いものに使うと従うようになる。

大きさや強さによって聞かない個体もいる。

感覚強化は、あらゆる感覚が倍以上になる。

痛さも、快感も、倍。

射程操作は、そのままの意味で、自分の意のままに伸ばしたり縮めたりすることができる。

ドM化は、そういう理由で使うとそのままの意味になる。
敵を仲間にする最低のネタ手段。

反省はしていない。
後悔はしている。

.....

・
・
・

視点・母

私の出番……いいえ、私の時代が来たわ！

……私は、何を言ってるのかしら？

そういえば……ミーちゃんから鞭を貰った。

……どうしろと？

そうか！これで叩いて貰えば良いのね！

つまり、これの使い方は、ご褒美ね！

ありがとう、ミー君！

……むしろミー君に使ってもらおうかしら？

「……母」

「どうしたの、ミー君？」

なんだか怯えてる様に見えるけど……

ハッ！？まさか、リユーちゃんが何かしたの！？

「……ん」

なんだか呆れられた気がする。

おかしいな？

「奥様、今日のご予定は……」

「わかってるわ」

「……」（こうやって見るとできる女だよな）

「ミー君、失礼よ」

「……」（ごめんなさい）

そうだ！

最近、ミー君とのスキンシップが無かったから、今日はミー君とい
よう！

……なんで出て行こうとするのミー君？

「……」

いやいやと首をフルフルさせる。
可愛いわ〜

「……奥様、そちらは寝室です」

「ハッ！？私は何を！？」

「母様！いい加減にしてください！」

「……」（そうだそうだ！もつと言え！）

「ミーと最初に閨を共にするのは、私だああ！！」

「……！？」（そこなのおお！？）

フ、フフ、フフフフ。

さすが我が娘。

発言に躊躇いが無いわ。

「いいわ！その幻想！私が粉々にしてあげるわ！！」

「……」（立場的に……それ、俺の台詞……）

「母様、いいえ、アメリカ！貴方の罪を！数えろお！！」

「……」（もう、あんた等が主人公で良いじゃん）

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

・

視点・メイドさん

これは、修復できるのでしょうか？

……無理ですね。

引越しの準備をしませんと。

「ミーシャ様、こちらへ……危ないですから」

「……ん」（魔術スゲエエエ……おお、あれが上級魔術）

小さな歩幅で一生懸命歩く姿は、とても愛らしいですね。

「……」（そっち寝室だよ）

……どうやら私は、奥様と同じことをしていたようです。

そういえば、あの二人、寝室だけ一切の被害も出さないですね。
すごい執念です。

「とりあえず、引越しの申請に行きましょうか？」

「……ん」（あれって……古代魔法とかゆづのじゃ……気のせいかな）

ミーシャ様の小さく軟らかい手をとって、城に向かって歩く。

後ろから悲鳴とかが聞こえた気もしますが、私は関係ありません。

第十話（後書き）

あれ？おかしいな。

母のターンが何時の間にか終わってる。

何故？

しかも何故かドMになってる！？

母だし、いつか。

決闘は引き分け。

鞭の絶対概念どうよ？

ダメ？

第十一話（前書き）

投稿ミス？

申し訳ありませんでしたあああああ！！！！

こんなショボイミスを……

一番人気な小説なのに……

第十一話

ガン ム造りたい。

この世界で、ガン ムとか反則だろ。

メイドさんに没収されそうだから造らないけどさ。

最近暑いので、扇を作った。

暇だったので、概念を付加した。

家？

無くなったけど……寝室を残して。

偶然と言うより怨念やら執念を感じる。

今の家は、城に少し近付いた豪邸。

メイドさんが増えた。

名前は、まだ知らない。

何時も見守られてる気がする。

スキル、【受け流し】 【胡蝶蘭】 【光竜招来】

下位の概念、【魔力上昇】 【魔力回復速度上昇】 【常時魔力回復】

中位の概念、【良く弾く】

上位の概念、【不滅】

受け流しは、あらゆる攻撃を受け流すことができる。

それ相応の技術の身体能力があれば。

胡蝶蘭は、チヨウチヨの様な光を出して敵を幻惑する。

光竜招来は、魔力を半分以上使う変わりに光属性の魔力でできた竜（蛇型）を使役できる。

魔力が切れると自然消滅。

良く弾くは、そのままの意味で、水や炎、剣による斬撃を受け止めることができる。

スキルの受け流しと使うことで、舞を踊る様な美しさで、敵からの攻撃をくらわずにすむ。

……誰かにあげよう。

俺には使えん。

名前でも考えよ。

スィセン
翠扇でいいか。

あ、あの王様にあげるかな。
城行きたいな。

「ミーこれから城に行くが、着いてくるか？」
「……ん」

ラッキー！

王様に渡せるぜ！

そつえば、王様の近く美人な騎士様いなかったっけ？

「……」
「……」

姉上、何故俺の首筋に剣を？

「いや、私が近くににいるのに別な女、しかも美人の事を考えてる気がしたから」

ピンポイント！

許して。

「……私も、母様やメイドさんが持っているような特殊な武器が欲

しい」

あれは、その、ネタの塊だから……特に母のやつ。
ま、いいか。

槍……は騎士様にあげるか。

姉上に合いそうな武器……大鎌？

「……失礼だぞ」

ごめんなさい。

あ、そうだ！アレにしよう！

ネタに走りまくった反則兵器！

……いいよね？

「……きま、た」

「そうか！……何故だろう、とても危険な約束をした気がする」

反則兵器の名前は……ライン・オブ・ザ・ガーデン果て見えぬ絶望の園とかどうよ？

漲ってキタアアア……！！

昨日創った槍をあの騎士様に渡さないと。

どこにほっぽったっけ？

第十一話（後書き）

今日は少しづつ壊れて生きます。

最後に、ホントに申し訳ありません！

第十二話（前書き）

F a t e の武器他にも出そうかな……

なんか出して欲しいのあったら言ってください。

無理矢理出します。

第十二話

城、到着。

王様どこだ？

騎士様に渡す槍の名前は刺し穿つ死棘の槍。
ゲイ・ボルク
パクリ？

気にすんな。

エクスカリバーだってそうじゃん。

とりあえず、こんな概念を付加してみた。

スキル、【ガード・ブレイク】【ストライク・ウェーブ】【デス・バイツ】【瞑想】【加速】【直感】

下位の概念は、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【魔力上昇】【魔力回復速度上昇】【常時魔力回復】【集中力上昇】【軽量化】

中位の概念は、【気配察知】【魔障壁】

上位の概念は、【不滅】【選定】【精神感応】【呪い・感情】

ガード・ブレイクは、あらゆる防御を貫く。

上位の概念に加護や守りがある場合は、無効化される。

ストライク・ウェーブは、地面に突き立てる事によって広範囲に純粹な魔力の波を放つ。

デス・バイツは、急所に当たった時に発動する。

基本的に意味は無い。

心臓に刺せばそれで死ぬから。

バンパイアなどに有効。

頭、心臓に効果あり。

呪いは、後にくのによって変わる。

今回の呪いは、武器の使用中に感情が無くなる。

代わりに、普段倍の力が出せる。

意外と強い？

真名開放は、ほら、魔物って心臓刺しても死なないことの方が多いから。

むしろ原典より強くね？

布に包んで持ってきた。

兵士に捕まった。

そりゃねえ。

王様に会いに行くのに武器もってく奴なんか怪しいわな。

「何をしている？」

「クリス隊長！」

あ、この前の騎士様。

「ミー彼女は、クリス・リファリアで、第一騎士団の隊長だ」

この国には、第一から第六騎士団まである。

第一騎士団は、国の精鋭を集めた部隊だったはず。

メイドさんが教えてくれた。

「リユーネ……そちらの生き物は？」

「……私の弟だ」

なんだ？

姉上とクリスさんは、知り合いなのか？

てか、生き物って……

「弟……可愛いな」

「それは良かった、ではな」
「まあ、待て」

仲悪いのかな？
すごい気まずいんだけど。

「なんだ？」

「私も弟欲しいぞ」

「……ミーは、物ではない」

そうだそうだ。

「それとな、ミーは……私の物だああ！！」

物扱いいいいい！？

「なら、力ずくで……貰うまで！」

なんだコレ！？

「武器の無いお前など、相手にならんわああ！！」

「弟君、これ、借りる」

「……………ん」

渡しちゃったけど良いのかな？

まだ完全に選定されてない筈だから呪いが発動する事は無い筈。

「さあ！恐れと共に！跪けえええ！！」

「貴方に教えてあげる、本当の絶望を！」

あゝ王様どこかな？

「ク、クリス隊ち、ぐほあ！？」

「クライアさ、ごはあ！？」

俺は、悪くない。

原因？

俺じゃない。

謁見の間にも、行ってみるか。

第十二話（後書き）

姉上……どうしてこうなった。

次回！

双子登場！

第十三話（前書き）

姉上の最初のクールさが、消えていく……

姉暴走タグでもつけようか？

第十三話

「……二人とも何か言う事は？」

「すみませんでした」

「申し訳ありません」

「まったく、仲は悪いとは思っていたが……限度を知れ」

絶賛王様に怒られ中。

王様に聞いた限りだと。

王様と良く話す姉上と王様の護衛をしているクリスさんは、知り合
いではあるが、何故か仲が悪い。

「ミーが欲しいとか抜かすもので……」

「可愛いんだもん……」

始めて見た時の印象が亡くなってく。

「クリス！」

クリスさんが……増えた！？

「お前は、また迷惑を……」

「まあ、待て……ミーシャ君に自己紹介を」

「?」………第六騎士団隊長、クリア・リファリアだ」

もしかして、この人がこの前の騎士様？

双子？

すげえー

第六騎士団は、国の守護が主な目的。

「ミー、シャ、です」
「……………」

メツチャ見られてる。
俺なんかした？

「……………いい」

ん？

なんて言った？

「まさか、クリアさんまで…………」
「…………ミシャ？」

ちょっと足りないよ、クリスさん。

「リユーネ殿…………ミーシャ殿は、君の弟なのだな？」
「…………はい」
「そう、か…………」

なんだろう、家がにぎやかになる気がする。
あと、クリスさん。
その槍、返してくれないの？

「リユーネ君、今回呼んだ理由だが…………」

王様と姉上が話し始めた。

必然的にクリスさんとクリアさんと三人で話すことになるのだが…………

「……」
「……」
「……」

話が無い。

姉上もちらちらとこっちを見てる。

「……ん？そういえば、クリス、その槍は？」
「ミシヤから貰った」

あげた覚えは無い。

「……これは、誰が造ったんだ？」
「……ん」

自分を指差す。

「……」
「……」
「……」

さっきよりも話し辛くなった。

「良ければ、私にも造ってくれないか？」

もともと、その槍が貴女のです。
しょうがない、この人には大鎌でも創るか。

「わ、かった」
「……ありがとう」

何故頭を撫でる。

「……クリアずるい」

クリアさん、何故抱きつく。

「む……な、なら私だって！」

クリアさんも対抗しないで。

「貴様ら……」

姉上怒らないで。

「ミーは……私の………夫だああああ……！」

違うからああああ……！！！！

「私は弟で良い」

「私は、妾でも……」

あんたらも何言ってんだ！？

「許さん！その命を燃やし尽くせえ！！」

「……その身に敗者の烙印を刻んであげる！」

「私に挑むか、いいだろう……己が無力を嘆くがいい！！」

……王様ヘルプ。

「……すまん、我は用事があるので、失礼する」

逃げやがった！

どうすんだよ……この人達？

第十三話（後書き）

俺は、何も、悪くない。

どうして、この双子、出てきて早々暴走したんだ。

てか、周りの女性がミー君より目立ってる。

ミー君最強タグが意味をなしてない。

ホントは強いんだよ？

第十四話（前書き）

無理矢理キャラを増やしてみた。

もうそろそろ、増えなくなる。

戦闘……した方がいいかな？

第十四話

「お前達は何をしてるんだ……」

姫っぱいのキター

白百合の姫騎士希望。

綺麗だし。

「ん？お前は誰だ？」

「……」

「……」

「……」

「……む、名前を聞いたら先に名乗れと言つことが……面白い」

わゝターゲットにされた。

けしてびびつてたわけではない。

のどがかれてたんだ。

「リリイ・アルタイア・デステント、リリイで良いぞ？」

「……ミィ、シャ」

「？……あ！お前がリユースの弟か！」

「……ん」

なんだ？

姉上は、有名なのか？

「なるほど、たしかに……だが、まだ子供に見えるが……何歳だ？」

実は、最初の自己紹介から2年ほど経ってる。

武器創りが、2、3日で、できるとでも？

「……8」

「8歳！？……リユーネは、何を考えてるんだ？」

ちなみに、母は規制されました歳。

姉上は、15歳。

メイドさんは、永遠の20歳。

ホントの年齢はわからないが、見た目だけの年齢は……

王様は、40歳。

クリスさん不思議な騎士は、19歳。

クリアさん真面目な騎士は、同じく19歳。

姫様は、12歳。

「私は10歳だ」

何故わかった！？

「なんとなくだ」

それじゃあしょうがない。

「クツ！やはり、勝てないか……」

「クリア……強すぎ」

「そんなことを言ったら、そちらの武器の方が……」

あ、何時の間にか終わってる。

クリアさん一人で、チートかもしれない装備を持っている二人を倒したのか……

「リリイ？」

「姫だ……」

「姫様!？」

「気付くのが遅いわ……」

あの双子の騎士は、何歳なんだろう？

あの発育で実は、姉上と同じ15歳とか？
ないわ

「私だって、もう少ししたら……」

「15」

「私も15です」

……顔に出てる？

「出てるな」

「出てる」

「出てます」

「出すぎだ」

そんな、バカな!？

「とりあえず、お前ら三人は仕事に戻れ」

「クッ! 変な女に引つかかるんじゃないぞ! わかったな!」

「……この槍、大事にする」

「造ってくれる武器、楽しみにしてますね?」

姉上……

昔のカッコイイ姉上に戻って。

何故か姫さんが隣にいる。

「お前、武器造れるのか？」

「……ん」

「なるほど……なら、私にも造れ！」

命令ですか？

「個人的なお願いだ」

そうですか。

「その扇……いいな……」

……どうぞ。

「む、すまん」

よければこちらの腕輪もおおさめくだせえ。

「コレもくれるのか？……私としては、そちらのナイフの方が欲しいぞ」

……マジで？

……どうぞ。

けして、けして権力に負けたわけではない。
長いものに巻かれたただけだ。

「言っておくが、一度貰った物は返さんぞ？」

……新しいの創らないと。

「造るのは、杖でいいぞ」

まだとる気か！？

「一つだけ言っておこう、私は、姫だ」

……畜生！

世の中理不尽だ！

第十四話（後書き）

姫さんが、性格悪くなってしまった。

ミー君の全武器回収。

コレで、新しいのが創れる！

……何も思いつかない。

第十五話（前書き）

姫さんのキャラがつかめない。
ツンデレか？

でも、カッコイイな。

このままのキャラを維持できるだろうか？

第十五話

現在、家で寛ぎ中。

姉が隅でいじけてた。

何があつた！？

「ぐす……」

姉上……何故泣いてる？

なんかあつたんだろ？

「……盗られた」

何を？

ま、まさか！？

貞操を

「ミーに貰った剣と鞘」

……想像通りだ。

で？……誰に盗られた？

大体想像つくけど。

俺が、この前盗られたし。

「リリイに……」

だろうね。

こんな感じかな？

く予想中く

「リリイ！それはミーのдар！」

「ん？今は私のだ」

「お前！」

「ん？良い剣と鞘だな」

「む、分かるか、ミーから貰ったんだ」

「ふむ……それをくれるなら、考えてやる」

「ぐ……仕方あるまい」

「おお、すごいな……では、ありがたくいただきます」

「なら、それをミーに返せ」

「考えると言っただけだ」

「……貴様ああああ……！！！」

「なんだ？力尽くで盗るのか？私は、ひ・め、だぞ？」

「う……うわああああ！！！」

く予想終了く

外道だな。

そして、姉上単純すぎる。

だがそこが良い。

「どう、し、て？」

「……あのね」

く予想通りく

何故だろう、姉上が可愛い。

でも、それ以上の感情が芽生えない。

……家族だからだ！

「……また、つ、くる」

「ぐす……ホント？」

幼児退行してる。

なんか良いわ〜

むしろこのままで良い気がする。

「……ん」

「ありがとう、ミー」

でも、ま、何時もの姉上の方が好きだから戻ってもらわんと。
さて、姉上用に完璧なのを創るかね。

「それと……」

「……？」

なんじゃろ？

「できれば双剣で！」

注文かい！

それにしても……双剣、か……

二つあわせて一つか、一つ一つにするか……迷う。

・

・

・

あ、双子騎士と姫さんがどんな見た目か言っていないや。

簡易版で紹介！

クリスさんは、蒼髪赤眼の美人。

少し黄色がかかった肩辺りまである髪。

姉上と違つて発育も完璧。

クリアさんは、蒼髪赤眼の美人。

少し緑色がかかった肩辺りまである髪。

クリスさんとそっくり。

姫さんは、銀髪紫眼の美少女。

どこかの腹ぺこ騎士王似の子供版。

どうして、姫さんが……腹ぺこ騎士王になった。

いや、似てるだけだから良いんだけどね？

・
・
・

・

……そういえば、なんであの姫さんは、姉上の剣を持てたんだ？

……選定の概念が発動してなかった？

いや、もしかして、剣自身が持ち主に選んじやったのかな？

……あの姫なら、ありか。

むしろピツタリだし。

・
・
・

・

・

視点・リリィ

む？なんだ？

誰かに噂されてる気がする。

「姫様、その剣……リユーネ殿が持っていないませんでしたか？」

「ああ、奪い取った」

「何故です？」

……理由、か。

「理由は、そうだな、私に似合いそうだったからだ！」

「そうですか……アルテミシア家は王族と親しいですが、どう言おうと所詮中流貴族ですからね……大貴族の方々が無理矢理聞いて、その剣を造ったのはミーシャ殿であると知れば……」

「……わかつてるなら始めから聞くな」

恥ずかしいではないか……全く。

「わざわざ悪人みたいな真似しなくても良かったのでは？」

「見てたのかい！」

「いえ、偶然、チラッとお見えになったので……」

もう、知らん！

「寝る！」

「そうですか……明日、アルテミシア家にクリスと行くのですが……いえ、私が言うことではありませんね、では」

全く、なんて奴だ。

いつか絶対泣かせてやる！

……私にできることなんて、所詮この程度だけだ。
ま、もしもの時は逃げる時間ぐらい作ってやるかな？

第十五話（後書き）

セイバー・リリイにしたかったわけではありません。
……そんなこと聞いてない？

最後、微妙にフラグに見える。
ミー君を何時魔界に落とそうか……

第十六話（前書き）

概念をまとめた設定、書いた方がいいかな？

今回の最初で、姉上の剣を姫さんが持てた理由、わかります。

頑張って長く書けるようにします。

楽しみにしてる人も多いので、アドバイスください。

でも、できればあまり難しいことは言わないでください。
頭パンクします。

第十六話

姫さんが、姉上の剣を持てた理由がわかった。

姉上が、渡してしまったからだ。

所有者である姉上が、次の所有者を姫さんにしてしまったようだ。

あと、クリアさんと姫さんに大鎌と杖を創った。
とても、眠い。

てか、あの日から双子騎士と姫さんが家に来るようになった。

双子騎士は、何故来るかわからない。

姫さんは……嫌がらせもかねてると思う。

大鎌の概念。

スキル、【サイレント・ワルツ】 【加速】 【直感】 【氷結】

下位の概念は、【攻撃速度上昇】 【筋力上昇】 【素早さ上昇】 【魔

力上昇】 【魔力回復速度上昇】 【常時魔力回復】 【集中力上昇】

中位の概念は、【切断】 【魔術無効】

上位の概念は、【不滅】 【選定】 【精神感応】 【呪い・魔力】

サイレント・ワルツは、真横に鎌を振る事によって一定距離を全て
切り裂く。

氷結は、斬ったものを凍らせる。

凍らせないこともできる。

呪い・魔力は、魔力を常に消費し続けるが、かわりに普段の倍以上
の身体能力になる。

杖の概念。

スキル、【崩壊の火炎】 【再生の流水】 【英雄たる由縁】 【術式固

定】

下位の概念、【魔力上昇】【魔力回復速度上昇】【常時魔力回復】

【集中力上昇】【軽量化】

中位の概念、【魔障壁】【魔力吸収】

上位の概念、【不滅】

崩壊の火炎は、炎に触れたものを崩壊させる魔法。

再生の流水は、傷や病気を治す魔法。

英雄たる由縁は、自分以外を強化することができる魔法。

武器防具兵士を強化する為の魔法。

術式固定は、複数の魔法を同時に使えるようになる。

数日なら、発動しないで保つことができる。

魔力吸収は、使った魔法、魔術、使われた魔法、魔術に使われた魔力の半分を自分のものにする。

けして、魔術や魔法を無効化できるわけではない。

姫さんの方は、一部欠陥品な気がするけど……いいよね？
姉上の？

……。

忘れてないよ？

明日から創るつもりだったんだよ？

ホントだよ？

……俺は誰に言ってるんだろう？

姫さ〜ん、どこだ〜？

ちなみに、城の中です。

「……ミシャだ」

この呼び方は、クリスさんかな？

「どうしたの？」

「……あ」

「クリアと姫？」

「……う」

「中庭の方で訓練してた気がする」

「……あ」

「なら、一緒に行こう？」

「……ん」

手を繋いで、一緒に中庭に向かう。
なんで通じたんだろう？

・
・
・
・
・

視点・兵士の会話

「なんで会話が成立してるんだ？」

「バカ、あのクリス隊長だぞ？」

「たしかに」

「俺としては、そんなことよりも」

「ああ、俺も思った」

『あの可愛い子誰だ？』

・
・
・
・
・

・

鳥肌が立った。

なんだ、今の悪寒？

あ、いた。

戦闘してる。

・
・
・

・
・

・

リリイが果敢に攻める。

リリイの攻撃をクリアは、軸足を動かさずに捌ききる。

「クツ！」

「その程度ですか？」

「なめるな！！」

リリイは、剣戟を休める事無く攻撃を続ける。

クリアは、顔色一つ変えずにそれを捌く。

圧倒的な実力差。

「ハアツ！！」

力を込めた斬り上げ。

「フツ！」

相手の力を利用して受け流す。

リリイはなすすべなく、体制を崩す。

「グッ!?!」

「私の勝ちです、姫様」

「また、負けた……」

リリイは、剣を首筋に向けられ、負けを認めた。

・

・

・

遅くね？

スローで見えたんだけど。

俺がおかしいの？

……実は、俺って最強？
ないな。

「む、見ていたのか」

「ミーシャ殿にクリス、どうしたのですか？」

「……あ」

「「？」」「」

「頼まれてた武器ができたから家にとりに来て欲しい、だって」

「おお、ついにできたか！」

「……何故わかる？」

俺にもわからん。

「では、行くぞ！」

「あ、姫様！せめて護衛を付けてください！」

「……行こうか？」

「……ん」

姉上がいない。

なんだか珍しいな。

……あまり良い予感がしない。

第十六話（後書き）

またまた嫌な予感。
戦争？少し違うな。

そして、ミー君は可愛い。

あと、メイドさんが出したい。
あの武器で無双したい。

そろそろ、魔界に行ってみようか？
ミー君最強フラグも立ててみたし。

第十七話（前書き）

ミー君をめぐつて争います。

デステント王国と魔界が。

勝てるわけがないね。

第十七話

姉上用の双剣を創った。

ルシフェル・ヴァルキリー
聖剣・天界の戦乙女。

ルシフェル・ヴァルキリー
魔剣・魔界の戦乙女。

名前、いないかな？

ルシフェル・ヴァルキリー
聖剣・天界の戦乙女の概念。

スキル、【覚醒】【聖人化】【超直感】【罪】

上位に概念、【不滅】【魔法吸収】【精神感应】【聖なる守護】【

対魔障壁】【肉体瞬間回復】

絶対概念、【選定消滅】【固定選定】【光】

覚醒は、武器にのみ有効な概念。

武器の力を覚醒させて、絶大な力を発動する。

聖人化は、見た目に変化は無いが、身体能力を上昇する。

ただし、天界でなければ意味は無い。

超直感は、直感の強化版。

罪は、触れたモノを浄化して、意識を奪う。

魔法吸収は、所有者に害のある魔法を全て吸収して、所有者の魔力に変換する。

聖なる守護は、あらゆる闇の魔術を無効化する。

対魔障壁は、魔力を消費して魔力のある攻撃を遮る。

肉体瞬間回復は、大気中の魔力を集めて所有者の肉体が限界を超えたら瞬時に肉体を全快にする。

選定消滅は、選定で選ばれた所有者が死んだ時に選定消滅する。

固定選定は、選定の強化版。

所有者が死ぬまで、所有者が変わらない。

絶対概念の光は、魔界に属するモノに対し絶大な効果を誇る。

低級の悪魔等は、近付くことすらできない。
光の魔術を手足のように操ることができる。

ルシファー・ヴァルキリー
魔剣・魔界の戦乙女
の概念。

スキル、【解放】【魔人化】【超加速】【罰】

上位に概念、【不滅】【魔術吸収】【精神感応】【邪なる加護】【

対物障壁】【魔力瞬間回復】

絶対概念、【選定消滅】【固定選定】【闇】

解放は、武器にのみ有効な概念。

武器の力を解放して、真の力を使う事ができる。

魔人化は、見た目に変化は無いが、身体能力が上昇する。

ただし、魔界でなければ意味は無い。

超加速は、加速の強化版。

罰は、触れたモノを消化して、存在を消す。

魔術吸収は、所有者に害のある魔術を全て吸収して、所有者の魔力に変換する。

邪なる加護は、あらゆる光の魔術を無効化する。

対物障壁は、魔力を消費して基本的な物理攻撃を防ぐ障壁を張る。

魔力瞬間回復は、大気中の魔力を集めて所有者の魔力が切れたら瞬時に魔力を全快にする。

絶対概念の闇は、天界に属するモノに対し絶大な効果を誇る。

下位の天使等は、近付くことすらできない。

闇の魔術を手足のように操ることができる。

強くしすぎた。

そして……持てない。

重すぎる。

「ミィ」

姉上だ。

これ、持ってて。

……あれ？

なんで姉上がここにいるんだ？

おじいちゃんの工房にまで来ない筈なのに……

「ん？それが、私の新しい剣、か……」

なんだ？

いつもと雰囲気が違う気がする。

姉上が双剣を両腰に付ける。

鞘も剣に合ったのを創っておいた。

「ミィ……もうすぐ、この国に魔王が来る」

「……ま、おう？」

魔王、か……あれ？

前に倒したとか言ってなかったっけ？

「……まえ、は？」

「……あれは、私達人間が決めた魔王級だ……今回の魔王は、魔界が決めた魔王だ」

「なん、で？」

「悪魔が王の前に現れて、言ったんだ……この国に、神が力を与えた者がいる、と……その者を渡せ、と……」

……俺？

いや、でも、天使だったよ？

最上位だったけど。

「ミー正直に答えてくれ……アサミネ・ヤオイ……この名前に、心当たりがあるのかを……」

俺の前の名前じゃん!?

俺なのか……どうしよう?

「ミー……知ってるんだな?」

「……うん」

「そうか……大丈夫、お前は、私が守るから」

「……ん」

姉上は、最近壊れ気味だけど……やっぱり頼れるよな……

「さ!今日はもう帰ろう!」

「……ん」

俺は、姉上と手を繋ぐ。

姉上の手は、普段から剣を持っているのに柔らかく感じた。なんで、今まで、気付かなかったんだらう。

姉上の、リユーネの横顔を見上げる。

その横顔は、凛々しく、美しく、そして……かつこよかった。

・

・

・

視点・メイドさん

城で、王族の給仕をしているメイドが言っていました……やはり、

ミーシャ様のことでした、か。

お嬢様も、私に言つて下されば良いのに……酷いですね。
さて、いつ来るか分かりませんし、準備しておかなければいけませんね。

奥様とも相談しませんと……やることがたくさんですね。
お嬢様だけに負担を強いるなんてこと、メイドの私にできるわけがないですしね。

ミーシャ様をお嬢様と一緒に守ると、誓ったのですから。

死んでも、守つて見せます。

・
・
・
・
・

視点・リリイ

「姫、どうする?」

「姫様……」

「御主等は隊の者達といなくて、よいのか?」

「姫の護衛」

「隊は副隊長や他の隊の隊長が何とかしてくれています……それに、
隊の者達も納得しておりますし、軍の人間は皆、姫様のことを信頼
しておりますから」

「むう……」

心配性な奴らだな……まったく。

「姫……ミーシャのこと」

「……分かってる……父様も危険なことぐらいは、な」

「では、ミーシャ殿のことを……」

「ああ、全力で守ることになったよ……私も行くからな？」

「頑張る」

「はあ……止めないといけないんですが、言っても聞かないでしょう？」

「当たり前だ！」

お気に入りの者が危険な事になってるんだ、無視するわけないだろ。ミーシャが造った腕輪、アレのお蔭で今回来た魔物からの攻撃を受けても平気だったのだ。

……命の恩人じゃない？

「でしょうね、だからこそ王からはすでに許可を貰っております」

「……相変わらず仕事が速いな」

「さすがクリア」

「はあ……とにかく、明日からは私とクリスは、極秘裏にミーシャ殿の護衛に入ります……正直やめてもらいたいですが、姫様は自由にして良いそうです」

自由！？

父様は、そこまで許してくれたのか！？

「王からの伝言です……『友達ぐらいは、自分で守れ』だそうです」

友達……か。

うむ、確かに気兼ねなく話せる（？）奴ではあるな。

友達が、魔界につれてかれるかもしれない……すごい状態だな。

「そうか……うむ！では、明日からしっかりとミーシャを護衛する

ぞ！」

「了解」

「ハッ！」

私がここまでやるんだ……絶対に守ってみせる！

……とりあえず。

「今日は寝るぞ！」

「寝る」

「はぁ……」

・
・
・

・
・
・

・

……俺のせいで、この国危ないんだよね？
俺は、どうするべきなんだろう？

第十七話（後書き）

相棒見ながら書いてたら少しシリアスになった。

ミー君の選択は？

王国の運命は？

魔界の目的とは？

気になる？

俺も気になる。

外伝・その？（前書き）

書いてみた。

伝言を伝えに来た魔物。
後適当にフラグ。

外伝・その？

視点・王様

「リユーネ、ここなんだが……」

「ん？ああ、それはだな……」

うむ、やはり身分を気にしないアルテミシア家に娘の手伝いをさせたのは間違いではなかったか。

出来ればこのまま、友達でも作って欲しいのが、親心なんだがな。

「デステント王！」

「ん？なんだ？今仕事中的なのだがな……」

少し焦った様に宰相が、部屋に入って言う。

「ま、魔界からの使者と言っている者が！」

「なんだと！？」

「父様！」

「レズマイス様！」

「どこだ！」

「す、すでに謁見の間に……」

それを聞いて、私とリリイとクライア君が、飛び出す様に走り出す。

「二人とも、無茶だけはするな！」

「分かっている！むしろ父様の方が心配だ！」

「レズマイス様よりは、マシだと思います！」

……確かに二人の方が強いけどね。
しかし、何故今使者等……

謁見の間に入る。

「な……」

「コレは……」

「……」

そこでは、兵士が数十人、肉塊に変えられていた。

「やっとですか……待ち草臥れて何人か血祭りにあげてしまったよ」

「……使者と聞いたが、何の用だ？」

「この国に、神が力を与えた者がいる……その者を渡せ」

「神が？」

神は世界を創った後、世界には、一切の干渉をしない筈では？

それに、何故そんなことを神に反逆する、魔界の住人たる魔物や悪魔が知っている？

「そうだ、アサミネ・ヤオイ、この名を知っている者が、神に選ばれた者だ」

「……神が与えた力とは、なんだ？」

「人間如きが俺に質問か……まあ、いいだろう……神が与えた力は、創る力だと聞いた」

「「ッ!？」」

リリイとクライア君が息を呑む。

まさか、知っているのか？

「その反応、知っているな？」

爪を伸ばす。

「一人が生きてれば、どうにでもなるか」

そう言つて、リリイの心臓に爪と伸ばす。
いきなりの事で、誰も反応できなかった。

その筈なのに、魔物の爪は、リリイの前で、止まっていた。

「何！？どうゆうことだ！？」

「ハア！」

「ガハア！？」

戸惑っている隙に、クライア君が魔物に迫り、落ちていた剣で、斜めに切り裂く。

当たる前に止まったとはいえ、娘の無事が気になる。

「大丈夫かリリイ！？」

「ええ……どうやら、ミーシャに助けられたらしい」

ラクロワンダ君に？

どういうことだ？

まさか……魔界が狙っているのは……

「そうか、その武器、やはりここに……大人しく差し出せば、命までは取らないだろうよ……これから魔界が誇る魔王軍が来る！死にたくなければ、神が力を与えた者を差し出せ！！ハハハハ、アッハッハッハッハ！イーヒッヒッヒッヒッヒ！！」

魔物は、不気味な笑い声と共に……消えていった。
魔王軍、か……

・
・
・
・

視点・リユーネ

あの魔物が消え去った後、すぐに会議が開かれた。

「今すぐに奴らが探している者を探し出し差し出すべきだ！」

「だが、魔界が欲するほどの力を持っているのだぞ？」

「それに、その力を使ってこの世界に攻めて来ないとも考えられん
！」

「そんなことより、まずは神が力を与えた者を探すべきだ！」

「そうだ！そいつが見つからない限りこの国は、滅亡だ！」

……神が力を与えた者、か。

リリイも気付いてる筈だ。

魔界が探している者は、ミーであると……アサミネ・ヤオイとは誰
のことだ？

ミー……なんで私に隠し事なんてするんだ。

私は、お前のことを……信じていいのか？

・
・
・
・

視点・リリイ

「静まれ」

父様の一声で、全ての者が話すのをやめる。
こつという時は流石と思うな。

「そんな、確証も無い、探す方法も無い相手を見つけるとより、魔王軍を倒す事を考えろ……会議は終わりだ」

そう言つて、父様は会議室から出て行く。
私とリユーネもそれについて行く。

リユーネは、なにやら考え込んでいるようだ。

「はぁ……おい、リユーネ」

「……なんだ？」

「奴の言っていたのは、あいつだろ？」

「ああ……」

「なら、まずは聞いて来い」

「え？」

こついうめんどくさいことは、クリスとかクリアにでも任せておきたいものだ。

「だから、誰かが原因で悩んでるなら、まずは原因と話して来いと言ってるんだ！」

「あ、ああ」

「とつとと行つて来い！こつちはこつちで出来る事をする！そんなんだとイザと言う時まともに動けないぞ！」

「……わかった、ありがとう、リリィ」

そう言つて、走っていくリユーネ。
面倒なヤツだ。

「ウチの娘も、苦勞するな」

「父様が王族なんかになるからこつなるんだ」

「しょうがない？」

はあ、とにかく！

クリスとクリアにも話さんといけないし、軍を動かす準備、市民の安全……やる事が多すぎる！

この怒り、全部ぶつけてやる！！

・

・

・

視点・？？？

暗く、何も見えない場所に……その者はいる。

「神に選ばれし、哀れな人よ……」

その者は、ただ悲しそうに、言う。

「贅とされし、儂き命よ……」

そして、静かに、眠るように、言う。

「汝に、安らぎを……」

外伝・その？（後書き）

メツチャ強そうなの出ちゃった。
このお方、誰にしよう？

ルシ　アー？

サン？

勢いで書けばいいか。

第十八話（前書き）

国対魔界はやめました。

代わりに、ヒロイン（？）勢vs七つの大罪（俺流）です。

あと、反則兵器創ってみた。
微妙に伏線です。

第十八話

考えても答えが出ないので、とりあえず反則兵器を創った。
片手で持てるスイッチ型。

スイッチを押すと大気圏外に巨大な衛星砲が転移され、スイッチを
持っている人以外を全て消し去る。

ライン・オブ・ザ・ガーデン
果て見えぬ絶望の園。

スキル、【次元転移】 【承認機能】

絶対概念、【存在維持】 【存在消滅】

次元転移は、指定した場所がどこであろうと瞬間移動する魔法。

承認機能は、所有者がスイッチを押した時に撃つか撃たないかを決めることが出来る。

コレを決められるのは、設定された者だけ。

存在維持は、その概念を持っている限りその存在を消される事が無くなる。

存在消滅は、あらゆる存在を消し去る概念。

防ぐ方法は、存在維持だけ。

うん、反則だな。

承認機能はもちろん俺設定だよ。

とりあえず、ポッケに入れておく。

あ、そうだ、俺の持ち物が無いじゃない。

今度は盗られない様な……盾？

普段持たなくていい、盾…… Fateの熾天覆ロー・アイアスう七つの円環？
いいな。

それにしよう！

なんか時間もないっぽいし、膳は急げ！

・
・
・

視点・メイドさん

工房のある森の入り口で、私、お嬢様、奥様、姫様、クリス様、クリア様の6人が待機しています。

私は、ミーシャ様から頂いた、銃？とゆう武器のスコープを使って周りを警戒していました。
どうやら来たようですね。

「来ました」

「そうか……クリスさん、軍の方は？」

「申し訳ありません、まだ準備に時間が掛かるようです」

という事は……今いるメンバーでやらなければならないのですね。
厳しいどころか、不可能に近いです。

それでもやるんですが、ね。

「ミーシャ様は、何故ここに来たのでしょうか？」

「さあな、ま、ここなら多少派手に戦^やっても被害はない、全力でミーシャを守るぞ！」

「ミシヤは、守る」

「ええ、ミーシャ殿は絶対に守りましょう！」

「ミー君の周りにこんな綺麗な女の子達がいるなんて……私も負けてられないわ！」

「母様は、おいといて……人数は少ないが、私達なら負けはしない

！
」

姫様は、ミーシャ様の武器？を使って罨や魔法を使う。

クリス様は、紅い槍を構えて魔界から来たであろう魔王軍を見据える。

クリア様は、青白い大鎌に魔力を注ぎ込んで待っている。

奥様は、ミーシャ様から貰った鞭と倉庫に仕舞ってあった呪符を確かめている。

お嬢様は、昨日ミーシャ様が造った美しい双剣を両手にミーシャ様のいる方を見ていました。

「来ます」

「分かった、作戦はリリイが森に結界を、クリスとクリアさんと私が迎撃、母様はリリイの護衛、メイドさんは牽制後、ミーの傍に行つて下さい……それじゃあ、始めるか！」

私は、魔王軍の先頭にいた飛んでいる三体を貫通させながら撃ち落とす。

さあ、ミーシャ様に手を出すとどうなるか……思い知りなさい！

・
・
・
・
・

視点・リリイ

結界の維持が難しくなってきたな……あの三人は大丈夫だろうか？
かくゆう私もミーシャの武器のおかげで、ここまでできるのだがな。
ミーシャの造った武器はどれも一級品どころか世界に二つと無い伝説上の武器だ。

でも、それを私は使っているんだな……英雄になった気分だ。

だが、魔王の目的とはなんだ？

何故、今頃になってミーシャを攫いに来たんだ？

分からない……情報が少なすぎる！

「荒れてるわね、お姫様？」

「む……昔みたいに小娘ではないのか？」

「あら？ミー君のお嫁さん候補にそんな呼び方できませんよ」

「私は別に好いてるわけでは……友達として助けに来たんだ」

「そうかしら？好きでもない相手の為に命を賭けられる？」

それは……はあ。

普段はダメ人間の癖に、こういう時は勝てる気がせんな。

「百歩譲ってそうだとしよう……だが、私は姫だぞ？」

「あらあら、ミー君はきつと大貴族ぐらいにはなるわよ？」

……この剣一つで、なれるか？

いや、私達が持っている武器を揃えれば国ぐらいは手に入るな。

「そうだな……でも、お喋りはここまでらしい」

魔王軍が、あの三人と結界をうまく越えてここまで来たらしい。だが、ここら一帯はすでに、私とアメリカ小母のテリトリーだ。

「そうみたいね……ふふ、それじゃあ」

「ええ、それでは」

二人で、指を鳴らした。

「「始めましょうか？」」

・
・
・
・
・

視点・クリア

結界内の森から爆音が聞こえた。

結界に遮られてるのに聞こえてくるとゆうことは、かなりの大音量とゆうことになります。

何体か私達を無視して、森に入ろうとしているので、さすがに止め様が無い。

そして、一体一体が私達人間が決めた魔王級に匹敵するので、油断できない。

それでも傷一つ負う事無く戦えているのは、やはりミーシャ殿の武器のおかげでしょうね。

少し数が減っている気が…… あれは！？

「リユーネ殿！」

「ハッ！……リユーネでいい、どうかしたのか？」

「ザコに構ってられるほど余裕が無くなりそうです」

「……ホントだな、クリス！」

空を飛んでいた敵を倒していたクリスが、私達の所に走って来る。クリスも随分強くなりましたね。

「何？」

「ボスの登場だ」

そして、私達の前に7体の魔王が降り立った。

第十八話（後書き）

いけるかな？

俺の文章力がどこまで通用するか……

とりあえず、七つの大罪編？はシリアスっぽく戦闘多めでお送りしてみたいと思います。

第十九話（前書き）

難しい。

なんでこんなに難しいんだろう。

最初の頃が懐かしい。

そんな経ってないけど。

第十九話

視点・メイドさん

「た、助け」

ドオンッ!!

脳とお腹に響く音と共に、人型の悪魔が命乞いをしながら絶命する。これで、6体目。

皆さんが頑張っている御蔭でどうにかなっていますね。

私の戦い方は、この銃を使って少し離れた所から確実に仕留めていく方法です。

それに、この銃を持つと自分の気配が消えて相手の気配が良く分かるんです。

おや、7体目ですか。

ディアズ様の敵は、ここで死んでもらいます。

確実に狙いをつけて、引き金を

「……見つけた」

引いた。

・
・
・
・
・

視点・母

さすがにきつくなってきたかも。

「はあ、はあ、はあ……」

「お姫様、息が、上がって、るけど、大丈夫、夫？」

「そっち、こそ」

さすがに数が多くなってきたわ。

ウチの娘は、何をしてるのかしら？

「どう、します、か？」

「降参、したら、見逃して、くれると、思う？」

「降参は、ありえませんが、見逃しては、くれない、でしょう」

私、運動不足だわ。

昔は、あの人と一緒に冒険者としてブイブイいわせてただけだな

「アメリカ小母」

「小母は、余計よ」

どうやら今度の相手は別格みたいね。

そして、木の影から出てきたのは

「……あ、なた？」

「久しぶりだな……アメリカ」

ミーシャとリユーネの父であり……アメリカの……夫だった。

・
・
・

視点・クリス

七つの大罪。

魔界で最強と言われる魔王の集まり。

その7体のうち3体が森の中。

2体が、クリア。

1体が、リユーネ。

1体が、私。

双子なのに……私の方が少ない。

「おやおや、七つの大罪が一人《暴食》のベルゼブブを前に考え事かね？」

私の前には、大袈裟な動きをする紳士ぶった青年がいる。

リユーネとクリアは、見えない。

結界が何かを張っているようだ。

「別に、関係ない」

「そうかな？なら始めよう……私の見立てでは……君は、我ら悪魔に対して一対一なら魔王にすら劣らないとみた……まあ、その武器あつてのことだが、ね？」

ムカつく。

確かに頭に刺せば簡単に死ぬけど、技術は私の。

「ためす？」

「クハハハ……良いでしょう！二人っきりで楽しみましょう！」

相手が動く前に、先手を取る為一気に懷に潜り込んで、石突きを顎に当てて、胴体を薙ぎ払う。

ベルゼブブの体が、上と下の二つになった。

普通なら胴体が離れたら死ぬ筈。

普通なら今ので、終わり。

でも、今回の相手は、普通ではないのだから。

「まさか、まさかここまで速いとは……先ほどまで手加減してましたね？」

上下二つに別れてるのに、普通にしてるのが気持ち悪い。

「さあ？今も手加減してるかも」

ベルゼブブの体が、元に戻ってゆく。

邪魔したいが、嫌な感じがする。

「クハハハハ！いいですね、では私も、本気でお相手いたしましょうー！！」

ベルゼブブが、お辞儀をした。

そして、ベルゼブブが……掻き消えた。

・
・
・

視点・クリア

さすがに、七つの大罪を2体同時は厳しいですね……

動き難そうな服を着た美人と露出の高い服を着た美少女。
見た目に惑わされれば、その場でアウトですか。

「七つの大罪の《嫉妬》のレヴィアタンと《怠惰》のリリス……随分強いですね？」

「あら、意外と博識ね？ 私は貴女の事を知らないのに……羨ましいわ」

「早く退いてもらえない？ 急いでるんだよね」

レヴィアタンが、巨大な大剣を使った近距離型。

リリスが、魔法を使った遠距離型。

魔法に集中すると大剣が、大剣に集中すると魔法が……コンビネーションは完璧。

なら、先に狙うのは……リリス！

「フッ！」

「ヤバ」

青白い大鎌を横薙ぎする。

「イとでも？」

「なっ！？」

リリスの背中に、翼が生え空へと飛ぶ。
そして、リリスは上空から魔法を放つ。

「クッ！？」

当たりはしなかったものの、私はバランスを崩し、一瞬の隙が出来る。

「しま」

「さようなら、名も知らないお嬢さん」

レヴィアタンの持った巨大な大剣が、振り下ろされた。

・
・
・
・
・

視点・リリイ

アメリカ小母は、あの男とどこかに消えてしまったし。

入り口の三人も奥のメイドもかなり強い……恐らく魔王と戦闘中で、ミーシャのいる工房に向かっている残りの魔王軍は、全て私。

どれか一体でも通したら、ミーシャが連れて行かれる可能性がある。つまり、一体も通さずに全滅させて、まだ戦っている所に行かないといけない、か。

おもいつきり貧乏くじだな……終わったら、ミーシャに甘い物でも奢らせるかな？

右手の輝く聖剣を油断無く構える。

「さて、この先に行きたいのだろうか？」

友達……いや、好きな奴の為に……

左手の杖に魔力を込める。

「なら、私を」

何とかするか！

腕輪から出る糸を張り巡らせる。

「殺してからにしろ！！」

そして、死闘が、始まった。

・
・
・
・
・

出来た！

兆速で創ったぜ！

俺流、熾天覆う七つの円環！
ロー・アイアス

完全防御版だああ！！

スキル、【自動防御】 【自動再生】 【体内保存化】 【魔力貯蓄】
【魔力自動生成】

上位の概念、【魔術吸収】 【魔法吸収】 【気配察知】

絶対概念、【加護】 【守護】 【最適化】

自動再生は、使っていない間に大気中の魔力を使って自動で修復されていく。

体内保存化は、武器、防具、装飾品などと違い持たなくていい。

ただし、使う際は名前を言わなければいけない。

恥ずかしがったら使えません。

魔力貯蓄は、常に魔力を貯め続ける。

容量は、ほぼ無限。

魔力自動生成は、常に魔力を創り続ける。

魔力量が限界を超えるとこの概念をつけた物が壊れる。

加護は、所有者に対しての遠距離型の攻撃が全て外れる。

魔術や魔法、弓矢などが当たらなくなる。

守護は、所有者に害のあることを遮る。

マグマの中や海の中で呼吸することが出来る。

最適化は、所有者のもっとも快適な温度を保つ。

どれだけ熱い所だろうと、どれだけ寒い所だろうと、常に一定の温度でいられる。

花卉1枚で、魔王つながりのディ　ガイアの魔王様の奥義であるメ
テオ　ンパクトを防げる。

原典より守りは完璧！

……盾だから攻撃は出来ないけど。

ん？なんか外が騒がしいな……なんだ？

もしかして、もう来たのか！？

ヤバイヤバイヤバイ！

どうしよう！？

オロオロしていると後ろに気配が……終わったかも。

ん？でもたしか、ここにいのつて……俺と

第十九話（後書き）

最後の誰かマル分かり。

だが、あえて聞こう！

おじいちゃんと七つの大罪の一人のどちらがいいか！

考えるのがめんどくさいとか、そんなこと無いよ？

第二十話（前書き）

まだまだ続きます。

メイドさんの相手が酷い。

メイドさんは、強いんだよ？

正直、めんどくさくなってきた。

第二十話

視点・リユーネ

今、私の前にいるのは、タキシードを着た二十代後半ほどの男性。だが、その身から放つ魔力はとても大きい。

「七つの大罪の《憤怒》たる我、アストラルが貴殿の相手をつとめよう」

「それは、光栄だな……」

アストラル……地獄の魔神にて復讐者。

紅い、真紅と言えるほど紅い炎を手と足に纏っている。

危険だ、たぶん、私では勝てるか分からない。

だからといって、退くことなどできるはずもない。

ゆえに、私が取るべき行動は……攻撃あるのみ！

「フツ！ハア！！」

一気に間合いをつめて、右手の輝く白い剣を一閃させる。

「紅蓮剣！」

アストラルは、手に纏っていた炎を伸ばして、剣の様な形を創る。その炎の剣で、私の放った斬撃を受け止める。

「なかなか良い剣を持っている様だ……それ以外は、大した事無いかな？」

剣が良いのは当たり前だろ？

ミーが！私の為に！造ってくれたんだぞ！
だが、剣だけ、とゆうのは気に入らん。

「……良いのは、剣だけじゃないぞ？」

左手の禍々しい黒い剣を地面に突き刺す。
詠唱破棄しながら唱える。

「ダークネス・グレイブ！」

黒い剣から闇が溢れだして、地面に広がり、槍の様に突き出す。
無数の闇の針が、驚愕したアストラルを突き刺す。

コレで終わらない事は分かっている。

だから、追撃をかける！

「シャイニング・レイ！ディバイン・ライト！ホーリー・ジャッジメント！」

上級の光の魔術を詠唱破棄しながら、放つ。

上から、下から、正面から、アストラルを光が包み込み、爆発する。
爆煙のせいで見えないが、ダメージはあるはず。

倒せた、とは……思わない。

「あゝイタイイタイ、血が出てるじゃないか……クソが！」

アストラルの顔には、余裕が無くなり、代わりに怒りが広がっていた。
た。

着ていたタキシードは、ボロボロになり、所々血が出ている。

「もうゆるさねえ……消し炭一つ残るト思ウなヨオオオ!!!」

先ほどの紅かった炎が、黒に、それこそ闇の炎と言えるほどに黒く染まっていく。

傷が燃えたと思ったら、既に塞がっていた。

なるほど、これが、憤怒たる所以、か。

怒れば怒れるほど、その力を増す。

先ほどまでは、離れているだけで平気な筈だったのに、今は、かなりの熱が伝わってくる。

正直、アレをくらったらホントに消し炭も残らないかもしれない。

だが、私は、ミーの為にも……

「やられわけには、いかんだ!!」

「黙レ、コ娘ガアアアア!!」

・
・
・
・

視点・母

「何年ぶりだい？」

「……8年よ」

「そうか」

今、私の前にいるのは、ミー君やリユーちゃんの父親。
そして、私の……

「どうした？」

「……いえ、なんでもないわ」

あの人は、死んだ。
分かってる。

きつと、コレは、あの人じゃない。

「二人は、元気か？」

「……ええ、元気すぎるわ」

「僕には、あまり時間が無いんだ」

「……そう」

「だから、せめて最後にミーシャに会わせてくれないか？」
「……」

この人は、違う。
こいつは

「？アメリ」

「消えなさい！」

鞭を放つ。
鞭が撓り、顔を砕いた。

「……ばれたか……何故分かった？」

「知らない筈なのよ……ミーシャの名を……」

そう、知らない筈なのだ。

この名前は、あの人が死んでから名づけられた名なのだから。

「許さない……あの人に化けて、ミー君を狙うなんて……」
「グハハハ、見抜けない方が悪いんだよ！」

体が軋み、服を破いてその真の姿を現す。

「俺様は！七つの大罪が一つ！《色欲》のアスモデウス様だあ！！」
「色欲、ね……良い男に化けるしかない貴方にピッタリね？」

アスモデウスの姿は、醜い。

牛・人・羊の頭とガチョウの足、毒蛇の尻尾、手には軍旗と槍を持っている。

「貴方みたいなゴミと、あの人を一瞬でも間違えた私を殺してやりたいわ」

「言っなあく人間……貴様はこれから、この俺様に心も体も蹂躪されるのだよ！グハハハハハ！！」

「そう……でも、私……」

鞭と残りの呪符を構える。

「貴方じゃ、満足出来そうにないわよ？」

・
・
・
・

視点・メイドさん

「はあ……はあ……はあ……」

「よくもった、と言ったところ、か」

もう、立つことすら出来ません。

そんな、這い蹲る私の前に立つのは、漆黒の五対十枚の翼を生やし

た、かなり達観した雰囲気的美青年。

ただ、そこに立っているだけで、跪いてしまいそうな、存在感。

「ぐ……これが、最強の魔王と、呼ばれる力、ですか……」

「そうだ、な……最後だ……もう一度名乗っておこう、七つの大罪が
一柱……《傲慢》にて明けの明星、ルシファー……人間の女よ……
汝に、敬意を表そう」

私も、運が無いですね……

気配を消しても、心臓の音で気付かれる。

罠を仕掛けても、全てが消し飛ばされ。

攻撃は、当たる前に止まってしまう。

ルシファーが、掌を向ける。

その掌に、二重三重の魔方阵が展開される。

「ミーシャ様……申し訳……ありま、せん」

魔方阵が一際輝いた。

「最後まで……あなたの、お顔を……見た、かった……です……」

……ミー、シャ……様」

ほんの僅かに、頬に、涙が流れた。

・
・
・
・

視点・リリィ

「もう……動けん」

私は、地面に大の字で、ねっころがる。

私の周りには、バラバラな悪魔の死体が数十体転がり、悪魔の血が水溜りの様になっている。

血臭が凄い事になっている。

そんな私も満身創痍のボロボロの状態なんだがな。

「死ぬ……このままだと、死ぬ」

腕や足にある傷から血が出ていく。

ミーシャから貰った杖の固有魔法、再生の流水によって何とか凌いでいる状態。

ただ、魔力は消費していくので、魔力が切れたらと思うと……ゾッとする。

まあ、消費した分だけすぐに回復するのだから。

「だれかゝ助けてくれ」

……誰もいないか。

まだ、戦闘している様だ。
暇だ。

剣の鞘はどこだあ？

杖と剣と糸の出る腕輪は、手元。

ナイフは、体一つ分向こう。

扇は足元。

鞘は……真横にあった。

「一応、私は姫なんだぞ」

そう言いながら、剣を入れる為に鞘を、手に取った。

第二十話（後書き）

姫さんだけ、シリアスパートを抜けました。

これから頑張る予定です。

もう頑張ったけど。

もっと頑張ってもらいます。

七つの大罪の最後、強欲なんだけど……マンモンとベヒモスどっちが良い？

俺としては、どっちを選んでも内容が変わるから選びたくない。

俺に選ばせると、名前が出る前に殺す。

それでも良いなら、読むだけにしてくれ。

ミー君どうなった？

第二十一話

視点・クリス

ベルゼブブがどこにいるか分からない。

見えないわけでは、ない。

……
それが本体か分からないのだ。

『さあ、貴女の全てを私にぶつけて下さい！』

ベルゼブブ……七つの大罪が暴食、そして、蠅の王。

消えたと思ったら、米粒サイズの蠅が集まって、7体のベルゼブブになった。

どれが本物が、それとも、あの無数の蠅の一匹が心臓の役割をしているのか。

『どうしたのですか！攻撃が止まりましたよ！』

……考えるのは苦手だ。

私は、考えるのをやめる。

魔王に対する恐怖も、消す。

思考を……

感情を……

戦うことに必要の無いものを……

消した。

『この感じ……まさか！？神に力を与えられた者は、この力すら支配できるのか！？』

ベルゼブブが、驚愕している。
でも、私は何も感じない。

ただ、この手元にある槍で……

目の前の敵を……

「殺す」

・

・

・

視点・クリア

「う、嘘でしょ？あの体勢で……」

「受け、止めた！？」

「シッ！」

「グア！？」

隙だらけになっていた腹部に、蹴りを叩き込む。
流石に効いたのか、膝をついている。

私はその間に、自分の状態を確認する。

無理な体勢で受け止めたから、衝撃を逃せなかったので、左腕が重傷。

無理矢理動かせば、一回ぐらい動かせるだろう。

体はボロボロだが、動かないわけではない。
これなら、いけるか？

「チッ……レヴィアタン！とつとと終わらせるぞ！」

「ええ、もう甘く見ない……確実に、殺す！」

これだと、油断が無い、ですか……

まあ、二対一には、馴れてます！

「ダーク・アロー！ブラック・セイバー！」

百の黒い矢と三十の黒い剣が、私に襲い掛かる。
その全てを紙一重でかわしていく。

何故か魔力が消費されていくが、その代わりに身体能力が圧倒的に
上がる。

自分の動きがより速く、より力強く、より正確に、進化していく。

「でえやあああ……！」

レヴィアタンが、大剣を横薙ぎに振る。

回避は……間に合わない。

なら！

「沈黙誘う
サイレント」

「

私は、ミーシャ殿のくれた説明書の様に大鎌を水平に構える。
技名を言うのも忘れない。

私が死ぬか、相手が死ぬか……勝負！

「円舞曲……！
ワルツ」

「なんかヤバ!？」

大剣と大鎌が、ぶつかり合い、その衝撃で地面が崩れ、抉れ、震える。

何も無い空間で、ピシッ!とゆう音が聞こえた。

相手の張った結界が、衝撃に耐えられなかったんだろう。

「なんで、なんで……人間なんかがああああ!!!!」

「貴方達とは……生き方が違うんですよおおおお!!!!」

衝撃が、より強力になり、私とレヴィアタン以外のモノを全て吹き飛ばす。

そして、結界が……砕けた。

・
・
・
・

視点・母

ゴォン!!

私は、その爆音を聞きながら、森の中を走る。

「チッ……意外としぶとい……いえ、しつこいと言った方が良かったら?」

「クソ! 一体何枚持つてるんだ!？」

爆破の呪符は、今ので最後。

さすが魔王……この程度じゃ死んではくれない、か。

今、この時まで仕掛けたトラップの数は、二百。

そのうち、百八十七は、もう使った。
鞭だけだと、キツイよねえ」

「もう我慢ならん！捕らえて楽しもうと思ったが、限界だあ！！森ごと消し飛ばしてやるわあ！！」

「意外と早いのか？そんなんじや女を満足させられないわよ？」
「ダメレエエエ！！」

アスモデウスは、その三つの頭から炎を吐き出す。

その口から放たれる炎は、森を燃やし尽くすように広がってゆく。

「あゝやばいかも」

さすがに、あの炎をどうにかできるアイテムは……無い。
ここで終わりの様だ。

「はあ……せめて、ミー君と、ちゃんとお話……したかったなあ」

炎が目の前まで迫り……炎が、割れた。

「え？」

炎が、何故かアメリアを避ける様に広がり、消えた。

そして、アメリアの前に一つの背中があった。

間違えることが出来ない、その背中には、昔よく見た……愛した人の、背中だった。

ただ一文字……その服の背中に、書かれた一文字……愛。

「……うそ」

「残念、ホントだよ……マイ・ハニー？」

「この、無駄にかっこつけた言い方……間違いないわ」

「酷いな……でも、もう偽者ごときに惑わされないだろ？」

少し青みがかかった銀髪。

性格を現す様な、明るい赤の瞳。

ミィに似た、整った顔立ち。

本物だ。

間違い無い。

「レイ？」

「ああ、君の旦那、レイだよ……そうだ、あいつ消したら……キス、してくれな？」

「……帰れ」

「あれ！？そこは恥ずかしがりながらも承諾するところだろ！？」

今がどんな時かも知らないで……死ねば良いのに……もう死んでるか。

「なんだキサマアアア！！」

「ん？フツ……貴様ごときに名乗る名は無いが……しいて言うなら、正義の味方、だ」

「人間ゴトキガアアアア！！」

「人間？違うな……今は」

アスモデウスが、もっていた槍でレイを突き刺そうとする。

普通なら、あの怪力と見た目に似合わないスピードのせいで、避ける事が出来ない様な攻撃。

「動く、屍だ」

アスモデウスが突き出した槍の上に、乗っていた。
それこそ、見えないほど速く。
ポーズを決めながら。

アレが無ければ……まあ、そこも良いんだけどね？

「悪いが、時間はかけない……七秒、それがお前の、最後だ」
「舐めるナアアアア……！」

・
・
・
・

視点・メイドさん

何時まで経っても、攻撃が……無い。

「……な、ぜ？」

「……終わったようだ……また、会えるのを楽しみにしている」

そう言つて、ルシファアは、霞の様に去って行く。

終わった？

まさか！？

「ぐ……ゴホッ！……ミーシャ、様」

まともに動く事は出来ないが、這つてミーシャ様が居る筈の工房へ
向かう。

全身が、引き裂かれる様に痛む、骨が軋み、血を吐く……それでも、
進む。

大切な人の、守るべき人のいる場所へ……

第二十一話（後書き）

母、戦闘から解放。

旦那出してみた。

バカは死んでも直らないって言うのを体現してみた。

母が間違えた理由は、死ぬ時に偽者みたいな感じだったから、とかで。

姉上とか、どうしよう？

姉上も……魔界、連れてく？

そして次回！とうとうミィ君が！？

どうなっちゃう！？

てかどうしよう！？

第二十二話（前書き）

徐々にうまくなってる……といいな。

楽しんでって。

早く終わらせたい。

第二十二話

視点・リユーネ

「モエツキロコムスメエエエ!!」

「くっ! 全てを遮り、我が身を守れ! 全能なる守護の盾!!」
イージス

七色の薄い円形の障壁が現れる。

アストラルの炎を逸らす。

さすがに、強い。

攻撃は怒りに任せたゴリ押し。

何とかなると思ったが、冷静さが無い分、本能で行動している。

そのせいで、こちらの攻撃が当たらない。

しかも、当たると思った攻撃は、全て炎に遮られる。

これが憤怒の魔王の力。

「それでも!」

全力で剣を振り続ける。

その剣戟は、美しく、剣武から剣舞へ……

黒い炎の中で、白と黒の双剣を振り、舞う姿は、まさしく戦乙女。武器の力かもしれない、本人の素質かもしれない…… だとしても、その強さは、本物だった。

どれだけ体を酷使しようと、剣が一瞬で最高の状態に戻す。どれだけ魔力を使おうと、剣が一瞬で全快の状態を保つ。

「ライト・ランサー! ダーク・スラッシュ!」

輝く突きを放つ魔法。

飲み込む斬撃を放つ魔法。
アストラルに当たる前に消滅する。
だが、それは計算通り！

「闇を切り裂き、光を喰らえ！双破の衝撃！！」
クロス・ブレイク

この二つの剣があつてこそ出来る、合成魔法。
双剣の斬撃を同時に飛ばす。
純白の斬撃が黒い炎を切り裂く。
漆黒の斬撃がアストラルの心臓付近に当たる。
相手が斬れるわけではない。
ただ、魔剣の斬撃が、当たった。

「グッ！？コ、コレ、ワ！？」
「はあ、はあ、どうだ？この剣の力は？」
「マ、マサ、カ！？コノ、チカラ、ハ……カミ、ノ……ガアアアア
ア……！！」

黒い炎がアストラルを包み、消え去った。
ルシファー・ヴァルキリー
魔剣、魔界の戦乙女。
斬れるわけではない。

ただ、相手の存在を消しただけ。
まあ、心臓辺りに当てないと、ただ叩きつける剣だからな。

森の方から爆音が聞こえる。
嫌な、予感がする。
早く行かないと！
走り出そうとしたら、倒れてしまう。

「あ、れ？」

どれだけ力を込めても、立つ事が出来ない。
いくら体は無傷と言っても、血はそう簡単に元には戻らない。

「く、そ……」

動くことが出来ず、ただそこに伏せる事しか出来ない。
そんな自分が……赦せなかった。

そこで、何も無い空間にひびが入り、砕け散った。
そこから現れたのは、クリアと悪魔らしい翼を生やした美少女と…
…巨大な、怪物だった。

・
・
・

視点・クリア

結界が破れたと同時にレヴィアタンが真の姿を現す。

『貴女は、絶対にクロス!!』

その姿は、巨大で、蛇の様だった。
だが、その内に秘めたチカラは、次元が違った。
唯一つ思うことは、勝てない。
ただ、それだけ。

「死ぬかも、です」

逃がしてくれそうにありませんし、誰かが助けに来てくれるまで、頑張りましょうか。

ふと、視線を横に向ける。

そこには、倒れて動けないリユーネ殿がこちらを見ていた。

「……………」

「…………ごめん」

負けるわけに、いかなくなってしまいました。
大鎌を構える。

『シネエエエ！！』

その巨大な尻尾で薙ぎ払ってくる。
と、ここで思い出した。

受け止めるだけの力が、腕に入らないことに…………

レヴィアタンの巨大な尻尾が目前に迫っている。

コレは、無理だ…………そう思ったら、一つの影が迫る尻尾の前に現れ、その尻尾を受け止めた。

「クリ、ス？」

いつも見慣れた筈のその顔には、一切の感情が無く、何も感じ取れなかった。

『ジャマヲ、スルナアア！！』

レヴィアタンの口から巨大火球が吐き出される。

クリスは、その火球に自分から飛び込み、薙ぎ払った。

「チャンスは、今だけ……なら！」

私は、クリスに注意の向いたレヴィアタンを凍らせようと近付く。

「レヴィアタンは、やらせない！」

「私も、あのお嬢さんの相手は遠慮したいのでね……」

「……結局二人なのですか」

リリスとクリスと戦っていた筈のボロボロの青年。
構えて、一気に突っ込む。

大きく弧をえがきながら大鎌を振り回す。
魔力を込め、大鎌から冷気が溢れる。

「右手だけですが……失礼します！」

・
・
・
・
・

視点・メイドさん

「グッ！？ガハア！……ハア、ハア……ミーシャ様！」

工房の前まで何とか来た。

ここまで来るのに、血が流れすぎたのか、痛みが無くなり、全身が痺れ、視界が霞む。

それでも、声を出して名を呼ぶ。

「……来て、しまったか」

「あ、あなた、は……」

「すまん……こうするしか、ないんだよ」

工房から出てきたのは、気絶したミーシャ様を抱えた、この工房の主。

ミーシャ様が、嬉しそうに語ることのある御方。

「どう、して……」

「それは、私が七つの大罪が真の《憤怒》であり、魔界の支配者たる、魔王」

興味がわき、一度調べたことがあった。

その結果、この国に、初めからいた……それだけしか分からなかった。

いつから、この工房を建てたのか、この工房でなにをしているのか、分からなかった。

でも、ミーシャ様があそこまで信頼しているなら、そう思った。

ミーシャ様は、悪意のある方々に対して、過剰に反応する。

だから、大丈夫だと思っていた。

「サタンだからだ」

「そん、な……」

「……ミーシャ・ラクロワンダ・アルテミシアは、貰って行く」

そう言っつて、サタンが私の横をすりぬけて行く。

私は、無理矢理動かない体を動かして、立ち上がる。

「やめておけ……その体では、もう無理だ」

「……それ、で、も……ミー、シャ……様、を……かえ、して……もらう……!」

血が飛び散るのも無視して、一足飛びに眼前まで近付く。
が

「ガハアッ!？」

私とサタンの間に、一つの小さい影が現れて私に蹴りをして邪魔をする。

その一撃で、完全に動くことが出来なくなってしまう。

小さい影は、ミーシャ様と同じぐらいの少年の様な黒髪赤眼の存在だった。

断定することが出来ないのは、もう完全に目が見えなくなり始めているからだ。

その存在は、私に止めを刺そうと腕を振り上げる。

「やめろ」

「はい、サタン様」

「……行くぞ」

「はい」

そう言い残し、気配が無くなる。

「あ……う……み……しゃ、さ……あ」

もう、動くことも、喋ることも出来ない。

血が流れ、意識が朦朧として、ただ、涙を流す。

何も出来ない無力感、それだけが全身を満たし、ミーシャの安全、それだけが脳内を廻っていた。

・・・

・

視点・リリィ

何か、嫌な予感がした。

だから、ミーシャがいる筈の工房に走る。

そしてそこには……

「シルビア！？大丈夫か！！」

ボロボロで虫の息のアルテミシア家のメイド、シルビア・レーベンだった。

「しつかりしろ！何があつた！」

なるべく傷口を刺激しないように、話しかける。

再生の流水で、傷を塞ごうとするが、余りにも酷すぎて間に合うか分からない。

「……………う……………あ」

「くそ！これでは間に合わんか！」

今ある魔力を使い切るつもりで回復しているが、命を繋ぎ止める事は出来ても治す事が出来ない状態。
軽く回復する程度の魔法じゃなく治癒専門の魔法でないと……
背後に気配が現れ、振り向いた。

「お姫様に……………シルビア！？」

「シルビアって誰だ？」

そこには、アメリカ小母と服の変わったあの男がいた。

第二十二話（後書き）

アストラルは、死んだのか？
サタンが生き返らせるとか。

……それでいいか。

姉上TUEEE！

クリアかわいそす。

クリス呪いで暴走中。

メイドさんYABEEE！

リリイ薄。

母、勝手に戦闘終了。

次回、七つの大罪編終了！？
お楽しみに！

第二十三話（前書き）

無理矢理終わらせたあああ！！

魔界編どうしよう？

魔王と仲良くなるでいいか。

第二十三話

視点・クリス

敵が何時の間にか、大きくなっている。

でも、どうでもいい。

ただ、殺すだけ。

ホントは硬いであろう鱗は、槍が当たる度に砕け、飛び散る。

『ナンデ、ナンデ人間に……こんなチカラヲ！にくイ、二くい、二くいイイ！！』

私を噛み砕こうと、口を開けて突っ込んでくる。

私は、その顔に槍を叩きつけて、地面にぶつける。

そのままその顔に乗って、槍を向ける。

あとは、刺せば終わり。

『コロシてヤル、殺してやる、コロシテヤル！！』

「あなたじゃ、無理」

そして、槍を

・

・

・

視点・クリア

リリスの魔法は厄介ですが、避けられないわけではないので無視し

て良いでしょう。

まずは、あの男から！

地面が抉れるほど強く蹴って、青年の真後ろに回りこむ。
その勢いを乗せて、大鎌を横薙ぎする。

「顔が同じなので、もしかと思いましたか……やはり速いですか」

その言葉と共に、青年が無数のハエとなる。

「ハエ！？ベルゼブブか！」

「おや？あちらのお嬢さんは、驚かなかったのですが……もともと感情が希薄だったのですかね？」

「む、驚いたわけではありません、気持ち悪かったんです」

「おやおや、それは失礼」

「ベルゼブブはともかく……アンタおかしいんじゃないのか！？」

のんびり会話してる様に見えて、実はリリスの雨の様な無差別魔法を避けながら会話してます。

ベルゼブブの方は、障壁を張っているのか、当たる前に消えています。
羨ましい。

こっちは時々当たっているというのに……
まあ、当たる前に凍らせてますが。

「それにしても……本当に良い武器を持っていらっしゃる」

「ま、まあ、優秀な子が造ってくれましたから……当然です！」

「ククク……顔が赤いですよ？」

「黙りなさい！」

「……私、いらなくない？」

リリスが何か言っていますが、無視です。

顔が赤くなるのはしょうがないじゃないですか……大体が、可愛すぎるんですよ！

あの少し潤んだ瞳からの上目遣い！

うまく喋れないから、何とか自分の言いたい事を伝えようとする健気さ！

小さい手足で、一生懸命動く愛らしさ！

……最高です。

おや、魔法がやみました。

「ククク……さて、お話はコレぐらいで良いでしょう?」

「そうですね……もう、終わりです」

「それはこちらの、なに!？」

驚いてますね。

こちらが、魔法を避けつつ、ベルゼブブの足元を凍らせていたことに。

「クツ！だが、足だけなら！」

「でしょうね……加速^{アクセル}！」

ミーシャ殿に教えられたその言葉と共に、私の体を紅いオーラが包み込む。

自分でも驚くほどの加速と共に、一瞬でベルゼブブの前に現れ、大鎌を腹に突き刺す。

刺さった所から、どんどん凍っていく。

「貴女と言い、あのお嬢さんと言い……切り札が多すぎでしょう」

その言葉と共に、ベルゼブブの全身が凍りつく。

「ベルゼブブが、やられた!？」

「時間はかけられません……一瞬で終わらせます」
「ク、クソ!」

リリスの放つ魔法を加速しながら避けて、近付いてゆく。

どちらが魔王か分かりませんね。

かたや必死に魔法を放つ。

かたや紅いオーラを纏って余裕で、圧倒する。

……私は魔王じゃありませんよ？

そして、大鎌を

・
・
・
・
・

視点・母

レイがアスモデウスを倒して、なんだかミー君が心配になった。
それで、工房に来てみれば、シルビアが死にかけて、お姫様が何とか治そうとしている、そんな場面に出くわした。

「シルビア！酷い怪我……確か治癒の呪符があつた筈！」

「だから、シルビアって誰？」

「結局、お前誰だ？」

「フツ……聞いて驚け！俺はアメリアの夫にして」

「あつそ」

「聞いたって酷くね!？」

お姫様とレイが漫才してるが、今はシルビアの治療に専念する。

治癒の効果のある呪符を、シルビアの傷にかざす。
呪符から光が溢れ、シルビアの傷を治してゆく。
コレなら何とか……

「う……おく、さま？」

「喋らなくていいわ……少し待ってなさい、すぐに治してあげるから」

「ミーシャ、様を……御守り、できま、せんでし、た」

「……レイ、工房の中を見てきて」

「工房内に気配は無い……もう、誰もいない」

「そう……誰もいない？」

なら、工房の主である、あのおじいさんは？
そういえば、名前なんて言っただかしら？

「サ、タン、です」

「え？」

「なんだと!？」

「サタン？」

「あの、工房の、主は、サタン、です」

じゃあ、ミー君は……

「お姫様、レイ、あの三人のところに!早く!」

「分かった!」

「りよ、了解!」

お姫様とレイが、一緒に走り去って行く。

「私は、守れ、なかった……それが、辛い、です」

「そう、なら次はしっかりしなさい……連れて行かれたなら、取り返しなさい」

「……はい」

間に合うかしら……

いえ、間に合ってくれないと困るわ。

絶対に……

・

・

・

視点・リユーネ

クリスとクリアの二人が、止めを刺そうと武器を振り上げた時、その声が聞こえた。

「そこまでだ」

その声には、威圧感が……

その声には、圧迫感が……

その声には、苦しみが……

「目的は、達成した」

その言葉と共に、残っていた魔王達の足元に魔方陣が現れる。
アレは……転移魔法！？

「この子は、預からせてもらっ」

その声が、上空から聞こえた。
上を向くと、そこには……ミーシャを抱えた、あの工房のおじいさんがいた。

「ミー……なんで、貴方がミーを抱えてる」

「……私が、サタンであり、魔界側の者だからだ」

「やめろ……やめてくれ……」

サタンの周りに、二つの魔方陣が現れる。

一つは、サタンを転移する為。

もう一つは……

「やめろおおおお！！！」

ミーを転移する為。

そして、魔界の襲撃は終わり、一人も死ぬことなく……敗北した。
ミーシャは連れて行かれ、どうなったか分からない。
だが、一人の男がある事を言った。

第二十三話（後書き）

駄文？なのは、ほら、俺ですから。

もしかしたら、良いと言ってくれる人がいるかもしれないので、駄文に？付けてみました。

無駄な努力です。

魔界編、頑張ります。

外伝・その？（前書き）

なんだかなあ。

……なんだかなあ。

一言。

どうしてこうなった？

執念だけで剣を振る。

だが、男はその攻撃を簡単に避ける。

「クソ！クソ！クソ！クソ！クソ！」

「……何をそんなに焦ってるんだ？」

「貴様なんかに、分かるわけがないだろお！！」

「……そうか、い！」

男は残像を残し、私の鳩尾に拳を沈めてくる。

「あ……」

全身の力が抜け、崩れ落ちる。

声も出すことが出来ず、動くことも出来ない。

「何を勘違いしてるか知らないが、とりあえず言っておく……俺は魔界側じゃなく、天界側だ」

天、界？

・

・

・

視点・リリィ

天界ね……

とりあえず、リユースの安否を確かめる。

……うん、大丈夫そうだな。

「天界？」

「では、天使なのですか？」

それはないだろ？

バカだし。

「あゝ天使ではない、つまりだな……あれ？」

「お前のことはどうでもいいから、天界は何故お前を送ってきたんだ？」

「どうでもいいって……えっと、ミーシャを守る様に言われてたんだよ、他にもなんか言われた」

なるほど、しかもこいつはアメリカ小母の夫らしいし……死んでいる筈だから……

「つまり、お前は天使によって、肉体を与えられて、ミーシャを守りに来たと、そうゆう事か？」

「おお！そうだそうだ！頭良いな！」

お前がバカなだけだろ。

「お前がバカなだけだろ？」

「おバカ」

「バカですね」

「バカ認定！？」

だが……何故、天界はミーシャを守ろうとしている？
しかも、自分達で直接守らずに……

「天界の目的は……なんだ？」

「ああ、それならミーシャの肉体に神を降臨することだ」
「……は？」

神を？

ミーシャノ肉体に？
ん？何か引つかかるな。

「……ミーシャ自身はどうなるんだ？」

「そういう話だと……」

「魂や人格は……」

「消えるらしいぞ？」

……自分の息子だろ？
なんで協力してんの？

「このままだと、二度と会えないからさっ折角なら会いに行こうと
思っ……」

「バカは死ね」

「消えろ」

「むしろ殺します」

「八つ裂きにしてやる」

おお、リユーネも生き返ったか。

四対一ならどれだけ強かろうとやれるだろう。

「え、あの、待ってくれない？リユーネ？俺はお前の父だぞ？いい
のか！」

「私の家族は、三人……ミーとメイドさんと母様だけだ」

「ええええ……な、なら俺が死んだ理由を教えてやる！お前の後に
息子か娘のどちらでもいいから生まれたら、一緒に旅に出ようと思

つたんだよ！そしたら、何故か薬を盛られてな……たかがドラゴンの生息地に行こうとしただけなのに……」

むしろ死んでよかったんじゃないか？

最悪、ミーシャが竜の胃袋の中だったかもしれないんだぞ？

「まあ……」

「とりあえず……」

「その命……」

「神に返して来い！」

四人で、同時に攻撃する。

だが、強さはあちらの方が上らしく、全て紙一重でかわされる。

「ま、待て！もう一つ情報がある！ミーシャについてだ！」

その言葉に全員が動きを止める。

いつでも斬りかけられる様に、構えは解かない。

「ふう……魔界は神を降臨させない為にミーシャを誘拐した可能性がある……だから、死んでない筈だ」

「だが、ミーシャを殺せば神の復活など不可能になるのでは？」

「死んだら死んだで、新しい神の器が生まれるらしい」

なら、ミーシャは魔界にいる限り、安全なのか？

「で、ここからが俺の本来の目的だ……天界側の者としてでなく、な」

かっこつけてるようだが……

「キモイ」

「…………お前達を鍛える為だ!」

無視したか。

…………鍛える?

「たしかに、お前達は人間からしたら最強とすら呼べるだろう……だが、天使や悪魔には勝てないだろう?」

「魔王軍の三分の二倒した」

「レヴィアタンとベルゼブブを圧倒した」

「レヴィアタンには負けそうでしたが、ベルゼブブを倒してリリースを倒す瞬間でした」

「アストラルを倒したぞ」

「…………天使には勝てないだろう?」

言い換えたか。

だが、こうして言葉にすると、以上だな。

前の私なら魔王級にすら梃子摺る筈だったのにな。

「そこで!俺が鍛えてやろう!」

「遠慮する」

「帰れ」

「さようなら」

「消え失せろ」

「…………お、俺が、鍛え、て、やろう!」

泣きそうなんだが。

強いのは分かる。

だが、そんなことをしてる暇は……

「それがいいわ」

「アメリカ小母？」

「母様、それにメイドさんも」

森から出てきたのは、シルビアに肩を貸すアメリカ小母だった。

「小母は余計よ……魔界がミー君に危害を加えないなら、少しでも強くなりなさい」

「ですが！」

「守りたいんでしょう？」

……相変わらず、カッコイイな。

旦那と違つて。

「取り返して、守り抜ける位……強くなりなさい」

「……わかりました」

「了解」

「アメリカ殿が言うなら」

「これが……人望の差、か」

強くなる。

そうすれば、ミーシャを守れる。

「なら、一年……その間に今より強くしろ」

「……いいだろう！七つの大罪如き秒殺できる様にしてやる！」

ミーシャ、必ず、迎えに行くからな？

……あ、私、姫じゃん。

忘れてた。

そして、ミーシャを助ける為の特訓が、始まった。

外伝・その？（後書き）

レイの旦那がバカだ。

七つの大罪瞬殺フラグが立った。

ま、いいよね。

外伝だし。

第二十四話（前書き）

魔界編、はっちゃける予定。

自重はしない。

後悔と反省はする。

第二十四話

.....？

知らない天井だ。

体を起して、周りを見渡す。

「あ、起きたよ！」

そう言ったのは、フリフリのドレスの様な服を来た美人さん。
美人さんの言葉に人が集まってくる。

「起きたようだなによりなにより」

紳士の様な理想的な青年。

つまり、イケメン。

「へゝ意外と.....可愛い？」

下着の様な服を着た、美少女。

まあ、発育の方は.....ぼちぼちだ。

「.....」

無口でクールなイケメン。

嫉妬すらできないほどのイケメン。

「.....だ、れ？」

俺の第一声。

ここにいたる経緯でも、よく思い出してみよう。

・
・
・
・

・
・
・

・

振り返るとそこには、おじいちゃんがいた。

「……な、に？」

「……いや、なんでもない」

なんでもないのか。
そろそろ帰るか。

おじいちゃんを通り過ぎて、工房から出て行くとする。

「じゃ、あ……また」

「……ああ」

扉に手をかけて、ブラックアウト。

・
・
・
・

・
・
・

・

よく分かん。

おじいちゃんになんかされた？

でも、あのおじいちゃんが？

信じられん。

「そっか、私達の事知らないんだっけ？私は、レヴィアタン、よろ

しくね？」

「私はベルゼブブですよ」

「リリースでいいよ」

「……ルシファーだ」

どっかで聞いたことある名前だな。
まあ、いいか。

「ミー、シャ、です」

そのまま立ち上がって、外に出ようとする。

「どこ行くの？」

「かえ、る」

決まってるじゃん。

だからその服を掴む手を離してくれ。

「すまんがそれは出来んな」

そう言って、扉の前に立つベルゼブブさん。
なんで邪魔をする？

「まあ、サタンが来るまで待ってろ」

椅子を準備するリリースさん。
サタンって誰？

「……少し、話がしたい」

むう、しょうがないですな。
少しだけだよ？

・
・
・
・
・

この人達は、魔王らしい。
で、俺のことを誘拐したらしい。
でも、今戻るとまた誘拐されるかもしれないらしい。
どうすればいい？

「……私は君に、君達に謝らなければいけない」
「……な、ぜ？」

ルシファーさん、なんかしたのか？

「小さな塊を飛ばす武器を持った、人間の女を殺そうとしたからだ」
「……」

メイドさん、だよな？
え、ルシファーさんが殺そうとした？

「怨んでくれても構わない……だが、せめて、謝らせて欲しい」

むう……悪い人ではないんだよね。
魔王だけど。

どうしたもんか……メイドさんは死んでない筈。
そんな気がする。
だから、俺の判断は！

「いら、ない」

「……何故だ？」

「あやま、る、なら、直、接」

「……そう、だな」

ルシファーさんが、少しスッキリした顔で小さく笑う。
カッケ。

「おお、ルシファーが陥落した」

「ミーちゃん、可愛い」

「興味深いですねえ」

なんか、温い魔王さん達だなあ

姉上達……心配してるかな？

・

・

・

視点・サタン

「天界が、攻めてくるか」

「そのようです」

私の傍で、いろいろと動いてくれるこの子供は、七つの大罪が《強欲》のベヒモス。

今は、子供の様な見た目だが……真の姿は、巨大なサイの様な姿だ。

「狙いは、アサミネ・ヤオイでしょうね」

「……そうだな」

まだ少し余裕がある。

だが、それも限界がある。

あの子は、なんとしてでも守らなくてはいいかな。

「ベヒモス」

「はい？」

「そろそろ行くぞ」

「はい！」

あの子なら、ベヒモスとも仲良くなってくれるだろう。

私以外に中々気を許さないから困る。

せめて、今この時だけでも、幸せを感じて欲しい。

悪魔としては、間違っているのかもしれないが、な。

第二十四話（後書き）

ルシファーさんイケメンすぎる。

サタンが、ベヒモスのお父さんみたいな感じになってる。

俺も限界に挑戦してみる。

魔界編、もう誰も出さなくていいかな？

あ、アストラルは性転換して出す予定。

お楽しみにいゝ

第二十五話（前書き）

ヌルイ。

魔王が、ヌルイ。

第二十五話

サタンは、おじいちゃんだった！

おじいちゃんが、ベヒモスと言う魔王を置いてどこかに行った。
ベヒモスことベスちゃんが睨んできた。

男の子に見えて、女の子だった……どうしよう？

とりあえず、レヴィアタンことレヴィたんに抱っこされています。
メツチャ嬉しそうですな。

「　　」

「あゝ暇」

「確かに、あの戦いの後だと暇ですねえ」

「……寒くないか？」

「うう」

なんだこのカオス。

魔王五人に囲まれてるぞ。

「サタンは、どこだああ！！」

「　　」

「ん？なんだ、アストラルか」

「女になつてますね」

「……リンゴ、いるか？」

「うう」

さらに混沌としてきた。

とりあえず、ルシファーことルシがくれたリンゴをベスちゃんにあげた。

「う、うう？」

戸惑いながらもしっかり食べてた。
小動物っぽくて可愛い。

「あの野郎……生き返らせるのは良いが、なんで女にしたんだよ！
ん？誰だお前？」

「ミー、シャ」

「ミーシャ？ああ、俺達が真界に行った理由か」

「……ん」

「なんだ？喋れないのか？」

喋れないわけじゃ、無いよね？
首を横に振る。

「む……クソ、早く戻らないと……」

アストラルさんの顔が少し赤くなっていた。
慣れない体で、照れてるんだと思う。

「おイルシファー、サタンがどこにいるか知ってるだろ？」

「……外で、何かを造っている様だ」

「何かを造ってる？あのクソ爺、何考えてんだよ」

「サタン様はクソ爺じゃない！」

「黙ってるクソチビが」

喧嘩だ。

殴り合いは勘弁してくれ。

「フン！人間如きに負けたくせに！」

「あんな剣持つてる奴に勝てるわけねえだろうがぁ!!」

剣？

しかも反則クラスの剣。

……姉上じゃね？

「ご、めん、な、さい」

「あ？なんでお前が謝ん……お前が造ったのか？」

首を縦に振る。

殴られるかな？

殴られちゃうのかな？

「……ま、まあ、どんな理由だろうと俺の負けは負けだからな……
気にすんな」

この人優しい！

甘えたくなる優しさですな。

アストラルさんに抱っこを要求する！

……俺、どうした？

昔の俺はどこに……どうでもいいか。

「な、なんだよ？だ、抱っこでもすれば良いのか？」

「……ん」

「ぐ……むう…………しよ、しょうがねえな……今回だけだからな？」

「コレはコレで面白い」

「確かに」

抱っこされた。

ヤバイ。

物凄く眠くなる。

ただ、胸が少し大きすぎて邪魔。

「……アストラル……いつか貴女を殺します」

「げ……嫉妬すんな」

「しょうがないじゃないですか……私、七つの大罪の嫉妬ですよ？
ああ、夜道には、気ヲ付けテ下さいネ？」

レヴィたん、怖い。

アストラルさんの腕の中で丸くなる。

少し震えてるのは、その、あの、えっと、によ、尿意が……

「ほ、ほら！ミーシャが怯えてるぞ！」

「ッ！？わ、私が、怖いから？そ、そんな……うえええん、ごべん
ねえええ」

「泣いたね」

「泣きましたね」

「……食事でも、用意するか」

「サタン様は魔界の支配者なですよ？怨むこと自体間違いなので
すから……そもそも」

……あっちにいた時より、楽しいと思ってる……自分がいる。

・

・

・

視点・サタン

なんで、私はまた工房を造っているのだろう。

分からない。

まあ、ミーシャ君に使って貰うか。

あちらにいた時も、私は特に何もしていなかったからな。せいぜい、細かい装飾品を作る位だ。

ミーシャ君ほどの技術は無いからな。

……一人だと、やる事が無いな。

七つの大罪の強欲に新しい魔王をつけなくてはな……

……暇だ。

……私も、ミーシャ君の所に行こうか？

いや、そろそろアストラルの肉体が完成する頃か……女の肉体になつていたな。

アストラルを倒したのが、女だったのが原因なのだが……あいつの事だ、私のせいだと思っているのだろうか。

……面倒だ。

ああ、暇だな。

・

・

・

なんだろう、物凄い残念な感じの電波が……

どうでもいいか。

アストラルさん、又ク又クしてる。

まるで、炎の前にいる様な。

……アストラルって……燃えてる印象が……まあ、いいか。
暖かい。

第二十五話（後書き）

サタン、どうした？

なんか、魔王の皆さんが最初の頃からどんどん離れてく。

特にサタン、ルシファー、アストラルが。

まあ、主人公が主人公だからしょうがないか。

第二十六話（前書き）

魔界のヌルサに、全俺が泣いた。
笑いすぎで。

まあ、冗談だけど。

一応戦闘的な書いてみた。

どうぞ。

第二十六話

おじいちゃんが工房を造った。

大剣を二つ創ってみた。

カオス・オブ・スカイ 混沌を運びし大空と奈落へ誘いし大地の二つで一組。

名前は魔界らしくしてみた。

カオス・オブ・スカイ 右手用の混沌を運びし大空は、空色で刃が美しく鋭い、斬ることを

追求した大剣。

アビス・ザ・アース 左手用の奈落へ誘いし大地は、金色で刃が歪で潰れている、砕くことを追求した大剣。

まあ、五メートルサイズの大剣を二つだから、かなり扱いが難しいんだけど。

カオス・オブ・スカイ 混沌を運びし大空の概念。

スキル、【装飾化】【覚醒】【断罪剣】

上位の概念は、【不滅】【対空強化】

絶対概念、【断絶】【固定選定】【選定消滅】【自己成長】

装飾化は、武器を腕輪やネックレスなどにする。

断罪剣は、敵を斬れば斬るほど切れ味を強化する。

対空強化は、飛行が可能な相手と戦闘している時、身体能力を強化する。

断絶は、斬ること以外が出来なくなるが、あらゆるモノを斬ることが出来る。

自己成長は、使えば使うほど使用者に最適化していく。

アビス・ザ・アース 奈落へ誘いし大地の概念。

スキル、【装飾化】【解放】【地烈波】

上位の概念は、【不滅】【対地強化】

絶対概念、【粉碎】【固定選定】【選定消滅】【自己成長】

地烈波は、地面に叩きつけることで、少しの間地面を自在に操ることが出来る。

対地強化は、地面を動く相手と戦闘している時、身体能力を強化する。

粉碎は、砕く事しか出来なくなるが、あらゆるモノを砕くことが出来る。

完璧。

とゆうわけで、実際に使ってみた。

・
・
・
・
・

コロシアムの様な場所の中心にミーシャは立ち、その両手には不釣り合いな大剣が二つ。

そして、ミーシャを囲むように、アストラル、ベルゼブブ、リリース、レヴィアタン、ベヒモスがそれぞれ炎の剣、風の槍、光以外の魔術、氷のハンマー、雷の大斧を油断無く構える。

誰一人何も言わず、静かに戦意を滾らせる。

最初に動いたのは……ベヒモス。

大振りに見えるが、当たっても外れてもすぐに次の行動に移れる様に工夫された攻撃。

その攻撃により、ミーシャの体が斬れた……が、その体が消えて、ベルゼブブの横に何時の間にか立っていた。

ベルゼブブは、それに慌てる事無く風の槍で突きを放つ。

ミーシャは、その矛先を左手の刃の潰れた大剣で逸らし、右手の刃の鋭い大剣でベルゼブブを横薙ぎにする。

ベルゼブブは、蠅となって少し離れた所に再度体を作る。

ミーシャとベルゼブブの一瞬の攻防の間にリリスが魔術を放ち、レヴィアタンがその魔術に続く様に氷のハンマー腰だめにしながら突っ込む。

ミーシャは右手を前へ出す。

すると、その手を中心に、鮮やかで、美しい七枚の花弁が現れる。その花弁が、リリスの魔術を全て防ぎきる。

魔術がやんだと同時に、花弁が空気に溶ける様に消える。

レヴィアタンが氷のハンマーを大上段に構え、地面に叩きつける様に全力で振り下ろす。

ミーシャは右手の大剣で、真正面から受け止める。

ミーシャの足が地面に挟り込み、地面が陥没する。

そして、背後からアストラルが、右側からベルゼブブが、左側からベヒモスが、上空からリリスが、攻撃を仕掛ける。

ミーシャは、その場から動かずに左手の大剣を地面に叩きつける。

そして、地面を操り、向かってくる全員に地面を槍の様にして妨害する。

そして一歩足を踏み出し……………こけた。

・
・
・
・

バランスが、悪い。

体が小さいのがいけないんだ！

「あのタイミングでこけるのかよ」

「ホントに……ですが、ずいぶんの強いですねえ」

「むしろ強すぎだろ」

「大丈夫？」

「むう……まあ、力は認めてやっても……」

体が、体が大きくなりたい！

……そうだ！体が小さいのなら、大きくすれば良いじゃない！

まあ、もう少し試したいし……リトライを要求する！

「……もう、い、かい」

「まあ、俺も楽しいから良いけどな」

「むしろ、こちらから頼みたいくらいですね」

「しょうがね〜な」

「じゃあ、まずは傷の手当てをしようね？」

「時間が勿体無いけど……今日は暇だから……」

痛くなんか無いんだからね！

手当てなんて必要ないんだから！

……血がスゲー出てる。

・

・

・

視点・ルシファー

「あの歳で、あそこまで出来るのか」

「……神の器、か」

今のままでは、私に及ばないまでも、腕の一つはもっていかれるだろうか？

惜しいな……あと、五年と言った所か？

「ミーシャ君と戦いたいか？」

「……ああ、少しでも……可能性を上げられるなら」

あの子に戦い方を、生き方を、抗い方を教えてやりたい。
あの子は、生きるべきだ。

「お前も、変わったな」

サタンは、ミーシャの作ったオムライスを食べながら言う。

「……お前に言われたくないな」

かく言う私も、ミーシャの作ったカレーを食べながらだが。

「……うまいな」

「……そうだな」

食べ終わったら、感想でも言いに行くか。

・
・
・
・

なんだろう。

ものすごく、シュールな場面を見逃した気がする。
まあ、いいか。

俺は、大剣を構え……斬りかかった。

第二十六話（後書き）

なんで、最後ギャグにしたんだろう？

てか、サタンとルシファーがオムライスとカレーって……
想像したけど、メツチャシユールだ。

アストラルが、薄くなってる。

次回は、ルシファー戦？

第二十七話（前書き）

今回は、ミーシャ君対ルシファ―。

いろいろ伏線回収した。

頑張った！

ミーシャ君の大人版？出ます。

第二十七話

大剣を使いこなす為に、ある指輪を創ってみた。
名を運命の導き。

スキル、【肉体操作】 【精神操作】

肉体操作は、この概念の付いた物を持っていると、自身の肉体を自由に操作できる。
時間操作は、この概念の付いた物を持っていると、自身の精神を自由に操作できる。

コレさえあれば、あの二つの大剣を使いこなせるのだ！
使いこなせるんだけど……何故俺はルシと戦うことに？
まあ、やるからには勝……てるのか？

いや！あの魔王勢とだって互角に戦えたんだから！
この指輪さえあれば！
いける！……………かな？

・
・
・
・
・

視点・ルシファー

コロシウムで、ミーシャと向かい合う。
ミーシャの武器は、前と同様、二つの巨大な大剣。
そして、今回は指輪を付けている。
どんな物かは分からないが、油断する気は無い。

私は、左手に持った妖刀・神切り。

昔いた、ただ一人の親友からの贈り物。

刀という故郷の武器と言っていた。

刀を鞘に入れたまま、ミーシャが動くのを待つ。

ミーシャが指輪の付けてある手を前に翳す。

私も手を前に翳す。

あの、シルビアという名前の人間の女にも使った停止結界を発動する。

あらゆる動きを三秒間停止する結界。

今まで、この結界を越えて私に傷をつけた者は……いない。

ミーシャの指輪から光の糸が出てきて、その糸がミーシャを覆っていく。

そのまま、繭の様に覆い隠す。

そして、繭の様な糸が光の粒子になって消える。

そこから出て来たのは……ミーシャではなく、見知らぬ青年だった。私と同じ身長。

美しい空色の髪を膝上まで伸びた長髪。

片方は閉じられているが、開いている瞳から見える金色の瞳。

だが、その顔はどこかで見たことがある造形だった。

・
・
・
・
・
・

・

ルシファーが驚くのも待たず、青年は動き出す。

唯一歩、それだけでルシファーの目の前に到達する。

そして、左の大剣をルシファーの前で振り、結界を砕く。

その勢いを殺さずに、右の大剣でルシファーを切り裂こうとする。

そこでルシファーが、唐突に反応して居合いの要領で刀を抜き、大剣を弾く。

弾かれた瞬間、いったん距離をとり、止まる。
ルシファーも刀を鞘に入れ、居合いの構えで、止まる

「ミーシャ、か？」

「ええ、ミーシャです」

「普通に喋れるのか？」

「この指輪の御蔭ですよ」

「そうか……ここからは……」

「はい、真剣勝負」

「いざ……」

そして、二人は同時に動き出す。

・

・

・

視点・ルシファー

今のミーシャは、この前以上に速い。

私ですら、目で追うことすら出来ない。

だが、私は視覚よりも聴覚が優れている。

ゆえに、ミーシャの心臓の音で、どこにいるか判断する。

右から風きり音が聞こえたので、右に向かって刀を振る。

ガキャンッ！！

その巨大な大剣と細い刀から鳴る音とは思えない音が聞こえる。
腕に強力な衝撃が走る。

だが、その衝撃を無視して刀を持っていない方の手にある鞘を振り

かぶる。

ミーシャは、バックステップで距離をとり回避する。
離れた瞬間、複合魔術を発動する。

「ダーク・ストライク！」

闇と風の複合魔術。

私の前の地面を切り裂いて、ミーシャに向かう見えない刃の魔術。
それに対して、ミーシャも魔術を使う。

「ライト・ブラスト！」

光と水の複合魔術。

見えない刃を包み、消し去る。

「魔術も使えるのか」

「勉強だけは、してましたから」

「そうか……フフ、ハハハ！」

「……クク、アハハ！」

二人で笑う。

唯、自らの全力の試せる相手が目の前にいるから。

「全力で……」

「本気で……」

「一殺し合おう！」

同時に地を蹴る。

その時、私は見る事になった。

ミーシャがいつも閉じている、左目をあけるのを……

その瞳は、引き込まれる様な、美しい輝きがある……虹色だった。

・ ・ ・ ・

・ ・ ・

・

久しぶりに、左目を開く。

その瞬間、あらゆる流れを見ることが出来る。

魔力の流れ。

時の流れ。

死の流れ。

そして、今見るべき流れは、時の流れ。

過去、現在、未来、あらゆる時の流れのみを視界に残す。

その時の流れから、さらに未来の流れのみを見る。

その流れを見ながら、目の前の何も無い空間を切り裂く。

その行動で、次元が裂ける。

その次元にそのまま入り。

次元が閉じた。

・ ・ ・ ・

・ ・ ・

・

視点・ルシファー

次元を切り裂いた。

それだけでも、異常なのに、その次元の裂け目に入った。

次元を裂く事が出来るのは、召喚の魔法を使った時に次元の裂け目から聖霊界の生物が出てくる。

それ以外に次元を操る事が出来る者は、いない。
その、筈だったが……ミーシャは、自由に次元を操る事が出来る様だ。

見る事も、気配を見つける事も、音を聞くこともできない。
こんな切り札を持つているのは、予想外だった。
と、そこでいきなり全方位の空間が裂け、囲まれる様に次元の裂け目が現れる。

最初に音が聞こえたのは、右。
大剣が飛んでくる。

それを裂け目の無い方に弾くが、弾いた先に裂け目が出来て、そのまま大剣が消える。

その瞬間から、攻撃が激しくなる。

左、前、右、後ろ、斜め、あらゆる方向から大剣が飛んでくる。

停止結界は発動してる筈なのに、切り裂かれ、碎かれる。

私は、避けて、弾いて、受け流す。

攻撃は弱くなるどころか、どんどん激しくなる。

だが、どれだけ激しくなろうと、所詮は二つのみだ……このままだとジリ貧だ。

物理的には、次元の裂け目に干渉できないが、魔法や魔術なら干渉出来る筈とあたりをつけて魔術を発動しようとする。

そこで、上に心臓の音が聞こえた。

・
・
・
・
・

火・水・風・雷・土・氷・光・闇の全てを合わせた、魔法剣・エーテル・ブレイドを両手で持ち、上から切り下ろす。

だが、ルシファアの障壁に阻まれ、当てることが出来なかった。
が、そのままルシファアの体に蹴りを叩き込む。

「ぐっ!？」

強化魔法も使った蹴りなので、かなりの威力があつた筈だ。
これなら勝てる!と思つたら……

パキン!

手の辺りで何かが壊れる。

ゆっくり手を見る。

何も無い。

足元を見る。

そこには、砕け散つた指輪があつた。

「あ……壊れ、た？」

そして、意識が闇に飲まれる。

・

・

・

視点・ルシファア

……ミーシャが倒れた。

気絶しているだけの様で、肉体も元の状態に戻っている。

戦闘時間は、約三分。

あの状態は、三分が限界の様だ。

まあ、このまま成長すれば、あの強さを保てるのだろう。
やはり、どんなことをしても、生かしてみせる。
……とりあえず、どうすればいいんだ？

第二十七話（後書き）

もう少し魔王勢の好感度あげたら天界でも行くか。

封 演技の武器とかでも魔王勢に持たせようか？

出して欲しそうだし。

読者が。

原典以上の物になるぜ？

あ、何か出して欲しい武器とかあったら言ってね。
無理矢理出すから。

俺は、トンファー出したい。

外伝・その？（前書き）

頑張っで、伏線を回収してみた。

最後の方、真面目に書いてみた。

父親の扱いが酷いな。

まあ、屍だし……どうでもいいか。

外伝・その？

視点・リユーネ

ミーが心配なのだが、余り心配する必要が無い気がする。
何故だろう？

「考え事とはいい度胸だああああ！！！！」

バカ、間違えた、父様が木剣を振りかぶる。

「てい！」

「グホッ！？」

隙だらけの鳩尾に突きを放つ。

父様は地面で転げ回り、痛そうにお腹を押さえている。

「ちょ！？今の酷くない！？」

「考え事の邪魔をするからです」

「訓練中に考え事は無いだろ！？」

「三日前から父様に全勝出来る様になってるのですから、もういいです」

「そんな！？お父さんを見捨てないで！」

私の足にしがみつくバカ。

とりあえず、顔を踏みつけておいた。

「グブエ！？」

地面に擦り付ける様に踏み抜く。
悲鳴も出ないように口を押さえながら。

「何してるんだ？」

「……痛そう」

「偶には手加減してあげた方が……」

リリイとクリスとクリアが、こちらに歩いてくる。
足元の人物を心配そうに

「で、できれば……もう少し上を……」

蔑んだ目を向ける。

三人は、砂をかけるように蹴りを入れる。

そのまま、何事も無かったかのように会話する。

「私達もだいぶ強くなったな？」

「そうだな……姫ということを忘れそうになる」

「ミシヤから貰った武器も、ちゃんと使えるようになった」

「ホント、大変でしたね……」

懐かしむ様に、全員が遠い目をする。

城が壊れたり、町が燃えたり、城壁が吹き飛んだり。

いろいろあったな……

今ならミーを助けにいけるんじゃないか？

というわけで聞いてみる。

「魔界へ行くには？」

「わからん」

「じゃあ、死ね」

「俺父おげべ!?!……それは、らめ」

私が踏んで、リリイが糸で縛り、クリスが足に乗っかり、クリアが凍らせる。

これがコンビネーション。

「貴女達楽しそうね?」

「元気すぎて困るぐらいですよ」

「あ、女王陛下、母様も」

城の訓練場に來たのは、この国の女王、フォルメスト・メイファ・デステントと母様。

その後ろにメイドさんもいた。

「女王、珍しい」

「御身体の方は大丈夫なのですか?」

女王陛下は、今まで病に侵されていて、まともに歩く事が出来なかった。

寝込んでいた影響で、髪の色が落ちて白髪になっている。

それでもその美しさは衰えておらず、むしろ儚げに見えてとても人氣になっている。

特に市民や兵達の間で。

そこで、リリイの持っている杖専用の回復魔法、再生の流水によって病が無くなり、動けるようになったのだ。

再生の流水は、肉体や傷の回復よりも毒や病気を治すのに特化されているようだ。

まあ、そのせいで女王陛下が、ミーに興味をもってしまったが……

「心配してくれてありがとう、ミーシャ君の所へは?」

「まだ、分かっていません」

「そう……早く会って見たいわ……ウチの娘のお気に入りみたいだし、ね？」

「むう……」

リリーの顔が赤い。

ライバルが多いな……ミーの貞操は私の物だ！

いや、最初だけでも私が貰うでいいか？

とりあえず……早く取り返さなくては！

・

・

・

何故か、帰りたくなかった。

いろんな意味で、身の危険を感じる。

「ミーシャ君、どうしたの？」

「……ん」

レヴィたんが聞いてきたので、首を横に振る。

レヴィたんの頬が赤くなる。

……魔界にいても、身の危険を感じる。

どうすればいいんだ！

「ミーシャ！紅茶入れてくれ！」

「私はアイスを要求するわ！」

「では、しつとりべとべとなカレーを……冗談だからそんな目で見ないでください、甘めの飲み物を」

「パフェを！パフェを作ってください！」

「……モンブランを頼む」

「じゃあ、コーヒーを入れてくれ……マモンも何か頼んだらどうだ？」

「……イチゴケーキを」

七つの大罪が全員そろった。

色欲にマモンさんが入った。

インテリな秘書の様な人で、イチゴやら、なんやらの可愛い物好き。可愛い物を貪欲に集めることに興奮することから、色欲に選ばれた様だ。

ちなみに、今の場所は工房だ。

一階が、武器などを創る場所で、二階が、カフェの样になっている。七つの大罪は、基本ここにたむろしている。

ちなみに、上の注文を作るのは俺だ。

まあ、楽しいからいいんだけど……これ、姉上達と一緒にになったらどうなるんだろう？

……俺が一番大変じゃない？

ああ、そういえば……俺、不幸体質だっけ？

・

・

・

視点・？？？

「……アサミネ、ヤオイ」

「可哀想ではあるが……」

「我らが、神の復活の為にも……」

「……必ず、連れて来るんだ」

四つの影が、雲の中にあつた。
その影のうち、二つが消える。

「……」

「まだ、迷つてゐるのか？」

「ええ、ホントに、これでいいのか……」

「もう、余り時間が無いんだ……なるべく早く覚悟を決めろ」

そう言い残し、影が一つになる。

「正義とは……なんなのでしょう？……私には……分かりません……」

そして、最後の影が……消えた。

外伝・その？（後書き）

ミー君と姉上のある意味以心伝心。

伏線増えた……

七つの大罪全員集合。
外伝で。

ベルゼブブの頼んだのは、カレーです。
けして、ウ　カレーではないです。
カレーなんです。

第二十八話（前書き）

何も思いつかない。

ヤバイ。

止まるかも。

まあ、一日二日皆空けて投稿してるよね？

第二十八話

耐久度が足りない。

不滅の概念も付けてみたけど、三分で壊れた。
ダメだこりゃ。

魔王の皆に武器でも創るかな。
何にしようかなあゝ

・

・

・

かゆ……うま……

「ミーシャく、きゃあああああ!？」

「なんだ!？どうし、うわあ!？」

レヴィたんとリリースが驚いてる。

どうなってるか？

封神 技の金蛟剪きんこうせんをアレンジしたのが、原因だ。
原典より魔改造の方が好きなんです。

七匹七色の竜達に弄ばれてる。

現在天井に貼り付けられてます。

「このクソ竜ども!うらやま、けしからん事を!」

「いや、意味わかんないから」

二人が、俺を下ろそうと頑張っているの、今の内に説明しよう!

スキル、【火竜召喚】 【水竜召喚】 【風竜召喚】 【雷竜召喚】 【土竜召喚】 【氷竜召喚】 【闇竜召喚】
上位の概念、【不滅】 【精神感応】 【自律思考】

召喚系は、そのままの通りで、召喚する事が出来る。

自立思考は、この概念を付けた物が自分で思考して、自由にする。自分が従うべき相手には、普通に従う。

自立思考、なんで付けたんだろう？

「クツ、こいつら……！」

「意外と、強い！」

降りるのに一時間掛かった。

誰かに押し付けよう。

・
・
・

というわけで、竜が似合いそうなアストラルさんにあげることにした。

「いいのか？」

「……ん」

「そっか……ありがとな！」

美人が男っぽく笑う。

カッコ綺麗だ。

照れるぜよ。

少し顔が赤い気がする。

「アストラル……あなたとゆう人は、一度ならず二度までも……許しません」

血塗れた斧が似合いそうな、レヴィたん登場。
どこのホラーですか？

「まあいい、早速試させてもらうか……名前なんて言っただ？」
「きん、こ、うせん」

うまく言えないので、いつも通り紙を渡す。

「……へ〜金蛟剪きんこうせんね……そらよ！」

アストラルさんが、金蛟剪きんこうせんを振ると竜が現れる。
炎と闇の竜だけだが。

他の竜は、相性と熟練度が原因で出てこないようだ。

「やれ！」

そう言うと、二匹の竜がレヴィたんに迫る。

「何故……貴方だけなのですかああああ……!!」

氷のハンマーで、叩き潰した。

それでも、氷が解けてゆき炎の竜が襲い掛かる。

それと同時に、アストラルさんも突っ込む。

本当の姿？ になって応戦するレヴィたん。

とりあえず帰ることにした。

・
・
・

「ミーシャ君」

「……こん、にちわ」

「ええ、こんにちわ」

工房の二階にマモンことマモさんがいた。
やっぱりこうやって見ると、普通だよね。
作った犬と猫のぬいぐるみを出してみる。
マモさんが鼻息荒く詰め寄って来る。
正直キモイ。

「一体何所でこれを！ハア！ハア！ハア！可愛いわ」
「……つく、た」

「ホ、ホントに！？ね、ねえ……よかつたらそれ……」
「……ん」

差し出す。

もともと暇だから作ったただけだし。

「ありがとう！」

「……うぶ」

おもいつきりハグされる。

マモさんの胸に顔が押し付けられて、息が出来ない。

「ハアハアハア、可愛いわ、もう絶対離さないからね！」

「……あゝその、お邪魔みたいだね」

今の声は、リリスさんかな？

助けてくださいよ。

そろそろ息が、ほん、とに……無理……

「？ミーシャ君？ミーシャ君！？」

「その胸のせいだな」

「ええ！？」

明日、何し、よ、う……グフッ！

ザク、とは……ちがう……

第二十八話（後書き）

毎日更新は無理があつたか。

まあ、それでもやるんだがな。

明日は、設定的なものを投稿します。

第二十九話（前書き）

ミーシャ君のアストラルに対しての好感度が上がった。
どうしても、逆に出来なかった。

第二十九話

Fateに出てくるハルバートを創ってみた。

ベスちゃん用に創った結果、放電してるハルバートになった。

名前は、オーバー・ザ・ライデン裁き降す雷電。

スキル、【放電】【加速】【直感】ライトニング・ジャッシュメント【雷鳴の裁き】

下位の概念、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【集中力上昇】【精神集中】

中位の概念、【嗅覚強化】【聴覚強化】【気配察知】

上位の概念、【不滅】【呪い・視覚】

放電は、電気を放つ事が出来る。

自身に纏って、肉体の限界を無理矢理出すなどいろいろ使い道がある。

ライトニング・ジャッシュメント雷鳴の裁きは、一時的に自身を雷化して、周囲一帯に雷を落とす。

雷化を保つ事は出来るが、保つ長さによってかなりの代償を伴う。

嗅覚強化は、嗅覚を活性化させて、匂いを嗅ぎ分ける事が出来る様になる。

聴覚強化は、聴覚を活性化させて、音を聞き分ける事が出来る様になる。

呪い・視覚は、呪いを発動してる時、視覚を奪う代わりに身体能力と視覚以外の感覚を強化する。

うーん、結構でかい。

ベスちゃんはどこだよ

二階で、俺のオレンジシャーベットを食べていた。

作るのに、苦労した俺のアイス。

「ん？ああ、ミーシャですか……このアイスも中々美味しいですね」
「……あ」

ベスちゃんが、最後の一口を食べた。

……悲しくなんか無いさ。
あれ？目から水が出る。

「ちょ！？なんで泣いてるんですか！？」
「……う」

止まらないよ。

どうやって作るか、わかんないから、同じ味を作るのに、三ヶ月も
掛けたのに……

もう、無いんだね。

「泣き止んでください！もう！どうすればいいんですか！？」

・
・
・
・

視点・アストラル

ミーシャにアップルティーでも入れて貰おうといつもの場所に行つ
たら、泣いてるミーシャとそれを泣き止ませようとしているベヒモ
スがいた。

「何やってんだ？」
「アストラル！？助かりました！何とかしてください！」

「しょうがねえな……ほら、ミーシャ」

ミーシャを抱っこして、背中を軽く叩く。
最近思うんだが、ミーシャを抱っこするのが癖になり始めてる。
まあ、別にいいんだけどな。

「泣いてたらわかんないだろ？どうした？」

「……あい、す」

「？アイス？……おい、これって……」

足元にアイスを入れてあったであろう、空の箱があった。
たしか、ミーシャが大事にしたアイスの箱じゃないか？
空だけど、そうだよな。

そこで、顔を上げるとベヒモスが、汗を滝の様に流しながら目を泳がせる。

「……急用を思い出しました」

「まあ待て」

逃げようとするベヒモスの首根っこを掴んで持ち上げる。

「離して下さい！もしも、こんな事がレヴィアタンにばれたら！」

「私がどうかしましたか？」

「あ……」

レヴィアタンが丁度来た。

レヴィアタンが最初に見たのは、ミーシャ。

「ミーシャ君！？なんで泣いてるんですか！」

「……ソレを見れば、お前ならわかるだろ？」

空の箱を指差しながら、教えてやる。

「……………ベヒモス……………あなたという方は……………なんと言つ事を！」
「ひっ!？」

レヴィアタンを中心に、ドス黒いオーラが渦巻く。

俺の本気の黒炎に近いものを感じる。

アレはヤバイ。

「そのアイスは、ミーシャ君が、苦労して作った、大事な物なのに……………」
「あ、その、だって、美味しそうだったし、だから、その、あの……………」

「苦労して、作り上げて、そして、出来た時のあの笑顔を……………」

笑顔？

俺もその時いたが、笑顔ではなかった気が……………あんま表情変わんな
いからわかんねえ。

「泣き顔にするなんて……………ユルサナイ」
「あ、い、ひ、ま、待って……………」

あゝここ、壊れるかも。

明らかに本気のレヴィアタン。

全力で守りに入ったベヒモス。

俺はとりあえず、ミーシャに被害が出ないように、ミーシャが造つ
たであろうハルバートを持って外に出る。

出たと同時に、工房兼溜まり場が吹き飛んだ。

そこには、本来の姿を現したレヴィアタンとベヒモスがいた。
あの人間達と違って、ベヒモスにはレヴィアタンの硬い鱗をどうにかできる攻撃が無い。

二体がぶつかる度に、周りの木々や土が吹き飛ぶ。

ここは流石としか言い様がないな。

最強と言われる生物と最高と言われる生物。

まあ、今現在の争ってる理由は、大した事無いんだがな。

「……う？」

「お、泣き止んだのかミーシャ？」

「……ん」

やっぱ、可愛いよな。

待て待て、俺は元男だぞ？

……まあ、悪魔に性別とかそんなに意味は無いからな……で、ダメ
だろ。

落ち着け、俺。

「……？」

やめろ！首を傾げるな！

胸の奥が、すごい締め付けられる。

よし、あの二体を見て落ち着くんだ。

……うん、もう大丈夫。

「とりあえずどっか別のところに、工房造りに行くか？」

「……ん」

ミーシャは、今までいた場所を眺めた後に頷く。
正しい判断だな。

まだ残っていた、涙を舐め取る。

「ん、しょっぱいな」

「……」

ミーシャの顔が赤くなる。

ホント可愛いな。

……俺、女で良かったかも。

・
・
・
・
・

・
・
・

・

何時の間にか、レヴィさんとベスちゃんが工房跡で大乱闘していた。

アストラルさんが、すごい優しい上にカッコイイ。

まるで、姉上の様な感じた。

姉上にやられたのに、似てる。

姉上達、元気かな？

……元気だろうね。

第二十九話（後書き）

うーん、他の奴らどうやって絡ませよう？

レヴィアタンは簡単なんだけど。

ミーシャ君関連で嫉妬でもさせればいいだろ。

あと、アストラル。

とりあえず、ミーシャ君を抱っこすればいいし。

うむ、他の奴ら、どうしよう。

第三十話（前書き）

投稿が、遅れた。

パソコンを親に取られたせいだ。

頑張った。

第三十話

新しい工房を皆で造った。

最近、魔王らしくなくなってきた七つの大罪。

そして、封神 技の盤古幡ばんこはんを創って、概念で遊んでみた。

スキル、【増殖】【重力操作】【視覚共有】【聴覚共有】【魔力操作】

下位の概念、【集中力上昇】【精神集中】

中位の概念、【視覚強化】【聴覚強化】

上位の概念、【不滅】【選定】

絶対概念、【甘い】

増殖は、この概念を付加した物を増やす。

ただし、本体とは色違い。

重力操作は、この概念の付いた物の一定範囲の重力を操る事が出来る。

視覚共有は、この概念の付いた物を通じて、見る事が出来る。

聴覚共有は、この概念の付いた物を通じて、聞く事が出来る。

魔力操作は、魔力がある限り、離れた所からでも操作できるようになる。

視覚強化は、視覚を活性化させて、見る能力を上昇させる事が出来る。

甘いは、そのままの意味で、甘くなるだけ。

反省も後悔もしていない。

地球儀サイズの黒い球。

誰に渡そうかと転がして遊んでたら、増えた。

一つが二つに、二つが四つに、四つが八つに……どんどん増えてく。

なんかヤバイ。

本体の黒い球を残して、増えた白い球を外に放り投げておいた。
投げてても投げてても増えるので、本体を持って工房の裏にある芝生に
避難。

早く誰かに押し付けないと……

そういえば……絶対概念の甘い、どんな感じだろう。

舐めちゃう？

恐る恐る、舌を伸ばす。

舌が球に触れると、味覚を刺激する甘い味が口一杯に広がる。

……うまい。

芝生に足を投げ出すように座って、球を両手で持って、ペロペロと
音を出しながら舐める。

うまうま。

球が小さくなる事も無いし、味が薄くなる事も無い。

これは良いアメだ。

これは、誰にも渡さない。

・
・
・

視点・レヴィアタン

ミーシャ君に会う為に、工房に来たら……白い球が大量に転がって
いた。

脳の処理速度が追いつかない。

少しの間、呆然としていた。

「……………ハッ!? ミーシャ君!？」

脳が再起動したら、ミーシャ君がいない事に気が付いた。
いったいどこに!?

部屋の隙間を重点的に探す。

ミーシャ君は、部屋の隙間などを好んでいて、暇になると隙間や隅
っこにいる。

だが、どこを探しても見つからない。

ふと耳に、小さな音が聞こえる。

ぴちゃぴちゃと艶かしい音が……ま、まさか!?

アストラルがミーシャ君を!?

なんて、うらやま……けしからん事を!

音の出ている場所は……ここの裏の様だ。

「今行くからね、ミーシャ君!」

急いで裏に向かう。

そこは………パラダイスだった。

く一部誇張表現く

黒い球を小さな舌で一生懸命舐めるミーシャ君。

たくさん舐めたのか、舌が球から離れる度に唾液の糸が伸びる。

その顔は、とても嬉しそうにとろけていた。

私は、その嬉しそうな顔を見て、微笑ましく思った。

・
・
・
・
・

視点・リリース

レヴィアタンが、飛び出すように工房から出て裏に回って行った。後を着いて行ってみると、ミーシャが無表情に黒い球を舐めていた。そして、それを見て、鼻息を荒くしながら鼻血を流しているレヴィアタンがいた。

……昔のお前はどこに逝った。

まあ、私もその光景を眺めていたけど。
うん、何かエロイ。

第三十話（後書き）

ミーシャ君が舐める、というのをやりたかった。
始めは、槍系の棒にしようと思っていた。
でも、それはダメじゃね？と思い至った。
なので、丸い球にしてみた。

第三十一話（前書き）

頑張って夏休みの宿題終わらせてきた！

でも、学校が始まると、毎日投稿が出来なくなる。

自分、続き書くの楽しみにしてんだけどな。

第三十一話

盤古幡ばんこはんもといアメを、リリースさんに持っていかれた。

俺の、アメ……

また創ればいいかな？

でも、同じの創るのはなあゝ

ダブリにはしたくない。

棍……いや、何かエロイ気がする。

ヌンチャク……創るのめんどくさい。

トンファー……使えるかな？

フレイル……痛そう。

……舐めるんだっけ？

だとすると……トンファーが一番かな？

……ええい！めんどくさい！

昔の偉人も言っていた！

考えるな！感じるんだ！

創るぞおおおお！！！！

顔は無表情。

心は暴走。

そんな、寝る前のミーシャでした。

・
・
・
・
・

視点・ベルゼブブ

また、ミーシャ君が何か作っている様だ。
私も、何か欲しいものだ。

出来れば破れたりしないスーツなど……いや、さすがにそれは無理か。

あの呪いの力など、私はいいと思うのだが……

「……ベルゼブブ」

「どうかしましたか、レヴィアタン？」

どうやら、考え事のし過ぎでぼんやりしていたようですね。

レヴィアタンは、両手に透明度の高い、魔力からしてミスリル製であるうトンファーを持っている。

ミーシャ君には、けして見せないであろう顔で、私の前に立っている。

笑顔なのだ……笑顔なのだが……目が笑っていない。

「これを試したいので、おとなしく死んでください？」

「……笑顔で言う事ですか」

そして、レヴィアタンが構える。

だが、何故蹴りの構えなのだ？

明らかに回し蹴りの為に右足を後ろに構えてる。

……ああ、聞いたことがある気がします。

武器の名前が入っているのに、武器を使わない攻撃。

昔、人間が使ってきたな……

「トンファー」

レヴィアタンは、勢いをつけて、一回転する。

「ああ、ミーシャ君には、頑丈なスーツを作って貰おう」
「キイイイイク!!!!」

私が覚えていたのは、そこまでだった。

・
・
・
・
・

レヴィたんが、ベルさんをしばいていた。
それはもう、血塗れの池が出来上がるほどに。
今回創ったトンファーは、ミスリル製です。

スキル、【トンファー武術（笑）】 【加速】 【直感】 【心眼】
下位の概念、 【攻撃速度上昇】 【筋力上昇】 【素早さ上昇】
上位の概念、 【魔力収集】 【不滅】 【選定】
絶対概念、 【辛い】

トンファー武術（笑）は、トンファーを使った（笑）武術的なものが使えるようになる。

心眼は、一時的な未来視を可能にする。

見れるのは、1、2秒先のみ。

魔力収集は、倒した相手の魔力を吸収して、武器としての格が上がるっていく。

辛い、そのままの意味で、辛くなるだけ。

……血塗れだけど、舐めてみる？

トコトコとレヴィさんの犯行現場に近付く。

「うふ、うふふ、あはははは、どうかしましたかミーシャ君？」

すごい変わり身の早さ。

血塗れのトンファーを見て笑っていたと思ったら、笑顔に戻って俺に話しかけてくる。

うん、今までで、一番魔王っぽい感じしてたよ。

「……ん」

「え？舐めたいんですか？分かりました、すぐに拭きますね」

血を拭いて、トンファーを差し出してくる。

どのくらい辛いかわからないので、ペロツと小さく舐める。

舌を刺激する辛さ。

少し舌がピリピリするが、これはこれでいい。

全体的に味わう為に、トンファーを舐め回す。

トンファーを持つ所から、離れれば離れるほど、辛くなる。

俺の舌が、もっと刺激を求めている。

しゃぶる様に、丹念に、丁寧な、念入りに、舐め回す。

舐めすぎたのか、涎でぴちゃぴちゃ音がしているが、まあ、気にしなくていいだろう。

刺激を求めて一心不乱に舌を動かす。

・
・
・
・

視点・サタン

ミーシャ君にどうしても伝えなくてはいけない事があるので、来てみたのだが……なんだこれは？

ベルゼブブかもしれない、グチャグチャの肉塊。

美しいトンファアを無表情に舐めているミーシャ君。

そのミーシャ君を見て、恍惚としながら鼻血を大量に流し、水溜りを作っているレヴィアタン。

……何があつた？

「……………」

関りたくないのに、何も言わずにその場を離れた。

ベルゼブブは、残念だがあのままだ。

私は、あの状態のレヴィアタンを敵にする気は無い。

まあ、ベルゼブブなら大丈夫だと信じよう。

……私は、なんでもそこに行ったんだ？

いかな、歳だろうか？

まあ、そのうち思い出すだろう。

「しかし、ミーシャ君……………エロ過ぎるぞ？」

その言葉は、誰にも聞かれる事無く、空気に溶けていった。

第三十一話（後書き）

いつそのこと、メインヒロインミィシャ君にしておおつか。

姉上じゃなくて。

だって、今いないし。

いいかな？

第三十二話（前書き）

最初の頃から比べると、自分でもよくなってるんじゃないかなあ
と思える。

気のせいじゃないと信じたい。

もっと上手になりたいZE！

第三十二話

その後、レヴィたんも舐めたのだが、舌が触れた瞬間絶叫してどこかに走っていった。

辛過ぎた様だ。

俺の舌、大丈夫か？

創るのも飽きてきたし……何しよ？

……やることが、無い。

そうだ！狩りをしよう！

・
・
・
・
・

視点・サタン

「最近、男の悪魔が何者かに瀕死に追いやられている……何か知っている事は無いか？」

私を除いた七つの大罪を、ミーシャ君の工房の二階に集めて、そう切り出した。

各々が、ある人物を示唆する。

「この頃、どこにいるのかわからないんです」

「出かけた時と帰って来た時で、服が違うんだよ」

「その通り魔的なを見た女の悪魔が、シヨタコンに目覚めるんだと」

「僅かに、血の匂いがしますね」

「よく、寝る頃になると出かけてる」

「紙に正の字を書いていました」

「新しい暇潰しを見つけたと言っていたな」

上から、レヴィアタン、アストラル、リリス、ベルゼブブ、ベヒモ
ス、マモン、ルシファーだ。

「……ミーシャ君だろうな」

「だが、やられているのは天界と手を組もうとしていた奴等だけの
筈だ」

そうなのだ……天界と手を組み、ミーシャ君を使い神を降臨した後
の魔界の所有権を欲しがっていたらしい。
本人が言っていた。

その後、自白した者は、皆蹲り命乞いを呟き続ける。

「……放置でいいだろうか？」

『異議無し』

珍しく、全員の息が揃った瞬間だった。

天界で思い出した。

ミーシャ君に言わなければいけない事を。

・
・
・
・
・

今日は、集団で固まってくれたから楽に狩れた。

何を狩れたのかは、聞かないで欲しい。

狩をしている時に、新しい武器と防具を思いついた。

むしろ、思い出せた部分もある。

この世界来て、約八年と六ヶ月。

まあ、それはさておき。

おじいちゃんが、大事な用があると言っていた。
なので、おじいちゃんの家という名の城に來た。
中庭にて、おじいちゃんを発見。

「……な、に？」

「……お前の事についてだ」

なんだ？

あゝもしかして、器とか何とかの事かな？

いろんな所で話してるの聞いているし。

「お前が神の器だというのは、知っているな？」

「……ん」

「まずは、お前が何故神の器と呼ばれるかだ……神の器は、文字通り神を宿す為の肉体の事だ……お前が選ばれた理由は、わからない……だが、名誉な事などではけしていない……なぜなら、神を宿した肉体の元の精神、つまり、人格よ自我を全て消され、肉体は完全に神の所有物となる」

えゝつまり、神が宿ると俺という存在が消されると言う事か？
最悪やん。

「だが、神降ろしが出来るのは、神の器が15歳を超えるまで……だから、私達魔界は君を連れて來たのだ……神は、真界に伝わるよくないものではない……ああ、神の器を殺しても数年後には、新たな命にその役目が下されるだけだ……唯一、その呪縛から解放される方法がある」

その心は！

「神の器が、神を殺す事だ」

よくあるファンタジーモノのお約束ですね。
神殺しても創ろうかな？

うまく出来なかったら、俺が死ぬだけだね。
ははは、笑えねえ。

「近い内に、天界が君を連れて行こうとするだろう……天界の者にとって、神とは、崇めるべき存在だからな」

天界って天使だろ？

……あの天使は、何か知ってるのかな？

俺に変な運命を背負わせやがって……許すまじ！

「……安心しろ、お前は、ミーシャ君は、私達が守ってみせる」
「……ん」

渋カッコイイと思ってしまった。
最近、影も毛も薄いくせに！

「……今何を考えた？」

頭をさすりながら、聞いてくる。
気にしてたんだ。

「……なん、で、も、ない」
「そうか」

うゝむ……対天使用の装備でも創るかな。
いつ来るかわかんないし、急いで完成させるかな！

「……がん、ばる」
「……頑張れ」

そうと決まれば、いざ工房へ！

・
・
・
・
・

視点・ベルゼブブ

サタン殿の屋敷がある方から、ミーシャ君が小走りに工房に向かっている。

そつだ、スーツの件を考えておいてもらおう。

「ミーシャ君！」

「……ん」

「実は、君に作って欲しい物があるんだ」

「……ん？」

小首を傾げつつも、続きを促す様に見つめてくる。

この仕草が、女性受けするんでしょうね。

「頑丈なスーツを作って欲しいのだよ」

「……わか、た」

「そつか！ありがとうミーシャ君！貰っただけだと悪いからね……この宝石の詰め合わせを上げよう」

「……あり、がと」

僅かだが、嬉しそうに見えなくもない。
無表情だから、感情が読み取りづらいな。
あの呪いの力を使える槍を使っていた少女。
あの少女も無表情であつたな……

「……ま、た」

「ん？ああ、すまないね……」

考え事をしていたせいで、ミーシャ君はどうしたらいいか迷っていたようだ。

また、小走りで工房に向かっていく。

「……ふう、命を賭けてでも、守らなければな」

そつ呟き、無数の蠅となって、消えた。

第三十二話（後書き）

次回は外伝！

異議は認めない！

これは、決定事項だ！

ベルゼブブのスーツ、封神 技の怠惰スーツを少しアレンジしてタ
キシードにする予定。

ここに書く事じゃないか？

大丈夫、土壇場で変えることもあるから。

外伝・その？（前書き）

読み返してみると、未回収の伏線が結構あった。

めんどくさいと思った。

魔界編の次は、天界編かな？

外伝・その？

視点・クリア

ミーシャ殿がいなくなってから、城の訓練場で集まるのが習慣になつてますね。

ああ、あの頭を撫でたいです。

……ハッ！？私は何を！？

「何故百面相をしておるんだ？」

「え？あ、姫様……なんでもないですよ？」

「そうか？……まあ、いいか」

危ない危ない。

そのうち、変なこと言つてしまいそうです。

ところで、リユーネ殿は……何故パジャマなのでしょう？

現在、訓練場に机と椅子を置いて、私、クリス、姫様、リユーネ殿の四人で、紅茶を飲んでいる。

誰もリユーネ殿の服装について触れないので、私も気にしないようにしているのですが……気になります。

しかも、可愛いパジャマですし。

ピンクの花柄パジャマです。

……よくここまで来れましたね。

「……クリア……リユーネが、変」

「む、お前もそう思っていたのか？」

クリスが、小声で聞いてくるのに、姫様も混ざる。

どうやら、二人ともおかしいと思つていたようです。

「多分、ミーシャ殿のことが気になるのでしょうか……連れて行かれますから、一ヶ月は経っていますから」

「……そう」

「そういえば、もうそんなに経ったか……」

何時になったら、ミーシャ殿を助けにいけるのでしょうか……表現が違ふ気がします……連れ帰れるのでしょうか。

リユーネ殿を見ると、上の空といった感じで紅茶の入ったカップを右手に持つて、空を見上げている。

私達の会話も聞こえていない様です。

そういえば……一週間ほど前から、レイ殿がどこかに逝っていますし……これからどうすればいいんでしょうか？

「……え」

「ん？どうした、リユーネ？」

リユーネ殿が驚いた様な声を上げ、それに姫様が反応する。

リユーネ殿は、何も言わずに上を指差す。

为什么呢？

全員で、上を見ると……羽の生えた人が四人、浮かんでいた。

「……天使？」

「……始めて見た」

「……何故ここに？」

私達は、ただ、呆然と天使？を眺めていた。

・・・

・

視点・レイ

「俺！降臨！」

……誰も見てないし！？

あの四大天使どもめ……羨ましい！

一応紹介しておくか。

「えゝあの金髪がミカエル、緑がガブリエル、琥珀色がラファエル、赤がウリエルだ」

「……それって」

「天界の四大天使じゃないのか！？」

「確か……七つの大罪と同等の有名度ですね」

「何故そんな方々が私達の所に？」

「……気付いてたのかよ！？最初に反応してくれよ！」

でも、最近それがいいと思ってしまっ。

アメリカに、鞭で叩かれたあたりからこの快感に目覚めたんだけど……何故だ？

「そろそろ、よろしいでしょうか？」

ラファエルが、そう言う。

浮かんでるのをやめて、地面に立っている。

「説明は任せた！」

全部押し付けて、椅子に座る。

何時の間にか横に、メイドのシルビアが立っていて、レモンティーを入れてあるカップを差し出してくる。

……完璧だな。

啜りながら、眺める。

「余り詳しくは言えませんが……私達がここに来たのは、あなた方に協力して貰う為です」

「協力、ですか？」

ラファエルの申し出に、リユーネ達は首を傾げる。

てか、なんでガブリエルが言わないんだよ。

言葉を伝える者だろ？

喋れよ。

バアカが！

「……あのミカエルさん？何故俺に剣を向けるのですか？」

「……消えてください」

ミカエルが、俺に剣を向けて斬りかかって来る。

殺される！？

「もう死んでますけど！？何か！？俺は今、風になる！」

・

・

・

視点・シルビア

旦那様が、ミカエルと言われていた天使の方に追い掛け回されてい

ます。

大方、馬鹿にする様な事でも考えたのでしょうか。

旦那様も、ミーシャ様と同じ様に顔に出やすいですから。

そんな御二方を無視しつつ、会話を続けています。

「あなた方が、七つの大罪の魔王達を相手に勝ったと……彼から聞きました」

七つの大罪……私だけが、まともに戦闘すら出来ませんでした。
今のお嬢様なら、ルシファーと互角に戦えるかもしれませんか……

「それで、そのお力をお貸しいただければと……」

「……つまり、魔界へ行けると言う事ですか？」

「はい、そうです」

やっと、ミーシャ様を取り戻しにゆけるのですね。

「何時行くのです？」

「三日後になります」

「……わかりました、よろしくお願いします」

「こちらこそ」

天界、それも四大天使との協力。

なにか、違和感を感じますね。

失礼と思いつつも、声を掛ける。

「少し、よろしいでしょうか？」

「はい？何でしょうか？」

「あなた方天使が、魔界に何の用があるのですか？」

「……お答えしかねます」

「そうですか……お時間を取らせました」
「いえ、大した事ではありません」

この方々は、信用してはいけない……そう、感じました。
私達にとつて、とても大事な事を隠している。

あの時の失敗を繰り返さない為にも、疑いを持たなくてはなりません。

ミーシャ様を守る為にも、絶対に……

・・・・・

・・・

・

視点・リリイ

ラファエルと、ある程度の事を話し合い、今日は解散となった。

ラファエルは、何かに耐えてる様な気がした。

ミカエルは、レイを追い掛け回していたので、言うてはなんだが、それほど頭が良いとは思えない。

ガブリエルとウリエルは、喋らなかったので何とも言えないが、ウリエルには注意が必要かもしれない。

あの眼は、危険だ。

まあ、父様と母様に魔界に行く許可を貰えなければ、何の意味も無いんだがな。

私、姫だし……無理かな？

外伝・その？（後書き）

今更だけど、エルフとか出してないや。

この状態で、出せるのか？

無理だと思っただけ。

いや、どうにかしてみせる！

…… エルフとかドワーフ用の武器、今のうちに考えておいてくれな
い？

ほら、読者の意見を尊重しているのだよ！

俺は、天使の武器を考えなくてはいけないのだから！

魔界より天界の方が、やばくなりそうだな。

第三十三話（前書き）

魔界編がそろそろ終わりそうですね。

天界編は、それほど長くないかも。

まあ、自分のヤル気と想像力しただいね。

第三十三話

スーツとパジャマを創ってみた。

スーツは、ヒヒイロカネとアダマンタイトがあつたので、魔法で繊維状にして一から創った赤みのかかった黒スーツ。

パジャマは、スーツの繊維とミスリルの繊維で創った猫パジャマ（何故か動く尻尾とフニフニの肉球グローブ付き）。

封神 技の怠惰スーツを参考にしてみた。

あと、手と腕が痛い。

スーツの概念。

スキル、【幻】【魔力自動生成】【自然修復】

下位の概念、【耐久上昇】【頑丈さ上昇】

中位の概念、【よく伸びる】【破け難い】【気配察知】

上位の概念、【呪い・食欲】

幻は、服や鎧等の防具専用の概念。

発動時は、指定した相手のみに幻を見せる。

自然修復は、魔力を使って、破けたり壊れたりした所を直す。

耐久上昇は、武器にひびが入りにくくなったり、服にしわが出来難くなる。

頑丈さ上昇は、壊れにくさが上がる。

よく伸びるは、よく伸びる。

破け難いは、斬られてもしない限り、破けたりしない。

呪い・食欲は、何かを食べたくなる。

食べてる間は、あらゆる攻撃に耐えることが出来る。

パジャマの概念。

スキル、【瞑想】【装飾化】【魔力自動生成】【重力操作】

下位の概念、【睡眠時間上昇】【睡眠速度上昇】【常時体力回復】
【常時魔力回復】【疲労回復】【体調回復】【状態異常瞬間回復】
中位の概念、【次元障壁】【魔術無効】【魔法無効】【魔力無効】
【気配遮断】【魔障壁】
上位の概念、【次元結界】【聖なる守護】【邪なる加護】【対魔障
壁】【対物障壁】【呪い・惰眠】
絶対概念、【存在維持】【最適化】【加護】【安眠】【絶対守護】
【和み】

睡眠時間上昇は、しっかりと寝る時間が調節できる。

睡眠速度上昇は、寝る早さが上がる。

疲労回復は、疲れがしっかりとれる。

体調回復は、風邪や病気に罹っても早めに回復する。

状態異常回復は、毒や麻痺や火傷が一瞬で治る。

呪い・惰眠は、どんな事をしてもし起きなくなる。

十二時間以上は、発動しない。

安眠は、快適な睡眠をとる事が出来る。

絶対守護は、呼吸を必要としなくなる。

あらゆる攻撃などを全て遮る。

絶対概念、守護破りが付いた物でのみどうにかできる。

和みは、見た者を和ませ、敵意などを削ぐ。

装飾時は、ドックタグ。

パジャマは、戦闘中に着ないでください。

着た瞬間に眠くなります。

と言う訳で、おやすみ、なさい……

・
・
・
・
・

視点・レヴィアタン

ミーシャ君が、何をしているか見に来たら、吐血した。

可愛らしい猫のパジャマを着て心地良さそうに丸まりながらユラユラと尻尾を動かすその姿はまさしく猫の様で時折聞こえる寝息はとても穏やかでいて本当に気持ち良さそうに寝ていて更には普段見せない表情である油断だらけな寝顔を見たら私はもう我慢できません！つまり何がいいかと言つと！

「……うにゅ」

「ありがとうございましたああああ！！！！」

私は前のめりに倒れて、鼻血で水溜りを作った。

・
・
・
・
・

視点・ベルゼブブ

そろそろスーツが出来る頃かと思い、工房に来てみたら……殺害現場に遭遇した。

血塗れのレヴィアタン、その近くで安らかな寝息を立てるミーシャ君。

ミーシャ君は、何故か猫パジャマを着ていた。

スーツが机の上に置いてあったので、それを取って外に出る。

「……うん、私は何も見なかった」

そう呟いて、私は歩き出した。

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

・

視点・マモン

ミーシャ君に紅茶の入れ方を習おうと、工房に来たら、興奮した。
足元にレヴィアタンが転がっていた気がするが、そんなものはどう
でもいい。

「……みゃあ」

もう、興奮のし過ぎで、ビチャビチャです！
この猛り！興奮！欲望！辛抱堪りません！！

「御持ち帰りiiiiiiii！！！！」

寝ているミーシャ君に飛び掛ったら、吹き飛ばされた。
一瞬で意識が飛んだ。

最後に思った事は、一緒に寝たい、それだけだった。

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

・

視点・アストラル

「何があつた？」

ミーシャの工房が騒がしかったので来てみたら……凄いい事になっていた。

レヴィアタンは、明らかに血の流しすぎ。

マモンは、逆さまになって気絶している。

ミーシャは、初めて見る猫のパジャマを着て、寝ていた。
なんだこれ？

とりあえず、ミーシャを抱っこして寝室に運ぶ。

抱っこする際に薄い障壁の様なものがあつたが、こちらに害意が無いのがわかったのか、それもすぐに消えた。

「あの二人は、どうするか……放置でいいか」

ミーシャの安らかな寝顔を見る。

「……やっぱ、可愛いよな」

そう呟いて、静かに寝室から出る。

サタンが言っていた天界の事。

ミーシャが天使達に連れて行かれれば、間違いなく、今俺が、俺達が知っているミーシャがいなくなる。

それだけは、絶対にさせるわけにはいかない。

まあ、今は……この二人をどうにかしないと。

第三十三話（後書き）

レヴィたんがぶっ壊れてる。

ベルゼブブがチキンになった。

マモンが変態になってる。

アストラルがかっこいい。

ミーシャ君は、知り合った者をダメにする。

……どうしてこうなった？

一つだけ言っておく！

皆、魔王だから！

第三十四話（前書き）

内容考えるの、大変すぎるよ。

まあ、大した内容じゃないんだけど。

毎日投稿とか無理だから。

第三十四話

今日の寝起きは……良い気分だ。

何時布団に入ったか覚えていないが、気分が良いので、気にしない。ベットから降りたら背伸びをして、床をゴロゴロ転がる。

尻尾が動くので、捕まえようと追いかける。

五分ほど追いかけて、ふと思いつく。

俺、何やってんだ？

気分が良くても寝起きだったので、思考が正常に作動してなかったようだ。

うむ、何か創ろうかな。

あ、ベルさんから貰った宝石に、なんか概念でも付けよ。

……終わった。

ちなみに、付加した概念は、完全再生と存在維持で、使い捨ての一品だ。

一から創ってるわけじゃないし……付加するだけだし……渡しに行くか。

・
・
・
・
・

視点・ルシファー

ミーシャにダイヤモンドのネックレスを貰った。

純潔、清浄……あと、意志力を信念を強める、と言う意味があったはず……

意志力と信念、か……偶然か、それとも、必然か……

「……フツ……考えても仕方が無いか」

天界が動き出したらしいからな……ミーシャは、必ず守ってみせる。
たとえ、私がどうなるうとも……

・
・
・
・
・

視点・アストラル

ミーシャがアクアマリンの腕輪をくれた。

宝石の意味を調べたら、聡明、沈着、勇敢だった。

何故これを俺に渡したのかはわからないが、大事にするつもりだ。

「さてと……金蛟剪きんこうせんの練習でもするかな」

火、風、雷、土、闇の五種類は、操れる様になったけど、水と氷が
まだ操れないんだよな。

金蛟剪きんこうせんを振って、七匹の竜を出す。

「ミーシャの為に……俺に従ってもらうぜ？」

・
・
・
・
・

視点・レヴィアタン

ミーシャ君との婚約指輪のアメジストを貰った。
これで、将来ミーシャ君は……わ、私の……

「ふふ、うふふ、あはははは、あっはっはっはっはっは……！」

……うん、アメジストの意味は、誠実、高貴、心の平和……わかつ
てるよ？

婚約指輪なんかじゃないんだよね？

……でも、いいんだ。

いつか、私だけのミーシャ君にしてみせるから。
ワタシダケノ……

・

・

・

視点・リリース

サファイアのピアスをミーシャに貰った。

誠実、賢明、慈愛の意味を持っている宝石だ。
私に似合うのか？

ピアスを付けて、鏡の前に立つ。

キラキラと光る、三日月型のピアスが揺れる。

「……うん……いいな」

そのまま、鏡を見続けた。

鏡には、嬉しそうな笑顔をした……私が映り続けた。

・
・
・

視点・ベヒモス

ミーシャにルビーの付いたティアラを渡された。
サタン様に教えられた宝石の意味は、情熱、勇氣、自由。

「……私はこんなのではない！……ま、まあ、捨てるのは勿体無いから使うけど」

……使いたいわけじゃないんだからね！
ベルゼブブ殴ってくる！

・
・
・

視点・ベルゼブブ

ベヒモスに殴られた。

……私、何かしましたかね？

あ、そういえば、ミーシャ君がエメラルドの付いたチェーンを置いて行きましたね。

まさか、あげた物が戻ってくるとは……

幸福、誠実、生き生きとした力を強くすると言っ意味を持った宝石でしたか？

「……つまり、どういう意味ですか？」

これからも、殴られたりするんでしょうか？

……役に立つ事を祈ります。

「あ、神には祈る気は無いですから」

……私、独り言多くなりましたかね？

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

・

視点・マモン

トパースの付いた掌サイズの犬のぬいぐるみを、ミーシャ君が投げて、逃げだした。

最近、ミーシャ君が冷たい……

まあ、このぬいぐるみ可愛いから良いけどねえ

トパースの意味は、友情、希望、潔白……そして、美と健康のお守り。

「私にピッタリね！」

全てにおいて、私以外には合わないかも。

……今、純白じゃなくて漆黒の間違いだろ？っていう電波が……私の気のせいね。

腰の辺りに付けて、小さいぬいぐるみを揺らす。

「……ふふ」

私が、一日中笑顔だったと知ったのは、次の日の出来事だった。

・
・
・

・

・

視点・サタン

ミーシャ君が、オパールの入った御守りをくれた。
希望、幸福、安楽……悲しみを消し、希望を生む。

「……私に、希望をくれるのか……ミーシャ君」

助ける為とはいえ、家族から無理矢理引き離れた……私に……

……守らなければならん、な。

たとえ、全てを失っても……絶対に……

・
・
・

・

・

渡した人によって、反応がいろいろ変わっていた。

うん……これからどうしよう？

する事も無いし……誰かと、ゆっくり話す？

二人きりで……レヴィさんは、貞操の危険性がある。

ん？そういうのをデートと言うのか？

……うん、してみたい。

よし！最初は誰を誘おうかな？

小走りで、工房に向かう。
明日の事を考えながら、平和な時を過ごす為に……

第三十四話（後書き）

アストラルさんとのデートは、ある程度考えてあるんだけど……他がな……

それと、このデート回が終わったら、天界ルートに入ります。

では、また次回。

第三十五話（前書き）

アストラルをかつこよくしようとしたら、主人公みたいになっちゃた。

うん、俺はかつこいいと思う。

第三十五話

アストラルさんと、二人で散歩中。
無限に続きそうな螺旋階段を下りてる。

「足、大丈夫か？」

「……ん」

「そうか……なあ、ミーシャは……帰りたいか？」

帰りたい………いい。

迷ってしまった。

メイドさんには、会いたいな。

「……わか、ない」

「俺は、このまま………いや、なんでもない」

そこで、壁に扉が現れる。

アストラルさんが、扉を開けて中に入る。

俺もその後ろに続き、扉の中に入る。

扉の中は、広く、果ての見えない……草原だった。

赤い満月が浮かび、その世界を赤く魅せる。

正直、綺麗だと思った。

「この場所な……もう、無いんだ……幻術で、こう見せてるだけなんだよ」

そう言う、アストラルさんの顔は、少し悲しそうで、少し泣きそう
で、少し辛そうだった。

この綺麗な世界は、ホントの意味で見ることが出来ないんだ……

アストラルさんにとって、この世界は……どんな思い出があるんだろう？

「この場所で、俺は復讐者アストラルに、なったんだ……まあ、大した理由じゃないんだけどな」

「……つら、いの？」

「ん？……そうだな、泣きたいくらい辛いな……でもま、今に満足してるさ……うん、俺は今の生活が好きだ」

先ほどまでの陰のある顔は無く、いつもの明るく、かつこよく、綺麗な笑顔があった。

その男っぽい笑顔を見ると、自然と笑顔になる。
まあ、恥ずかしいから下を向くけど。

「さてと、これからどうする？」

あゝ考えてなかった。

とりあえず、一緒にいればどうにかなると思ってたわ。

「そうだな……少し、手合わせしないか？」

てあわせ？

手でも合わせるの？

ああ、手を繋ぐってことか？

その言葉に頷く。

「……ん」

待てよ……てあわせ……手あわせ……手合わせ？

……組み手ってこと？

………返事しちゃったよ。

「うつし！ミーシャに貰った金蛟剪きんこうせんも全部使えるようになったからな……行くぞ！」

そう言つて、アストラルさんは金蛟剪きんこうせんを振り、七匹の竜を出す。
マジか……完全に操ってるよ。

左の腕輪を大剣に変えて、両手で持つ。

これなら、今の状態でも扱える事がわかった。

「舞い踊れ！」

その言葉と共に、七匹の竜が襲い掛かる。

炎と風の竜が右から、水と雷の竜が左から、土と氷の竜が正面から、闇の竜が上から迫ってくる。

焦らずに対処する……ゆっくりと、踊るように全てを逸らす。

「ハア！！」

アストラルさんが、両手を使った炎の大剣を振り下ろす。

竜に注意を払いながら、その炎の大剣を右手だけで持った大剣をぶつける。

アストラルさんは、足に炎を纏い、回し蹴りを仕掛けてくる。

バックステップで、その蹴りを避けるが、右、左、後ろ、上から竜が迫ってくる。

一瞬焦ってしまい、大剣を足元に叩きつけて、地面を操り竜を串刺しにする。

串刺しになった竜は、六匹。

「飲み込め！」

足元が盛り上がる。

景色が見えなくなる瞬間、運命の導きを使用する。

膨大な魔力が溢れ、その余波で地竜を砕く。

「ハッ！ カッコイイね！……ラスト一撃、喰らうとけや！」

アストラルさんの纏っていた炎が、黒に変色する。頭上に巨大な黒い炎球を創り出す。

その炎球の中に、七匹の竜が入っていく。
炎球を打ち消し、黒の濃い虹色の巨竜が現れる。
直撃すれば、塵一つ残らないであろう熱量が肌に当たる。

「ふふ、アストラルさんだってカッコイイですよ？」

持っていた大剣を地面に突き刺し、右の腕輪を大剣に変える。
大上段に大剣を構える。

「いっけえええええ！！！」

巨竜が、その巨大な口を開けて迫ってくる。

俺は、目の前に来た瞬間に、大剣を振り下ろした。

「切り裂け！！」

大剣が、アストラルさんの創った巨竜を真つ二つにした。それを確認しないで、アストラルさんの目の前に移動して、その首筋に刃を向ける。

「あゝやっぱ負けたか……降参だ」

「結構危なかったですよ？」

「そうか？付き合ってたくれて、ありがとう」

「いえ、俺も良い気分転換出来ましたから」

武器を戻して、地面に座る。

疲れた……やっぱ強いね。

「あ、そうだ」

何かを思い出したように、アストラルさんが手を叩く。

「？どうかし」

何を思い出したのか聞こうとしたが……柔らかい唇によって、口を塞がれてしまった。

いきなりの事で、一切の反応が出来なかった。

目の前に、アストラルさんの顔がある。

綺麗な瞳が、俺の事を見ている。

唇が離れ、アストラルさんが背を向ける。

「俺の名前、アストラルさんじゃなくて、アリマって呼べよ……俺の、前の名だ」

それだけ言うと、走る様にこの世界から出て行く。

俺は動かずに、ただ呆然と座り続ける。

指先で、ゆっくりと自分の唇をなぞる。

「……やっぱ、カッコイイよ」

そう呟き、この世界から出る扉に向かって、歩き出した。

第三十五話（後書き）

むしろヒロイン？

元男なんだけど……どうしてこうなった？

次は、ベルゼブブでいいか。

第三十六話（前書き）

ベルゼブブ回。

短い気がする。

やることが、無い。

第三十六話

えゝ今、ベルさんと工房二階で、紅茶を飲んでいる。
特にすることも無く、まったりのんびり過ごしている。

「平和だね」

「……ん」

ベルさんが言うには、最近レヴィさんとベスちゃんが襲い掛かって来るらしい。

今のベルさんの表情は、心底安心しきった顔だ。

「それで……これからどうしますか？」

どうしよう？

長い会話は無理。

聞く事、話す事……無い。

「……ん」

「?……ああ、このままのんびり過ごすんですね」

少し止まったけど、理解してくれた。

皆の解読スキルが上がっていく。

「そういえば、このスーツすごいですね……アレだけボロボロにされたのに、すぐに戻りましたよ?」

どんな使い方してんの?

まあ、役に立ってるなら良いけど。

紅茶を啜る。

うま〜

「そうだ、リリスがミーシャ君に何かを用意していましたよ?」

なんじゃろか?

リリスさんとは、あんまり話してない気がする。

次は、リリスさんと何かしようかな?

「……ミーシャ君は、誰が良いですか?」

「……なに、が?」

「つまりですね……」

ベルさんが、声を小さくして耳元で呟く。

「どの女性に興味があるのか、と言う事です」

これは……猥談と言うヤツか!

どの女性って……どの女性だろう?

「君の周りには、綺麗な女性が多くて……レヴィアタン、ベヒモス、アストラル、最近ではリリスも怪しい、さらに向こうの世界には、双子の騎士、姉、姫、それにメイドもいるらしいじゃないですか」

……意外と、いっぱいいるね。

むう……興味がある女性……アリマさんとメイドさんかな?

だがしかし!皆綺麗だから、良いと思うんだけど?

「……みんな、な」

「フム……では、しっかりと男を磨いた方が良いでしょう?女性の考

えは、男には一生分からないものですから……ね？」

昔なんかあったのかな？

でも、聞くのめんどくさいし……いいか。

「……ん」

「ハハ、ミーシャ君ならそのままでも平気そうですね」

「……ん？」

そうなのか？

分らないな。

「それですね……アストラルとは、どこまでいきましたか？」

アリマさんがどうした？

どこまで行った、と言われても……何所までだろう？

「……さあ？」

「……では、最近した事は？」

最近した事……はう。

フラッシュバックの様に、柔らかい唇の感触が思い出された。
顔が熱い。

「！？赤くなつたと言う事は……まさか！？」

「……キ、ス……され、た」

「……そうですか」

何やら残念そうな顔をする、ベルさん。

なんだ？何か拙かったのか？

「……そのままの君で、いてください」
「……ん？」

よく分からん。

まあ、どうでもいい事だろう。

「さて、そろそろ御暇させてもらいますかね」
「……ん」

結構話していたようで、小腹が空いた。
腹時計は、午後五時だ。

「……じゃ、ね？」

「うむ、今日から忙しくてね……それではな？」

そう言い、ベルさんは工房を出て行く。
少しして、下から悲鳴が聞こえた気がするが、何も聞かなかったことにした。

なんとなくだけど、こんどは痛覚を如何にか出来る様にしようかな？
……あくまで、なんとなくだよ？

第三十六話（後書き）

うむ、ベルゼブブは弄られキャラだね。

他に思いつかん。

次、リリースです。

第三十七話（前書き）

全然続きが思いつかん。

絡みが無かったから、これしか思いつかない。

微妙にシリアス？

第三十七話

何故かほんのり暗いダンス会場に立っている。

かなり広く、シャンデリアやらなんやらがいっぱいだ。

どうすれば良いんだ？

俺は、リリスさんに会いに來ただけなのに……てか、どこにいるんだ？

「ミーシャ？なんでここにいるんだ？」

噂をすればなんとやら。

なんと言えれば良いのだろうか？

とりあえず……目のやり場に困る。

リリスさんは、布が少なく胸元と背中と腕部分が開いたドレスを着ている。

肌が、綺麗です。

「どうした？顔赤いぞ？……なあ、一曲踊ってかないか？」

ダンス会場ゆえに？

ダンスとかした事無いんだけど……

リリスさんは、俺の手をとり、ダンス会場の真ん中に誘う。

その微笑は、少し……悲しそうだった。

「手を掴んで、腰に手を回す……それじゃあ、音楽流すな？」

リリスさんがそう言うと、ゆったりとしたクラシックが流れる。

その動きに合わせて、ゆっくりと動き出す。

今の状態だと、手足が小さいからかなり大変だ。

リリスさんは、俺に合わせるようにゆったりと動いてくれる。

「そうそう、なかなかうまいぞ」

そのまま数分踊り続けて、少しだけ動きに慣れてきた。
簡単な会話なら、できる余裕が持てた。

「……なあ、ミーシャは……どうして、私達といるんだ？」
「……？」

「つまり、さ……今のミーシャは、私達七つの大罪じゃどうにも出
来ない……だから、逃げるなり何なりすれば良いんじゃないのかっ
てこと」

おお、分かりやすい。

なんだろうな……直感が、帰るなと告げている。

それに、もうすぐ会える気がするし。

あ、でも……嫌な予感もする。

どう伝えたものか……

「私はさ、七つの大罪で一番弱いだろ？だから、なんて言えば良い
のかな……私は、ミーシャの事を守りきる自信が無いんだ」

ゆっくりと、感情を吐き出すように、呟く。

俺は、その姿をただ、眺めた。

「ほら、もうすぐ天界がミーシャを奪いに来るって、言われてるだ
ろ？だからさ、今からでも、逃げた方がいいと思うんだよ」

俺は、答えない。

ただ、リリスさんを眺める。

「折角、仲良くなったんだ……ミーシャには、死んで欲しくない」

お互いに、動きを止める。

リリスさんは、下を向き……俺は、リリスさんを見つめ続ける。

「私は、弱いから……こんな事、考えちゃうんだ」

今まで、リリスさんと二人きりで話した事が無かったから、知らなかった。

こんなに、弱っている事に……

「その、ごめんな……これ、やるよ」

そう言つて、リリスさんは片手で持てるような箱を机から取つて、差し出す。

その箱を受け取つて開けると、中には小さなオルゴールが入っていた。

「そのオルゴールの曲、私の好きな曲なんだ……ミーシャ、なんで、何も言ってくれないんだ？いつもは、返事してくれるだろう？」

俺は、その問いの返事を、答えを、自分の考えを、言わない。

喋りたくないわけじゃない。

ただ、何を言えば、この人を救えるのか。

それが……分からなかった。

だから、何も喋らない。

「……ミーシャ……私は、必要なのかな？……私は、役に立ってる

のかな？……私は、ミーシャの事を……守って、いいの、かな？」

声が震え、体も小刻みに揺れる。

リリスさんの足元に、雫が落ちている。

俺は、何を言えば良いのか、決まっていない。

それでも、泣いてる知り合いが目の前にいる。

それだけで、動く理由になる。

運命の導きを発動する。

そして、リリスさんの頭を撫でる。

「……ミー、シャ？」

リリスさんが、顔を上げる。

その顔は、涙に濡れて、いつもの雰囲気が無い。

考えも何も纏まっていない。

それでも、リリスさんは、自分の考えを言ってくれた。

その頬に手を当て、微笑みながら、リリスさんに呟く。

「必要とか、役に立つとか……他人に決めてもらうものじゃないよ

……でも、俺の答えが、どうしても聞きたいなら教えてあげます…

…リリスさんや皆に守ってもらうほどの価値が、俺にあるか分から

ない……それでも、俺は

」

・

・

・

視点・リリス

その言葉は、ミーシャの心であり生き方を示していた。
ミーシャの、気持ち。

ミーシャが、私から離れ、一礼する。

「お嬢さん、一曲……踊っていただけですか？」

「……クク、喜んで！」

ミーシャの考え、それを聞いただけでも、意外と吹っ切れるもんだな。

ゆったりと、揺れるように踊る。

ただ、笑顔で踊り続ける。

それが、今、私にできることだから。

第三十七話（後書き）

ミーシャ君が何を言ったか、ご想像にお任せします。

あれですよ、そのうち出します。

ミーシャ君を、偶には男っぽくしてみたかったただけなんです。

……この内容になった原因、それじゃない？

……まあ、次回に期待ということでは。

第三十八話（前書き）

ミーシャ君は、基本なんでも出来る万能君です。

本人が出来ないと思っているから、やらないだけです。

まあ、どうでもいいのでベスちゃんとの一日、見てください。

第三十八話

ベスちゃんと三時のおやつ中。

フルーツ、アイス、ケーキ、パフェ、プリン、ゼリー、クレープ、チョコなどなど。

お互いに、たいして太らない体質というか、体内のカロリーを簡単に消化できるというか。

つまり、どれだけ食べてもお腹をいっぱいにする事が無い。作っては食べ、作っては食べを繰り返す。

「これは何ゼリーのですか！」

「……も、も」

「甘くて、さわやかな味ですね！こっちは、何アイスですか！」

「……ラム、ネ」

「これは……飲み物が欲しいのです！」

飲み物？

メロンソーダ、オレンジジュース、麦茶、アップルティー、カルスなどを用意した。

「このメロンソーダは美味しいのです！」

「……ん」

「この白いのは……ネバツとするというか……ネチャネチャしてますね……それに、甘い？」

間違えて、原液で出しちゃったかもしれん。

カルスの原液を普通に飲めるとか……ベスちゃんスゲエ。歯磨き？魔法って便利なんですよ？

「む、もうそろそろご飯が食べたいのです!」

二時間近く食べ続けていたらしい。

俺とベスちゃんの胃袋、どうなってるんだろ?

「ステーキとさしみが食べたいのです!」

「……ん」

ステーキに使用した肉は、ベスちゃんの本来の姿の肉。

本人が提供してきたので、心置きなく使用する。

刺身は、マグロを捌く位しか出来ないんだよね。

……なんで、捌けるんだ?

ご飯とサラダを作って、完成!

「いただくのです!ハグハグ」

お互い、口いっぱいを含んでモグモグ口を動かす。

うむ、良い出来だ。

「うまいのです!これからも作るのです!」

良い笑顔で、ビシッと指を向けるベスちゃん。

シェフに任命された。

これは、あれかな?

守ってやるから、これからも美味しい物作れってこと?

「……ん」

加減無しで楽しめるから、俺としても歓迎だよ。

「とりあえず、もつと作るのです！」
「……ん」

次は、何を作ろうか。
激辛麻婆豆腐でいいか。

・
・
・
・
・

視点・ベルゼブブ

コーヒーでも飲もうと、ミーシャ君の家……間違えた、工房の二階
に行こうとしたら……目と鼻を刺激する強烈な辛味が襲う。

「こ、これはなんだ!？」

ミーシャ君の安否を確認しようにも、進む事が出来ない。
ミーシャ君は今日、ベヒモスと一緒にの筈……なら、大丈夫か。
何も無かった事にして、工房から離れる。

「しかし……一体何をしたんだ？」

あの刺激が何なのか、気になるベルゼブブだった。

・
・
・
・
・

視点・ベヒモス

目が、目が痛いのです！

涙が、止まらないのです！

何なのですかこれは！？

今私の目の前には、ブクブクと泡立つ真っ赤な麻婆豆腐が置かれている。

視界に入れるだけでも、その辛さが分かる。

鼻を腫らして、目から涙を流す。

「い、痛いのです……」

私の向かいに座るミーシャは、特に表情を変えずに黙々と食べている。

私も、何とかちよびつとずつ食べる。

美味しいのですが、辛すぎます！

「……から、い？」

「ど、どんな味覚をしてるんですか！？」

ミーシャの、その呟きを聞いた瞬間、もう辛い物は作らせてはいけないと理解した。

私の中で、ミーシャの味覚は、所々おかしいという結論になった。

「も、もう限界なのです……残りは、任せた、の……です……」

脳が、機能を停止した。

全ての思考回路、五感、意識がとんだ瞬間だった。

・・・

・
見た目ほど辛くないな……もうちょい、唐辛子とか入れた方が良かったかな？

まあ、うまいからいいか。

ベスちゃんが倒れたので、ベスちゃんの残りも食べる。

ベスちゃんは何故か涙を流しながら寝ていた。

悲しい夢でも見ているのだろうか？

ベットに寝かせて、後片付けをする。

久しぶりに、テンション上げた気がする。

最近皆暗いから。

残った麻婆豆腐どうしようか？

ベルさんにでも、あげるか。

ベルさんの住居に、持って行った。

次の日。

ベルさんが口と鼻を腫らして、涙を流しながら気絶している姿が見られた。

何があつたのだろうか？

第三十八話（後書き）

何故かベルさんが落ち担当。

ごめんよ、ベルさん。

後残ってるのは、レヴィアタン、マモン、ルシファー、サタンだね。

次、誰にしようか？

第三十九話（前書き）

微妙に空いた投稿。

家で、だれてました。

明日から、頑張る。

第三十九話

黒い猫が、アナタの前を横切った。

アナタはどうしますか？

……この本はなんだろう？

今日は、マモンさんの部屋にお邪魔している。

部屋といっても、ファンタジー世界にあるような図書館のような部屋だ。

上が見えない。

ちなみに、本棚にあった本を適当に取ったら、こんな内容だった。

何がしたいんだろうか？

あ、勇者の大冒険だって。

……なんで、魔王になった人がこんな物を？

えゝ王様に勇者として魔王を討伐するように頼まれた勇者。

旅の途中に出会った、戦士、魔法使い、僧侶の三人。

勇者以外全員女です。

美少女美人は当たり前。

ここ重要。

ここ書く意味あるの？

えっと、多くの戦いを経験して、ついに魔王と戦う事になった勇者一行。

そして、魔王は言う、「我と手を組まないか？さすれば世界の半分をくれてやろう」

どっかで、聞いたことがあるんだけど……

その誘惑を跳ね返して、魔王を倒した勇者一行。

魔王は最後に、こう言った、「我を倒しても、第二第三の我が世界を滅ぼすだろう！フハハハハハ！！」

やっぱり、どつかで聞いたことが……

世界を救った勇者一行は、その日を境に豪遊し続けました。
おしまい。

え？最後の何？

「ミーシャ君、どうかしましたか？……ああ、それですか」

マモンさん登場。

この本について何か知っているようだ。

「絵が可愛かったので、買ったんですが……二日後位に、発売禁止になったんですよ……なんでも最後のページから、大人向けの絵になっているとか」

たしかに、キャピキャピした漫画絵だったけど……大人向けの絵って、何？

……最後は、勇者が豪遊。

絵は可愛い。

つまり、この付録部分は……十八禁？

……さすが魔界。

「私はもう少し調べモノがあるので、ゆっくりしてくださいね？そうだ、本棚の上の所の本は見ちゃダメ！ですからね？」

そう言つて、マモンさんは部屋から出て行く。

上の方……何があるか、見ることに出来ないんですけど。
しょうがないので、ギリギリ届く範囲で本を探す。

これは……人体改造マニュアル（初級編）。

あっちのは……心身掌握術（上級編）。

こっちのは……好きな相手を自分好みにする方法。

……もつとまとものは………ん？一分読むだけでモテモテになる方法。

別にモテなくて良いよ。

んゝ相手の本性を曝け出す魔法の使い方。

……良いのが無い。

エッチをする為の魔道書。

可愛くなる為には……。

ハーレムを作るには。

儀式魔法の定理。

可愛い物を愛でる本。

肉球マニュアル。

男まさりな女と無表情シヨタの愛の物語。

幻術の使い方が分かる魔道書。

むゝ儀式魔法の定理と幻術の使い方が分かる魔道書ぐらいかな。

てか、いろいろおかしなラインナップだね。

まあ、いいか。

えゝ何々……儀式魔法は、魔方陣を描く事から始める。

その魔方陣にいろいろな言葉を刻み、したい儀式をする事が出来る。
例えば、勇者召喚の儀式なら……異世界、転移、勇者の三つの言葉
を入れておけば、基本的に失敗しない。

失敗例としては、自分達の世界から、というのが確認されている。

意外と分かりやすい。
こっちはなんだろう。

使い方はいたってシンプル、まず相手の目を見ることです。

相手の目を見て、一言。

「魅了^{チャーム}」と言って下さい。

そうすれば、簡単にエッチなことが……

あ、間違えた。

幻術はこっちか。

難しいのは時間が無いし、簡単な中でも覚えようかな？

幻術の使い方は、相手を知ることから。

相手がどんな事を望んでいるのか、それが分かれば簡単です。

相手の望む事を、脳内で繰り返し返せば相手は抵抗できずに、その幻術から逃れられないでしょう。

……どういうこと？

もっと分かりやすいのは……これかな？

脳を麻痺させれば良い。

わ〜簡単だ〜

これは無理だね。

お、これは……カッコイイ男と可愛い男が抱き合ってる。
裸で。

……ん？おかしくない？

だって、男同士だよ？

わからん。

見ない方が良さそうだ。

こ、これは！？

伝説の武器の造り方と名付け方、だと！？
見なくては！

「ミーシャ君！それはダメ！」

マモンさんに没収された！
み〜せて〜

「そんな顔してもダメです！これの通りに造っただけでも、世界を滅ぼせる様な物が出来てしまふんですから！」

なら、んなもん置いとくな。
それと、なんで持ってたんだよ。

「私が、魔界の本を管理しているからです」

なるほど。

だがしかし！

視覚出来ないであろう速さで、マモンさんの手から本を奪う。
一気読みして、マモンさんの手に戻す。

この間、約二秒。

内容は、ほとんど覚えた！

マモンさんは、一瞬本の重みが無くなったと感じただけだろう。

「ん？今……………とにかく！この本は見ちゃダメですからね！」

「……………ん」

「ミーシャ君は、物分りが良い子ですね〜」

フツ、計画通り。

ミーシャは、新しい武器を創れる様になった！
……あれ？今、テキスト出なかった？
気のせい？

「私の用事も終わりましたし、何をしましょうか？」

そう、マモンさんとすることなんて……無い。
ネタで創った盾でも渡す？

パイルバンカー付いてるんだぜ？

……この御方には、似合わないね。
腐らせとけばいいか。

そこら辺にあった、男まさりな女と無表情シヨタの愛の物語を、無
言で差し出す。

「……では、これを読みましょうか」
「……ん」

どんな話かは、それほど気にならなかった。

まあ、登場人物が誰か知りたいけど。

マモンさんが、何故か興奮しながら朗読するのをBGMに、猫パジ
ヤマを起動して……寝る。

明日、は……レヴィたん……食べ、ない……で。

意識が完全に落ちた瞬間だった。

第三十九話（後書き）

頭痛い。

これは……知恵熱！？

そんなわけ無いか。

次回は、レヴィたん。

お楽しみに？

ちなみに今回のマモンは、あれだ、性格を変にし過ぎたから。
とりあえず、将来の伏線にさせてもらった！

反省も後悔もしている！

さーよーなーらーまーたーねー……もういいですか？

第四十話（前書き）

やっと出来た！

かなり、変な内容になった気がする。

ちょっと真面目？にしてみた。

第四十話

「さあ、頭を洗いますよ」

誰かヘルプ！

風呂は嫌いです！

現在、大きな温泉にレヴィたんが入っている。

レヴィたんは、俺の要望で水着着用だ。

ピンクの花柄の生地が、とてもキュートなセパレートタイプの水着です。

頭にシャンプーをつけられ、泡立っているので目が開けられないので、大して意味が無かった様だ。

「逃げてても無駄ですよ！私が優しく、丁寧に、丹念に、隅から隅まで、綺麗にしてあげますからね」

隅っこに逃げて、イヤイヤと首を振る。

目が！泡が目沁みる！！

「ウフフフフ、さあ！ミーシャ君の全てを見せて下さい！！」

レヴィアタンは、妙に血走った目で、両手を広げながら近付いている。

ミーシャは、レヴィアタンがどこにいるか、気配で分かっているが見えているわけではない。

なので、どれだけ危険か分かっていない。

このままじゃ、一やられる（洗われる）！？
てか、早く泡をどうにかしたい！

「つ・か・ま・え・た」

正面から抱っこされる。

胸が当たってる〜

ふよんふよんする〜

レヴィアタンは、抱っこした状態で、お湯をかける。

ぎゃあああああ!?

お湯が!お湯があ!!

……意外と気持ち良い。

「それじゃあ、次は……か、体を……クツ!頑張るのよ、私!」

泡が流れたので、目を開けると……こう、少々ヤバ目の形相をしたレヴィたんが、目に入った。

見なかった事にして、目を閉じる。

終わるのを待とう。

「はあはあはあはあ!も、もう……限界!!」

ミーシャを押し倒す、レヴィアタン。

タオルで隠れた、下半身を凝視している。

いろいろな一線を越える瞬間である。

「か、体を洗う為、だから……このタオルは邪魔!」

そう言って、ミーシャのタオルを取り除いた瞬間、鼻血を出して気絶した。

「かわ、いい……」

……タオルの下にあるモノを見たレヴィたんが、呟いた言葉を聞いて……落ち込むミーシャ。

どうせ、どうせ小さいですよ……この体がいけないんだ！

……そうだ！大人になればいいんじゃないか！

考えたら即行動！

運命の導きを使って、体を大人に変える。

そこで、レヴィたんが運悪く起きてしまった。

「……」

先ほどまで、押し倒されていたので、かなり近い。
つまり、レヴィたんの目の前に晒している状態。

「……すごく、大きいです」

それだけ言うと、レヴィたんは完全に意識を失った。

免疫力が無いな……そんなんじゃ、彼氏とか出来た時大変だよ？

しかし、大きいのか……将来が楽しみだなあ

レヴィたんを脱衣所に寝かせて、ゆつくりと温泉に浸かる。

途中で、元に戻って溺れかけたが、何とか生き延びた。

この体、早く何とかしたいな……

・
・
・
・

視点・レヴィアタン

少し熱くなった顔を、冷ます様にぼんやりする。

「……ミーシャ君」

そう呟いたその顔は、まるで恋する乙女の様だった、
むしろ愛してる。

「……ミーシャ君と、付き合ったら、アレが、わ、私の……
は、入るかな？」

赤くなったり、嬉しそうになったり、心配そうになったり、百面相
をしている。

そんなレヴィアタンの前に、ミーシャが立つ。
タオルで隠して。

「……これ」

「ふえ？あ、うん、ありがとう、ミーシャ君」

ミーシャ君が、コーヒー牛乳を差し出してきたので、礼を言って受
け取る。

それを見届けたミーシャ君は、腰に手を当てて、自分の持っている
コーヒー牛乳を一気に飲む。
その姿に、グツとくる。

「……帰したくない」

そう、小さく呟いたが、ミーシャ君は、いつか、自分の家に帰って
しまう。

そう思うと、胸の辺りがズキツと痛む。
ずっと一緒にいたい。

どれだけ願っても、その願いは叶わない。
だから、今だけ……

ミーシャ君を、後ろから抱きしめる。
優しく、包み込む様に……

「私のこと、忘れないでね？」

「……ん」

「ふふ、ありがと」

いつもの様に、表情を変えずに返事をするミーシャ君。

その姿を見て、声を聴いて、体温を感じて、心地の良い気分になる。
ドキドキと、心音がどんどん早くなる。

いつもと違う、一度も感じた事の無い感情。
でも、その感情が……とてもいいらしい。

「大好きだよ、ミーシャ君」

「……………ん」

ミーシャ君は、少しだけ赤くなってしまった。
やっぱり、可愛い

第四十話（後書き）

次は、ルシファー？サタン？どっちだ？

めんどくさくなってきた。

天界編どうしたもんか。

ちゃっちやと終わらせて、続き考えないと……

第四十一話（前書き）

やっと出来た

ミーシャ君みたいにやる気が無くなっていく。

永眠したい。

死ぬまで絶対しないけど。

第四十一話

おじいちゃんに、お茶を飲もうと誘われた。
なんとなく、話が長くなりそうだから拒否したら、謎の黒服が現れ
連れてかれた。

角やら尻尾が見えたので、悪魔だろう。

始めて見た。

担がれながら、いつぞやの螺旋階段の最下層についた。

白い扉と黒い扉があり、黒い扉の奥に進む。

扉の入り口で、黒服が消える。

下に降ろしてから消えてので、落下する事は無かった。

どうして消えたんだろ？

「彼らは、悪魔の影であり魂だ……どこにでもいるが、どこにも存
在しない」

ほうほう。

つまり便利？

そんな思考を放棄して、周りを見渡す。

見える範囲が一面花畑で、ポツンと机と椅子があり、机の上にお茶
と紅茶とお茶菓子が置いてある。

「ミーシャ君は、お茶の方が好きだったな」

「……ん」

今更だけど、元日本人ですから。

淹れたてのお茶を啜る。

うまー苦味が少し抑えられていて、熱すぎて飲めないということも
無く、冷めているというわけでもない。

良い入れ方ではないか。
いやゝしかし、何話すんだろ？
長いのは勘弁。

「工房に置いてあるアレらは、そのままでもいいのか？」

工房に置いてあるアレら？

……ああ、暇潰しに創った何かの病気に罹りそうな武器とかの事だろう。

「……だい、じょぶ」

「そうか……まあ、ちゃんと管理しているならいいんだ」

管理……埃を被り始めてた気がする。

……錆びたりしないからいいか。

「ミーシャ君……もうすぐ天使が来るが、君は辛い思いをすることになる……私には、君を救う事はできない……君のしたいようにすればいい……どんな選択をしても、君を責める者はいない筈だ」

天使って……どんなん？

初めて会ったのが、アレなんだけど……皆あんな感じなのかな？
会いたくないわゝ

てか、辛い思いって何？

姉上とかでも襲い掛かってくるの？

……むしろそれ以外なくね？
どうしよう？

帰りたいなら、天使側に行けば良さそうだし……

こっちで皆と一緒にいたいなら、魔王側に留まればいい……
なんか、めんどくさいことになってるねゝ

姉上、どうしてるかな

……帰ったら、何されるんだろ？

「顔が、心なしが青くなってるが……大丈夫か？」

「……ん」

青くなってるらしい。

しかし、一緒にいた頃の姉上を考えると……何かを失う？

「今度は、顔が赤いが……本当に大丈夫か？」

「……ん」

赤くなってるのは、よく分かる。

顔が熱いもの。

むう……会いたくない様な、会いたい様な。
まあ、その時になったら考えればいいか。

「ふう……そうだ、これを渡しておこう」

丸くて小さい水晶玉を渡された。

何ぞこれ？

「大した物ではない……もしもの時、守ってくれるかもしれない物だ」

へへすごい？

どんな効果なのか見たい。

翳したり、転がしたりして、少し弄った後にポッケに仕舞う。
うん、御守りにしよう。

「……ありが、とう」

「どういたしまして、だ」

喋りつかれた。

肺が、痛い。

顎も、痛い。

机に顎を乗せてだれる。

ねむ

「もう疲れたのか？情けないぞ？」

喋るのと体を動かすのは、全然違うんだよ？
疲れ具合が、全然違うんだよ……

「安心しろ、今日はもう終わりだ……私は、仕事があつてな」

そう言つて、立ち上がるおじいちゃん。
だれながら、手を振る。

「しっかり考えろ、まだ若いのだからな」

一人になった。

寂しい。

……帰ればいいか。

……動くの、だるい。

・・・・・

・・・

・

視点・サタン

これで、いい……

もしも、ミーシャが、私達を選んでも……
きつと、あの子は、怒るだろう。

だが、これが……あの子の為なのだから。

七つの大罪全員が賛成している事……まあ、レヴィアタンは渋って
いたが……

後は、私達に出来る事をするだけ、か……

天使如きに、ミーシャの幸せを、未来を、命を、奪わせるわけには
……いかんだ。

救う事は出来なくとも……進む道を作る事位は……してみせる。

「……君の未来が、幸福である事を……願うよ」

第四十一話（後書き）

ラストは、ルシファー！

できるの……何日後になるかな？

適当は、なんかやだし……まあ、真面目に書いても大したもんじやないけど。

頑張る。

また次回！

……前書きと後書きって、誰も望んでない？
そんなこと無いよね？ね？

第四十二話（前書き）

無理矢理展開万歳！

戦闘編入りました！

やった！

第四十二話

ルシファーさんのホントの姿……どんな感じ？

やっぱり、四対八枚の黒い羽？

それ以外思いつかね〜

てか、ホントの姿とかあるの？

アリマさん、レヴィたん、ベスちゃんの三人は知ってるけど……

ベルさんは……どうせ蠅でしょ？

マモンさんは、そういうの無いらしい。

リリアさんは、一定条件が揃えば真の姿になれるらしい。

おじいちゃんのは……わからないな。

「どうかしたか？」

「……なんで、も、ない」

そつえば、最近喉の調子がいいんだよ！

……いいんだよ？

現在の場所は、螺旋階段の入り口の前。

つまり、森。

「ミーシャ、最近、何か変わった事等無いか？」

変わった事？

しいて言うなら、ルシファーさんの真の姿が見たい。

いや、むしろ俺が真の姿になるべきか？

大人版が真の姿でいいか。

そう言えば、七つの大罪だなんだと言ってるけど、八人いるよね。
今更だけど。

「……ない」

「そうか……苦しくなったり、体が痛くなったりしていないか？」

「……うん」

「……なら、いいんだ」

心配性だな

父親になつたら、娘はやらん！とか言いそう。

「……誰かと付き合うつもりは無いからな？」

心を読まれた。

久しぶりに読まれたぜ。

「……そうだ、アストラルがお前と話したい事があると言っていたぞ？」

アリマさんが？

なんじゃろ？

明日にでも行くかな。

「ん？……もうすぐか……少し、早いな……」

何が早いんだろ？

ハッ！？

まさか、天使！？

……まあ、何とかなるでしょ。

あゝ姉上とか来るのかな？

いやだなあゝまだ帰りたくないです！

……貞操的に？

いや、こっちでもあっちでも同じか。

「ミーシャ……君は、何もするな……君に、罪は無いのだ」
「……ん」

納得は出来ないけど、そうした方がいいのはよくわかる。

まあ、もしもの時は、全力でやるけどね。

唐突だけど、真名解放系の装備、あんまり創ってないなあ、
今度創ろっかな。

「私はそろそろ行く……ミーシャ、君はもう、帰りなさい」
「……ん」

じゃあ、折角だから作成に取り掛かろうかなあ。

……俺には、どうしようもないね。

ルシファーさんも、俺が気付いてる事に気付いていたのだろう。
だから、俺は、何も言わずに、ルシファーさんから離れる。
それが、俺に出来る事だから。

・
・
・
・
・

視点・ルシファー

ミーシャが、遠ざかって行く。
これで、いい。

ミーシャに、辛い思いなどさせない。

「出て来い」

「……御久し振りですね」

木の影から出て来たのは、いつかのメイドだった。

ただ違うのは、あの時に無かった物を持っているという点だ。

聖剣と言うに相応しい剣を右手に、その鞘を腰に、あの時使っていた巨大な射撃武器を左手に……そして、右腕に腕輪。

それら全ては、ミーシャが作った物であろう。

だからこそ、油断はしない。

ただ、殺さないように倒すのは、無理だろうな。

「あの時の借り、御返しに参りました」

「……いいだろう、来い」

妖刀・神切りを召喚して、構える。

一度戦ったのだ、何かしらの策を練っているはず……それでも、私は負ける訳にはいかない。

全力を持って、倒すのみ。

「行きます……」

左手の射撃武器を構え、メイドが殺気を放つ。

やはり、あの時とは違うのだな……だが、それは私も同じだ。風が吹き、一枚の枯れ葉が舞う。

その枯れ葉が落ちた瞬間、お互いに……動き出した。

第四十二話（後書き）

さて、つんだ。

考えてるんだよ？

でもね、あれだよ、戦闘書くの苦手なの。

とりあえずメツチャ強ければいいや的な感じなの。

でも、頑張るぜ。

未だに人気らしいから。

命大事に、ならぬ、読者大事に。

第四十三話（前書き）

想像力が足りない。

どうしようもないね。

まあ、今後に期待。

第四十三話

視点・ルシファー

連射性の高い魔術で攻撃するが、全て避けられる。

あの時と、随分戦い方が違う。

近距離と中距離のギリギリを維持しながら戦っているようだ。
何をしてくるつもりだ？

「……貴方とは一度戦いましたので、勝たせて貰います」

それだけ宣言すると、一本のナイフを投げてくる。

無駄だと分かっている筈だが……何故だ？

停止結界を発動させる。

これで、投げられたナイフは止まる……筈だった。

「裂ける」

その言葉と共に、次元が歪み、ナイフが消える。

「これは!？」

ミーシャの固有能力の筈の次元干渉。

それをなしたという事は、間違いなくミーシャの作った物の一つだろう。

あのメイドが、こちらに近付いてくる。

魔術を放とうとするが、魔力が操作できない。

さらに、何かに縛られている様に、身動きが取れない。

「……何をした？」

「……あの時、何故私の攻撃が貴方に届かなかったのか、それを考えた結果です……貴方は、私の攻撃を止めた後、三秒以上同じ場所にいなかったのを思い出したのです……その障壁か結界は万能の様に見えて、その実、欠点があることに気が付きました……なので、見えないほど小さな糸を一本ずつ貴方に巻き付けさせて頂きました……予想通り三秒止まりましたが、ね？」

このメイドは、あの時の戦いだけで、私の停止結界を見破ったと言う事が……

「なるほど……クク、これほどの技量とは……いや、違うか……ミーシャの為、か？」

「……答える義理はありませんが、そうですね……私は、ミーシャ様に仕えるメイドです……ミーシャ様の為に、私は、此処まで来しました」

メイドが、私の目の前で止まり、射撃武器で攻撃してくる。停止結界が止めるが、今、私は動けない。引き千切ろうとしているが、魔力が使えないせいで力を強化できない。

「さようならです……魔王ルシファア」

メイドが踵を返して、離れていく。心臓に吸い込まれるように、鉄の塊が動き出す。体を貫かれたが……声をかける。

「まあ、待て……」

「ッ！？なんで！？」

さすがに予想外だった様だ。

「前提が違うんだ……私を人間と一緒にするな」

体に穴が開いたが、すぐに塞がる。

まあ、不死殺しでもない限りは、私を殺す事など出来ない。

「……アレで終わりだと思ったのですが……残念です」

メイドがそう言うと、左右と後ろから近付いてくる気配。

「……そうくるか」

多分、私は苦虫を噛み潰した様な顔だろう。

左右には、槍と大鎌を持った双子であろう騎士。

背後には、双剣構えたミーシャの姉。

「騎士として、四対一はしたくありませんでした」

「……貴方は、危険」

「ミーを連れ戻す為にも、ここで消えてもらおう」

「では、本当の戦いを、始めましょうか？」

それぞれが、武器を構える。

ミーシャの為にも、殺さない様に勝つ。

さすがに、キツイかもしれんな。

ミーシャの姉が持っている双剣は、間違いなく聖剣と魔剣だろう。

それも、ミーシャの作った剣だろう。

たった一人の人間が作った武器を、ここまで恐れなければいけない
とはな……

メイドを倒した後、そのままこちらに帰ってきたから、この三人がどれほどの強さか、持っている武器がどんな力を秘めているか、聞いただけだ。

正直、無視したい。

「フウ……来い」

ミーシャ、残念だが……殺す気でやらせてもらうぞ？

殺気を放ち、正眼に刀を構える。

今、本気の死合いが始まった。

・

・

・

工房に着いたが、何かが足りない。

少し見渡すと、面白半分で創った武器防具が無くなっていた。

そして背後によく知る気配。

なんか前にもこんな事あった様な……

そして、意識が無くなった。

第四十三話（後書き）

ほら、ミーシャ君がいると天界だけが敵になるから。

あと、ミーシャ君から背後を取れるのは、ミーシャ君が信頼してる者だけ。

分かるでしょ？

まあ、行き当たりバッタリだけど。

続きを考えなくては！

第四十四話（前書き）

とりあえず、ルシファーとの戦いを終わらせようと思っている。

見て行ってね。

第四十四話

視点・リユーネ

メイドさんが言っていた、七つの大罪最強の魔王ルシファー！。

メイドさんだけで倒せると思ったが、予想以上に強い。

リリイは、メイドさんに武器を預けて留守番している。

王族が魔界に乗り込むのは、無理があつたからな。

しかし、どうやって倒すか……多分、私かクリスの武器なら倒せるだろう。

こちらに奥の手があるように、あちらにも隠し玉があるようだが。動くに動けない、そんな状態になっている。

「どうした？来ないのか？」

「待てない男は、嫌われるぞ？」

「フッ」

今の、イラッときた。

全力で地面を蹴って、ルシファーの前に移動し、聖剣を持った右手を振り上げる。

先ほどまで使っていた結界を使っていないのか、こちらに振り返りバックステップで避けてくる。

クリスとクリアが、挟撃する。

魔力により、空中に足場を形成して、二人の攻撃をかわす。メイドさんの銃による、拡散する攻撃を結界で止めてくる。

私は、今の勢いのまま飛び上がり、回りながら斬りかかる。ルシファーは、その一撃を刀で受け止める。

一旦距離をとり、同じ様に魔力で足場を作る。

「その程度ではな……本気を出したらどうだ？」

「メイドさんに負けてたくせによく言う」

「……負け惜しみ」

「そちらこそ本気を出したらどうです？」

「……皆さん」

メイドさん、なんだその目は？

言いたい事があるならハッキリ言ってくれ。

だが、ルシファーが動き始めたせいで、先ほどと同じ手は使えない。なら、一気に勝負を決めるべきか？

三人にアイコンタクトを送る。

『……………？』

三人が首を傾げる。

やはり、ミーのようにはいかないか。

「時間が無い、一気に決めるぞ！」

その言葉で理解したのか、クリスは槍に、クリアは大鎌に、メイドさんは鞘に魔力を込める。

私も、魔剣に魔力を込める。

ルシファーは、なにをしているのか気になるようだが、止めようとはしない。

何故止めようとしないのか気になるが、絶好のチャンスだ。

『アクセル
加速！』
『ハイアクセル
超加速！』

三人を赤いオーラが、私を青いオーラが包み込む。

時間を掛けてると、ミーがまた何処かに行ってしまいそうだ。

・
・
・

視点・ルシファー

赤と青のオーラを纏った四人が動いた。

動いた瞬間は見えたが、どう動いたのか一切見えなかった。

次の瞬間には、自身の左腕が斬り飛ばされ、右足が凍り付いていた。

「こ、これは!？」

スピードが上がった!?

ミーシャ、厄介な能力を付けてくれたな!

背後からの殺気に反応して、何とか体を横に倒す。

赤い線が見えたが、それ以外は分からない。

そして、目の前にメイドが現れる。

何時の間にかその手には、杖が握られていた。

魔術を使われる前に動きを封じようと、右手に持った刀を一閃する。

しかし、隠し持っていたのか、水色の扇を持っていた。

その扇に刀が触れた瞬間、全ての力を受け流された。

そのまま扇を回転させると、竜が襲い掛かってくる。

「ぐう……ガハア!？」

地面に叩き付けられる。

メイドは、杖の先端をこちらに向けながら、唱える。

「崩壊の火炎！」

黒い炎が迫る。

停止結界を使おうと、魔力を込めた瞬間、体に衝撃が来る。

メイドが最初に持っていた、聖剣。

それが、私を地面に縫い付ける様に、突き刺さっていた。

咄嗟に、剣ごと体を起して避けようとするが、剣が重過ぎる。

不味い！そう思ったが、ルシファーは炎に飲み込まれた。

・
・
・

・

・

視点・ラファエル

神の器。

神に選ばれた者。

世界を超えた力を持つ者。

今、私の目の前で眠るこの少年が、ソレだ。

魔力を狂わせる結界を張り、ガブリエルが操るベヒモスに気絶させた。

どんな力が分からない、だから、確実な方法で捕らえた。

あの人間達すら利用して……

「迷っていますか？」

「……そう、ですね……これが、天使のことなのか……分からなくなります」

ここにいるのは、ベヒモス、神の器の少年、ガブリエル、私の四人だけ。

ベヒモスは、封じの結界の中に入れて、少年を抱きかかえる。

「これで、いいんでしょうか……ホントに、これで……」

「神の降臨、それを成す為にも……必要な事なのです」

そう、どれほど納得がいかなくとも、我らが主の御降臨を成さなければならぬ。

それが、天使に与えられた、役目であるのだから。

考えるのをやめて、翼を広げる。

無理矢理開いた転移門に向かおうとするが……

「ミーシャに、何をしている？」

目の前には、見慣れぬ女性がいた。

赤い髪、オレンジの瞳、雰囲気から七つの大罪である事は分かるが、このような魔王は知らない。

しかし、この少年、ミーシャを連れて行くところとして見られるところを見られたからには、消すしかない。

女性は、周りを見渡し、ベヒモスを見る。

「……なるほど、な……貴様等天使も堕ちたもんだ」

その言葉に、心臓を締め付けられる錯覚。

辛い、苦しい、悲しい、すぐにやめたい……しかし、私が天使である限り、絶対にやめられない。

だからこそ……

「貴女には、関係ありません……ガブリエル、頼みます」

「分かりました」

「な！？待て！！」

静止の声を無視して、飛び上がる。
すぐに見えなくなる。

後は、この子を天界に連れて行くだけ。
それで、終わりなのだ。

ミーシャ君の頬を撫でる。

「…………ごめんね」

第四十四話（後書き）

変な所でウケ狙ってない？

まあ、大丈夫か。

しかし、加速とかの描写が難しい。

第四十五話（前書き）

今期のアニメ、最高です!!

……投稿遅れましたあゝ

第四十五話

視点・アリマ

ミーシャが連れて行かれた。

それも、天使に……ヤバイな……

「地獄の魔神アストラルですか……残念ですが、私の相手をして頂きます」

「ハッ！消し炭にしてやるよ！！」

何時もの様に炎を纏って、構える。

ミーシャから貰ったアレは、まだ使えない。

コイツがどんな力を持っているか、わからないからだ。

四大天使が言葉を伝える者ガブリエル。

目を閉じていて、特に構えることもなく、ただそこに立っているだけ。

何かしてくる気配は無い。

時間稼ぎのつもりか？

「私の目は、少し特殊なんです……器の少年も私と同じ、いえ、私以上に特殊な瞳を持っていました」

「……それが、どうした？」

「大した事ではありません……ただ、貴女が私に勝つのは、絶対に不可能です」

絶対と来たか。

俺は、絶対負けれないと思ってた矢先に負けたんだ。
んな言葉、信じられるかよ！

「なら、その言葉……証明して見せる!!」

纏った炎を鞭の様に放つ。

地面を燃やしながら、ガブリエルに迫る。

ガブリエルは、何もしない。

ただ、目を開いた。

・

・

・

視点・クリア

リユーネ殿が放った炎に包まれ、ルシファーが見えなくなる。
だが、ルシファーが消滅した気配は無い。
だからこそ、やるしかない。

「リユーネ殿、先に行つて下さい」

「だが……」

「お嬢様、ミーシャ様をお願いします」

「早く帰りたい」

クリス……

「……分かった、先に行く……これだけは、言うておく……死ぬと、
ミーが悲しむ」

確かに、あの子は優しいですから。

リユーネ殿が、ミーシャ殿が向かった方へ走る。

「クリス様、クリア様……油断なさらぬ様に」

「それは侮辱だぞ、シルビア殿」

「一応騎士」

「騎士が何故いるかは、聞きません……来ますよ」

シルビア殿が言い終わる瞬間、炎が消え去り、漆黒の五対十枚の翼を生やした男が立っていた。

先ほどのまでの雰囲気は無く、圧倒的な存在感を纏っている。

「正直、侮っていた……あの時程度の力なら、この姿を晒す必要も無いと思っていた……ミーシャの為に、殺さずに無力化しようとしていたが……全力を持って、殺す」

まるで、重力が増したかのような殺気。
冷や汗が止まらない。

今まで、魔王級の悪魔とは何度か戦ったが、比べる事すら出来ない。
最強と言われる魔王の殺気。

「……前より、強くなってますね」

「クク、安心しろ……全力を出すと言っただろ？」

ルシファアは、自身の魔力を体に廻らせる。

体が黒くなり、擦れた角が額に生える。

翼は大きくなり、魔力も増してゆく。

「さあ、殺し合いを始めよう」

・・・

視点・リリス

「べ、ベルゼブブ……」

私は、傷だらけになりながらも、何とか体を起す。

目の前には、ベルゼブブの首を掴んで持ち上げている天使がいた。金髪銀眼の無表情な男。

私とベルゼブブでは、勝てない。

強すぎるのだ。

ミーシャに貰った武器は、自分の寢床に置いてある。

あとは、消されるのを待つしかない。

「……ミーシャ、ごめんね」

ベルゼブブは、すでに意識が無いのか何も言わない。

ミカエルは、こちらを一度見て、ベルゼブブの首を握り潰した。その瞬間、ベルゼブブの体が砂の様に消える。

『リリス、諦めるのが早すぎると思いますね？』

頭に直接響くような、そんな声が聞こえる。

何故いきなりこの様な会話方法を使うのか、一瞬思考が停止する。

「え？……まさか！？やめなさい！その姿を保つには、貴方の体はもう！」

『これ以外に、手段が無いのだ……さあ、ミカエルよ！我が力を見せようぞ！……』

ミカエルの前に現れたのは、ベルゼブブだった。
何時もと違うのは、自身の倍以上の大きさの蛾の羽を生やし、二本の棍を持っていた。

「……来い」

『言われずとも!!』

私は、ただ見ることしか出来ない？

そんなの、ありえない！

痛む体を無理矢理起して、走り出す。

ベルゼブブ、すぐに戻るから！

・
・
・
・
・

視点・サタン

「随分と大胆な行動だな」

「貴方ほどじゃない」

今、私の目の前には、ウリエルがいる。

テーブルを挟んで、互いに紅茶を飲んでいた。

私の後ろには、マモン、レヴィアタンが控えている。

何時もならレヴィアタンではなく、ルシファーがいるのだが、ミーシャ君と二人になりたいと言っていたので、こうなってしまった。
いや、逆に良かったのかもしれない。

ミーシャ君にルシファーが付いている、と言う事なのだから。
だが、胸騒ぎがする。

「動かないでいただきたい……貴方の本気は、危険だね？」

ミーシャ君の無事を確かめたいが、ウリエルのせいで動く事ができない。

それは、後ろにいる二人にも言える事だ。

正直、レヴィアタンが大人しくしているのに驚いた。

しかし、どうしたものか……

「ゆっくりと話し合おうじゃないですか、サタン様？」

「……良いだろう」

妙な胸騒ぎを押し殺し、ウリエルの薄笑いした顔を睨んだ。

第四十五話（後書き）

特に考えて無い。

だから続きもどうなるか分からない。

てか、よく続いてるよね？

次回では、ミーシャ君の盗まれた武器が出るかもしれないと思って
みたりする可能性も無きにしも非ずと考えられるのかもしれない気
がするようないような感じがたまらん。

何やってんだろ？

まあ、頑張ります。

第四十六話（前書き）

何とも言えない出来になった。

しかし、新しい武器が出てない。

読み返したら、「あれ？出て無くな？」と思った。

書き終わった後だから、書き直すのもあれなんで、そのまま投稿。

最近、続きを考えるのが難しい。

最終話あたりならもう思いついてるのに。

第四十六話

視点・メイドさん

「があ!?!」

「ぐう!?!」

「はあああ!?!」

クリス様とクリア様が吹き飛ばされるが、それを無視して私は聖剣を両手に持って斬りかかる。

ルシファアは、その一撃を片刃の剣で受け流す。

私は体勢が崩れる前に剣を手放し、バックステップでルシファアから離れる。

「手を抜いていた、と言う訳ではないようですね……」

「当たり前だ……まあ、甘く見ていたのは確かだ」

メイド服を着た美女と、魔王と呼ぶに相応しい姿をした美青年。

二人は、熱く、激しく、挑発的に見つめ合う。

互いを殺す為に……その存在を認めない為に。

「シルビア殿……目的が変わってる気がするぞ」

「……痛い」

吹き飛ばされた二人が、ゆっくりと戻ってくる。

結局は倒さなければ生き残れないのですから、目的事態はそれほど変わっていないと思います。

「御二方、行けますか?」

「誰に言っているのですかな？」

「失礼」

二人が自身の武器を構える。

しかし、ルシファーは一切構えない。

「余裕のつもりですか？」

「いや、そうではない……フツただ、そちらの領域で戦うのが危険だと判断したまでだ」

そう言うと、翼を動かし空へと舞い上がる。

そう来ますか。

「人間との空中戦は初めてでな……楽しませて貰おう!!」

・
・
・
・
・

視点・マモン

今、目の前にいるのは、我ら魔界と対の世界である天界のトップと言える存在。

何故ここにいるかは分からないが、下手に動けば戦闘になるだろう。だが、目的は分かっている。

ミーシャ君だ。

この天使は、世界を消してでも神を呼び出すだろう。それこそ、あらゆる存在を利用して。

「貴様の目的はなんだ、ウリエル」

「目的？決まっているではないですか、神の降臨ですよ！」

妙に芝居のかかった動作で宣言するウリエル。

神の降臨、それが何を意味するのか、私には分からない。

サタン様は知っているのだろうか？

「……神、か」

「貴方なら分かるでしょう？神は我らに救いを齎す！神は我らに希望を持たせて下さる！神は我らに安らぎを与えてくれる！神こそが、我らを導く絶対的存在であるのです！！」

「……狂ってる」

そう呟くと、ウリエルがこちらを向く。

見る者を全て見下している、そんな目で見てくる。

「狂っている？違いますよ……狂っているのは、貴方達だ……神を信じず、ただひたすら足掻く……神さえ現れれば、全てがうまくいくのです！それが分からない貴方達は、生きる価値すらない」

ただ見られているだけの筈なのに、首筋に刃を当てられている様な錯覚。

心臓が早鐘を打ち、呼吸が出来なくなり、冷や汗が溢れ出る。

「あ……」

「やめなさい」

倒れそうになった時に、レヴィアタンさんが私とウリエルの間に割り込む。

それだけで、先程までの感覚が無くなる。

膝の力が抜けて、座り込む。

「……話し合いに来たのなら、そういう行為は控えて貰えるかしら？」

「おや、これは失礼……ふむ、さすがは神の創りし最強の生物か……人間如きに負けた、と聞いた時は失望したが……これなら、何かのイレギュラーがあっただけのようだな」

「訂正なさい……人間は、私達よりも上に位置する……確かに弱いかもしれない、欲にも溺れやすい、それでも、生きているのですから……僅かな力を最大限活かして、ね」

「……そうですか……ですが、訂正する気はありませんね」

レヴィアタンさん、こんな真面目にする事もあるんですね。

何時もは、ミーシャ君にデレデレなのに……

それにしても、私はほんとに弱いですね。

何の役にも立てないのが、こんなに辛いとは思いませんでした。

「……そろそろかな？」

「そろそろ？何を……ウリエル、まさか貴様！？」

サタン様が叫んだので、レヴィアタンさんと一緒に驚いてしまった。その驚きが隙となってしまう。

「気付くのが遅いな、サタンー！」

そして、ウリエルの叫びと共に、白く輝く炎に視界が覆われた。

・
・
・
・
・

視点・アリマ

何が起きた？

理解が出来ない事態になり、思考が停止する。

確かに、俺の炎がガブリエルに命中した筈だ。

なのに、何故無傷なんだ？

服が燃える事も無く、ただ立っている。

何かをしたのか？

分らない。

いや、一つだけ分かっている。

「考え事は、終わりましたか？」

あの目だ。

あの左目は知っている、千里眼だ。

全てを見通す赤い瞳。

その力を完全に使いこなせれば、未来すら見えるといわれている。
だがあの右目はなんだ？

見ているだけで、意識を持っていかれそうになる灰色の瞳。

とにかく、今は出来る事をするだけ、か。

「ハッ！ただ倒す、それだけだ！！」

「無駄な事を……ならば、精々足掻いてくださいませ」

考えるのは後にして、まずはあの寝てるバ力を起こさないと！

第四十六話（後書き）

エルフとかドワーフどうしようか？

とりあえず、完結したい。

その後のなので出すか、それとも滅茶苦茶になるの覚悟で、出した方がいいのか。

迷うぜ。

自分としては、一回完結してからにしたい。

こういうのは、自分で決めるべきなのだろうか？
最近忙しすぎて、分からんですよ。

という訳で、感想にお願いします。

1か2で。

1なら完結後に。

2なら無理矢理。

これ次第で続きが決まるんで。

期限的には、12月8日あたりまでで。

……こうやって続き決めるのも、めんどくさそうだな。
たぶん、都合の良い様に改竄するけど。

第四十七話（前書き）

集計？の結果発表！！

ドンドンパフパフ！

……寂しい。

えゝゝのとりあえず終わらせてからになりましたたゝ
拍手ゝ

あ、別に無視していいですよ？

第四十七話

視点・ベヒモス

今、自分がどこにいるのか分からない。

現在私は、何も無い草原に立っていた。

ここは、現実なのだろうか？

いや、多分だけど夢の中か幻想世界に閉じ込められたのだろう。

ちなみに、幻想世界とは魔力によって構成された世界、簡単に言う
と結界だ。

「しかし、どうするべきですかね？」

何時この世界に閉じ込められた？この世界からは出られるのだろうか？そんな考えが思い浮かぶ。

ホントにどうしたものだろうか？

「ベル」

「はい？ミーシャ！？ミーシャもこの世界に閉じ込められたのですか？」

自身を愛称で呼ぶ声に反応して振り向くと、そこには見慣れたミーシャの顔があった。

ベヒモスが振り向いてすぐに驚いたのには、理由がある。

何も感じなかったのだ。

普段は、隠そうともしない気配を一切感じさせず、それこそいきなり現れた（……………）と言える登場をしたのだ。

「そうみたい」

「そうですか……ん？何か違和感が……」

ベヒモスは違和感を感じ、違和感の正体を考える。癖なのか、考えている最中は下を向いている。

「ベル」

「
なんで
ですか？」

感じた違和感の正体を考えながら、呼ぶ声に返事をする。

だが、目の前に来ていたようで、考えるのを一旦やめて顔を上げる。

「ベルは、僕のこと……好き？」

「ふえ？」

現状からして想定外、会話からして予想外な質問に、気の抜けた声を漏らしてしまう。

きつと、聞き間違いだろうと思い、聞き返そうとすると……

「僕は、ベルのこと……好きだよ」

言われてしまった。

「ふええええええええええええ！？」

どこか分からない草原の広がる世界で、そんな、可愛らしい絶叫が響いた。

視点・ラファエル

天界へと繋がる門ゲートの前に立つ。

ここは、螺旋階段の最下層。

黒と白の扉があり、白い扉が本来の姿に戻ってゆく。

隣の黒い扉の向こうでは、ウリエルがサタンを足止めしているだろう。

門ゲートが開き、天界へ行こうと一歩前に踏み出した時、想定外の事態が起こった。

「何を、している？」

「ッ！？何故貴女が此処に！？」

振り向いた先に立っていたのは、利用した人間であり、神の器であるミーシャ君の姉であるリユーネだった。

「何処に行く気だ？」

「……」

その問いに答えない。

否、答えられない。

きつと、ミーシャ君を渡すまで、彼女は退かないだろう。

ミーシャ君を地面に降ろす。

「ミーに何をした？」

「……」

黙って、見つめる。

彼女の目には、ただ、怒りだけが見えた。

「答えろお！！！」

彼女は、烈火の如く勢いで迫る。
私は、ただ、静かに、構える。

「我らが主たる、神の為に……」

そして、光り輝く門の前で、天使と人間が殺し合う。

・
・
・
・
・

夢、なのだろうか？

今、何故か知らないが、宇宙を漂っている。
普通に息が出来る。

頬を抓ってみたが、痛みは感じない。
でも、自由に動けない。

ここは、何処なのだろうか？

【此処が何処か、知りたいか？】

声が聞こえた。

その声は、耳から聞こえる声ではなく、脳に直接響く声だった。
その声の主が誰かは、分からない。

それでも、この声を聞いてはいけしないと、本能で感じた。
しかし、その声に抗うすべを知らない。

【此処は、世界の狭間……存在を否定されたモノの在り場所だ】

その声を聞いた瞬間、感じた、感じてしまった。
それは、正の感情。

友情、愛情、喜び、慈しみ、希望……
それは、負の感情。

怒り、悲しみ、恨み、渴望、絶望……
あらゆる、正と負の感情が押し寄せる。

「あ……う……」

無意識に声が漏れる。

ただ、辛い。

終わらない感情の波が押し寄せる。

圧迫される様な、無理矢理押さえつけられる様な、そんな負荷がかかる。

【これが、世界だ……どう思う？】

声が響く。

楽しそうに問い掛ける。

答えなど出るわけが無い。

嬉しい事、辛い事、楽しい事、苦しい事、あらゆるモノを見せられ、
感じさせられ、問い掛けられたのだ。

この問いに、答えなど無い。

感情の波の僅かな緩みから、そう考える事が出来た。

【その通りだ……この問いには、存在するモノの数だけ答えが存在
する……ゆえに、我が答えを教えよう……我が答えは ー】

感情の波が一際強くなる。

意識が落ちてゆき、視界が暗くなる。
それでも、声は聞こえた。

【この世界を……終わらせる事だ】

その声を最後に、意識が切れた。

第四十七話（後書き）

自分で考えていて、ベルちゃんの「……ふえ？」に萌えた。
後どのくらいで終わるかな？

てか、良く続いたね。

自分は、基本的に五話ぐらい考えたら、続きが思いつかないんだけ
ど。

誰かに見せてるから、ここまで出来たのかな？

あ、別に無視していいです。

第四十八話（前書き）

出来た！

出来たら即投稿は変かな？

つまり、見直しをしていない。

誤字とかあったら教えてください。

気付いたら直します。

第四十八話

視点・ベルゼブブ

『グウ！？』

ミカエルの持つ光の魔法剣が、身体を挟る。

強さは、私よりもミカエルの方が圧倒的に上だろう。

数分相對しただけで、右腕負傷、左腕重症、右足重症、左足消滅の完全な満身創痍だ。

対して、ミカエルは無傷……それでも、実力ある方なんですよ？

「……フッ！」

ミカエルの視認の出来ない高速の斬撃。

前後左右あらゆる方向から迫る。

掠るたびに体が消し飛ばされる。

『ガア……アアアア！！』

ミーシャ君に渡された、二本の棍を振るう。

ただ、全力を込めて振るう。

狙って当てる事が出来ないのなら、偶然でも……当たるまで続けるまでだ！！

「……これ以上は、無駄」

『……な、二？』

ミカエルの斬撃が止む。

コイツは今、なんと言った？

「私達の目的は、すでに達成されている……消えたくは、無いだろう？ 私達の邪魔をするな」

目的？

すでに達成されている？

まさか、ミーシャ君を？

「今は、時間が惜しい……邪魔をしなければ、見逃してやる」

見逃す？

ミーシャ君を諦めると？

ミカエルが翼を広げる。

どこかに飛んでいく気の様だ。

「貴様のような弱者は」

こいつが何を言おうとしているかなんて、どうでも良い。

『クク、フッフ、アハハハハハ！！』

「……なにが、おかしい？」

『貴様ラ天使は、悪魔ヲ舐め過ぎだ』

「なに？」

コイツら天使は、何一つ分かっていない。

悪魔の考えを……理解していない。

『ミカエルよ、一つ教えテオいてやる……悪魔ノ行動理念ダ』
「行動、理念？」

『ソウ、悪魔が動く最大ノ理由……ソレハ
』

私は、羽を広げる。

より、大きく。

より、広く。

より、深く。

今いる場所を包み込む様に。
ミカエルを逃がさない様に。

『愉シムタメダー!!』

だから、楽しませてもらうぞ？
私の命が消えるまで、な……

・
・
・
・
・

視点・リユーネ

ハイアクセル
超加速を使つての縦横無尽の剣撃。
だが、当たらない。

「何故……」

どれだけ速く動いても

「何故だ……」

どれだけ鋭く切り裂いても

「何故斬れない!？」

今まで感じたことの無い、得体の知れない恐怖。
今まで会いたかった弟が、目の前にいる焦り。

「……今の貴女では、私に傷を付ける事は……出来ません」

コイツは、何を言っている？

今の私では、傷を付けられない？

では、ミーはどうなる？

コイツを倒さなければ、コイツを殺さなければ、ミーを救えないじゃないか。

「……な!」

どうすればいい？

「……けるな!」

どうしたらいい？

「……ふざけるな!」

そうだ、殺せばいい。

コイツを……どんなことをしてでも……コロセバイイ。

「ふざけるなああ!……!」

制御の出来ない、感情が暴走する。

ルシファー・ヴァルキリー
魔剣・魔界の戦乙女がその闇を強くする。

ルシファー・ヴァルキリー
「魔界の戦乙女!!」

より禍々しく……

「その力を!!」

より捻れ……

「解放しろおお!!!!」

より黒に……

「アアアアアアアア!!!!!!」

剣は、その姿を変えた。

歪で、凶悪で、危険な……魔剣へと……

「この力は!？」

何も聞こえない。

何も聞く気は無い。

左腕を上げる。

本来の姿を晒した魔剣が、掲げられる。

その姿は、光に罰を与える者……

その姿は、闇に堕ちた者……

「やめなさい!その力は」

「だま、レ!!」

その力に救いは無く……
その力に希望は無く……

「ワタしのジャマを……」

その身を滅ぼし……
その身を変えてゆく……

「スるナあアアあア……！」

黒い闇が、左腕を覆ってゆく。
それは、侵食するかのように、ゆっくりと広がってゆく。

「消工失せ口オオオオ……！」

そして、魔人は剣を振り下ろす。
ただ、目の前の敵を殺す為に……

第四十八話（後書き）

何かおかしくなっていない？
気のせい？

後、？、？、？話ぐらいで終わるかも？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5380v/>

伝説の武器(笑)、創りますか？

2011年12月20日20時05分発行